民営の子どもの居場所に関わる活動団体への
グループヒアリング調査
報告書

令和８年３月
藤沢市

目　次

第１章　実施概要 1
　１　目的 1
　２　調査対象団体 1
　３　実施期間 1
　４　実施方法 1
　５　主な調査項目 1
　６　開催日時・場所 1

第２章　調査結果報告 3
　１　８月 20 日（水）明治・長後地区 3
　２　９月１日（月）湘南台地区 15
　３　９月９日（火）片瀬地区 18
　４　９月 10 日（水）片瀬・辻堂・六会・湘南台・長後・村岡地区 23
　５　９月 14 日（日）六会、鵠沼、藤沢・村岡、湘南台、長後地区 34
　６　９月 17 日（水）湘南大庭地区 41
　７　９月 17 日（水）藤沢、村岡、辻堂、片瀬地区 49
　８　９月 26 日（金）湘南台、長後、御所見地区 59
　９　９月 30 日（火）六会、善行、御所見地区 70
　10　10 月８日（水）遠藤地区 80

第１章　実施概要

１　目的

現行の「藤沢市子どもの居場所づくり推進計画」を改定し、「（仮称）第２期藤沢市子どもの居場所づくり推進計画」の策定を進めるにあたり、市域で幅広く実施されている、民営の子どもの居場所づくりに関する取組の現状や課題、市との連携や支援、子どもの居場所同士の連携のあり方等を把握することを目的に実施しました。

２　実施期間

2025 年（令和７年）８月～10 月

３　実施方法

対面によるグループヒアリング

４　主な調査項目

〇団体概要・活動内容
〇子どもの居場所としての役割
〇運営上の工夫と課題
〇連携状況・今後の意向
〇今後の展望　　等

５　開催日時・場所

８月 20 日（水）午前９時 30 分～午前 11 時 00 分
９月 1 日（日）午後 1 時 05 分～午後 1 時 50 分
９月９日（火）午後４時 30 分～午後６時
９月 10 日（水）午前 10 時 30 分～正午
９月 14 日（日）午前 10 時 30 分～正午
９月 17 日（水）午後３時 10 分～午後４時 40 分
９月 17 日（水）午後６時～午後７時 30 分
９月 26 日（金）午前 10 時 30 分～正午
９月 30 日（火）午後３時 10 分～午後４時 40 分
10 月８日（水）午後３時～午後３時 30 分

６　調査対象団体

各地区で子どもを対象として、居場所の事業を実施している民間の団体。または、居場所を目的とした事業ではないが、結果として居場所となっている事業を実施する民間の団体。

13 地区、36 団体（次ページ参照）

図表１　グループインタビュー調査への参加団体一覧

No	種別	団体名	主な活動地区
1	不登校児童生徒対策事業	特定非営利活動法人優タウン	明治、市内全域
2	地域の縁側	社会福祉法人いきいき福祉会	明治
3	子ども食堂	社会福祉法人永寿会	明治
4	子どもや若者の居場所	いろどりパレット	明治
5	子どもや若者の居場所	湘南空手道クラブスポーツ少年団	湘南台
6	学習支援の居場所、地域の縁側、親子の交流スペース	片瀬地区社会福祉協議会	片瀬
7	オルタナティブスクール	湘南ホクレア学園	片瀬
8	子ども食堂	社会福祉法人白十字会林間学校	辻堂
9	不登校児童生徒対策事業	スケッチブック SHONAN	辻堂
10	不登校児童生徒対策事業、子どもの学習・生活支援、障がい児相談支援	NPO 法人森の仔じゆうがっこう	六会
11	子ども食堂	マナ子ども食堂	湘南台
12	放課後等デイサービス	株式会社 KONAKA SHINING FUTURE	長後
13	子どもや若者の居場所	nico 川名	村岡
14	子ども食堂	医療生協かながわ瞳班	六会
15	子ども食堂	ららランチの会	鵠沼
16	子ども食堂、子どもや若者の居場所	学生団体 My Own Place	湘南台
17	多世代交流の居場所	マイミライ next	湘南大庭
18	放課後等デイサービス	特定非営利活動法人 laule'a	湘南大庭
19	子どもや若者の居場所	森のようちえん&森ラボ／つむぎ	湘南大庭
20	地域の縁側	社会福祉法人八寿会	村岡
21	子どもや若者の居場所	辻堂砂山子ども食堂	辻堂
22	不登校児童生徒対策事業	特定非営利活動法人湘南まぜこぜ計画	藤沢
23	子ども食堂	株式会社ストーブカンパニー	藤沢
24	子どもや若者の居場所	NPO 法人育ち合い広場・てとてとて	藤沢
25	子どもや若者の居場所	藤沢市科学少年団	藤沢
26	子ども食堂	まりあ食堂	片瀬
27	不登校児童生徒対策事業	YUME School 藤沢湘南台校	湘南台
28	朝の児童見守り事業	四ツ辻団地自治会	湘南台
29	子ども食堂	長後みんなのおうち食堂	長後
30	学習支援	長後寺子屋ぽかぽか	長後
31	多世代交流の居場所	みんなの居場所れいんぼーかふぇ	御所見、湘南台、片瀬
32	子どもや若者の居場所	非営利団体ボードゲームでツナグ手	長後
33	不登校児童生徒対策事業	小田急電鉄株式会社	善行
34	不登校児童生徒対策事業	まなぶ場 TREK	御所見
35	学童保育、放課後等デイサービス	株式会社ハビリスデザイン	六会
36	地域の縁側	もんのきの家	遠藤

第２章　調査結果報告

１　８月 20 日（水）明治・長後地区

日時	2025 年８月 20 日（水）９時 30 分～11 時 00 分
場所	藤沢市役所３階会議室
地区	明治・長後地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

１　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
特定非営利活動法人優タウン	不登校児童生徒対策事業	特定非営利活動法人優タウン	小沼陽子様	代表
明治地区地域ささえあいセンターかるがも	地域の縁側	社会福祉法人いきいき福祉会	市村慶子様	管理者
にっこりかりん子ども食堂	子ども食堂	社会福祉法人永寿会	川島進様	理事長
非営利団体ボードゲームでツナグ手	子どもや若者の居場所	非営利団体ボードゲームでツナグ手	長山陽司様	代表
いろどりパレット	子どもや若者の居場所	いろどりパレット	前島和美様	代表

2　団体概要・活動内容

特定非営利活動法人優タウン

○私自身、元々、息子が不登校になったことで、色々と考え方や価値観がとても変わりました。それまで 20 年ぐらいフルタイムで勤めていたが辞めて、不登校の子どもや少しレールから外れた子ども行きやすくなるような、何か手伝いとかしたいなと思ったので、NPO を立ち上げました。

○活動内容としては、不登校の子どもたちのつながりの場や、私自身が母親で当時その繋がりが本当に作れなくて大変だったので、親同士の会、啓蒙活動をやっています。具体的には、月に 1 回、そういう親子の居場所を市役所分庁舎で「朝カフェ」という名称でやらせていただいています。また、そういう働く親御さんに向けた「夜カフェ」をやったり、勉強会をやったりしています。

○スタッフは今 20 人ぐらいいて、その中で運営は私ともう一人若い子が中心となりやっています。概ね 20 人のスタッフでうまくまわしていますが、そのほか、当事者の親御さん向けの朝カフェのグループ LINE があり、約 120 人が参加して情報交換を行っています。

○活動地域は、藤沢全体です。学校に行く、行かないにかかわらず、自由にどこでも過ごせるまちにしたいというビジョンがあり、いろいろなところに安心できる仲間を作っていきたいと考えています。

明治地区地域ささえあいセンターかるがも（社会福祉法人いきいき福祉会）

○明治地区地域ささえあいセンターかるがもは、社会福祉法人いきいき福祉会が市から「地域の縁側」事業として受けて運営している場所です。多世代型の居場所ですが、５～６年前から明治地区の３者連携の皆様、例えば、民生委員の方や子どもの居場所づくりの活動をしている方々と一緒に「子どもの居場所づくり事業」を明治地区で立ち上げました。そこにもかるがもとして会議等に参加し、一緒に活動をしています。

○明治市民センターで行っている活動と、城南（羽鳥）にあるかるがもの事業の中で、子どもの居場所の活動をしています。

○第２・第４土曜日に子どもの居場所として開放しており、子どもだけでなく様々な方が利用できる場所です。地域の方々の見守りがあり、その中で子ども食堂も始めたことで、子どもの利用も定着しています。

○もう一つ、いきいき福祉会として行っていることは、以前稲荷にあった特別養護老人ホーム「ラポール藤沢」が善行に新築移転したため、その空いた旧施設を子どもの居場所として開放しています。現在は通常利用している方もいますが、例えば学校に代わる学び場の活動をしている市民活動団体が、日中子どもたちを連れてきて、落書きペイントアートをしたり、近くの畑で野菜を育てて収穫したり、田んぼの草むしりをしたりといった活動をしています。また、園舎を持たない幼稚園の団体が、夏場の暑い日や雨の日に、子どもたちの活動の場所として活用しています。

○現在は２か月に 1 回イベントを開催していて、「ここは皆が使っていい場所だよ」と周知しています。

にっこりかりん子ども食堂（社会福祉法人永寿会）

○城南 1 丁目で社会福祉法人永寿会を立ち上げ、現在 22 年目に入っています。東京、相模原、茅ケ崎、藤沢で 12 か所の事業を行っています。

○子どもの居場所については、近くに認可保育園が２か所あり、合わせて 200 人ほどの園児がいます。もう 1 か所は企業主導型保育園で、18 名が在籍しています。

○小学校に入ると、働く親御さんの子どもたちは学校が早く終わって帰宅しても誰もいないという声を聞き、無認可ではありますが、学童保育支援事業を行っています。通常、学校が開いている時は 20 人くらいですが、春夏冬の休校中は 40 人近くの子どもたちが朝から集まり、学童保育事業を行ってきました。保護者の皆様からは好意的に受け止められ、今後も続けてほしいと言われています。

○また、園内の厨房を委託している業者さんと話す中で、子どもたちの食生活には素晴らしい家庭もあれば、そうではない家庭も少なくないという話を聞き、３～４年前から試行的に子ども食堂を始め、３年前からは毎月１回実施しています。先ほど話に出たラポールさんの元の場所にあるフードバンクからも食材を提供いただいています。現在、子どもが 27～28 名、親御さんが 10 名、独居の高齢者が３～４名参加しており、多様な年齢層の方々が一緒に食事をしながら交流できる良い場所ができていると感じています。本来はもっと参加者を増やしたいのですが、場所の制約があり、現状では精一杯です。

○今後は、学童保育を認可してもらえるのが一番良いのですが、なかなか難しいようです。しかし、社会の中で小学校の子どもたちを受け入れる場所として、学童保育は非常に必要な事業だと考えており、ぜひ応援してほしいと願っています。

非営利団体ボードゲームでツナグ手

○様々な活動をしていますが、主に子ども食堂を利用する方々と一緒に親子で遊べるフリースペースや遊び場を設けたり、駄菓子屋さんの前でゲーム体験会を開催したり等、ボードゲームをメインとした活動を行っています。

○家庭内にそのようなものが一つあれば、家族内でのコミュニケーションが取りやすくなるのではないかというのが一つの狙いです。

○また、ボードゲームを使う子どもたちと一緒にゲームや絵を作る等の創作活動も行っています。

いどばた会（いろどりパレット）

○活動を始めたのは 2024 年６月で、まだ１年少しです。活動のきっかけは、市の子どもの居場所スタートアップ講座を受講したことで活動を始めることにしました。

○その講座を受けようと思ったのは、うちの子どもたちが学校が得意ではないためです。なぜ学校が得意ではないのかと考えた時、学年や経験年数により型にはめられること、集団教育の中では当然かもしれませんが、それが苦手なのではないかと思いました。また、習い事でも「何年やっているから○○ちゃんはこんなにできているから」といった比較や「こうしなくてはいけない」という窮屈さを感じる子が、どこで伸び伸びできるのかと考えました。そこで、そういったことを気にせず、みんなで思い切り遊べる場所、そして「これやってみたい」と言えない子が多い中で、素直に「やってみたい」と言える場所を作れたら良いと思い、居場所を始めました。これが活動の動機です。

○私自身が子育てをする中で、子どもが小学校に入学すると、１年生や幼稚園の子どもたちはとても早く帰ってきます。しかし１年生ではまだ公園での待ち合わせができなかったり、時間の感覚が分からなかったり、公園にトイレがなかったりといった問題があります。また、懇談会や授業参観の後の懇談中は、親が参加している間、子どもは帰されます。１年生から３年生では鍵を持って帰宅することに不安を感じる子もいれば、親も不安を感じます。幼稚園では預かり保育がありますが、小学校では預け先がない、と感じたので居場所を作ることにしました。今は全てに対応できていませんが、私が空いている懇談会の時や夏休み中なども、遊べる場所があると良いと思っています。

○市民の家で活動していますが、涼しくて見守る大人がいて、多少羽目を外しても少しのことなら怒られないような伸び伸びした空間が大切だと感じています。

○その居場所活動と別に、あと２つ活動をしていて、「井戸端会」として毎月第１木曜日に保護者の方のお話し会をしています。学校が苦手な子どもの話から、SNS の使い方、子どもだけで遊びに行く時の範囲など、ちょっとした相談をしたり、「学校のこういうことで困っているけれど、みんなはどうしている？」といった情報交換をしています。

○もう一つは「子どもマーケット」という活動です。手芸や物作りが好きで、どんどん作品が溜まってしまうという話から、そうした作品を「いいね」と言ってくれる子どもや大人がいることで、ホッとしたり、自分が認められたりすることがきっとあると思います。子どもたちが自分で作った作品を、どうディスプレイするか、いくらで売るかを考えて販売してもらいます。これにより、自己肯定感が向上したり、課題をクリアしていく力が育つと考えています。「なぜ売れなかったのだろう」と考える子もいれば、気にしない子もいますが、特に声かけはせず、その中で「もっとやってみたい」という気持ちを育てることを目指しています。

○活動場所は、羽鳥小学校に近い羽鳥市民の家を借りて活動しています。

オブザーバー：藤沢市社会福祉協議会（コミュニティソーシャルワーカー）

○藤沢市社会福祉協議会には現在、13 地区に１人ずつ相談員が配置されており、私はこの明治地区を担当させていただいいます。

○私たちの役割は２つあります。１つは個別支援として、制度の狭間に陥らないよう、そういった方々のご相談を受けながら、様々な関係機関や地域の方々につなぐ役割です。昨年一番大きかったのは、親御さんが急に亡くなってしまった高校生が、なかなか市の制度にものらなかった中、私や市の社会福祉協議会のヘルパーが訪問し、現在は元気に学校に通い、子育て家庭向けのサービスも利用しながらやっているというケースもあります。世代を問わず、子どもから高齢者まで、障がいのある方や高齢者の方はすぐに制度につながりますが、そうしたことが難しい方に対しては、ご本人が自ら決められるよう寄り添い、相談に乗ることが多くあります。近年は、子どもに関する相談や不登校の相談、中学校や小学校の先生からの相談も直接入っています。地域の方が分庁舎の拠点にいらっしゃるのは大変なので、私は明治センターの相談室で月に３回、そこで相談を受けたり、来られない方には出向いて相談に乗ったりしています。

○もう１つの役割は地域のお手伝いです。先ほどお話にあった３者連携の子どもの居場所は、かなり以前から運営され軌道に乗っています。そこから子ども食堂を立ち上げたいという声が上がり、どのように進めて良いか分からないという段階から、昨年から立ち上げ準備を一緒に進め、利用できる助成金を相談しながら、昨年プレ運営を２回行いました。今年からは毎月１回、第３土曜日に予約制で運営が始まっています。

3　子どもの居場所としての役割

○明るい色の服を着るようにしています。黄色が多いです。黒は絶対に着用しません。今日は大人同士なので問題ありませんが、威圧感のある服装は避けています。これは、子どもたちが心を開きやすく、信用してもらいやすいようにするためです。明るく見えるという効果もあります。子どもたちとどれだけ仲良くなれるかが私の活動の重要なポイントですので、そうすることで親御さんも安心して、少し目を離せるようになり、楽になるかと思います。そういった点には気を使っています。また、その場の状況によって異なりますが、私はあまり口うるさくルールを定めません。「あれをしろ、これをしろ」とあれこれ縛ると、子どもの自由な発想が失われてしまうと思います。むしろ、余白がたくさんある方が、子どもたちが自ら考えて想像力を働かせるので良いと考えています。そのため、基本的には、怒ったり注意したりすることは殆どありません。叩いたり、殴ったりした時には注意しますが、そういったことは滅多にありませんが、主にこの２点に気をつけています。

○今のお話ですが、千葉で不登校の子どもたちの居場所を運営されている古山さんという素晴らしい先生がいらっしゃいます。この前に勉強会に来ていただいた時も、服装について「黒い服は子どもが怖がるから避けるべき」とおっしゃっていて、まさにその通りだと感じました。

○私たちも様々な失敗をしてきました。特に、以前は母親団体のような雰囲気があり、今はだいぶ変わってきていますが、親の想いが強く出すぎてしまい、子どもに何かしてあげたいという気持ちが無意識に出てしまうことがありました。そうなると、子どもは一気に来なくなってしまったり、「これも勉強になるから」といった親心が出てしまい、ただ楽しく過ごしたいだけの子どもたちにとって負担になることがありました。駄菓子屋さんとか色々なことをやってきましたが、ついついそのようなことが出てしまう危険性を常に抱えているので、最近は子ども向けの活動は、若者たちに主体的に任せるようにしています。不登校を経験をした若者が手伝いたいという想いが強く、色々と連絡をいただいています。私は、大人は全力サポートということで、足りない部分を補っています。逆に、親の会のような場では、子どもがいると話せないという状況もあるため、私が中心となり行っています。その際、子どもたちは隣の部屋にいて、若者や地域のおじちゃんたちに見てもらうことで大変助かっています。

○通っている子どもたちの中には、ヤンチャで元気な子、不登校の子、障がいを持った子など様々な子どもがいますが、あまり関わりすぎないように、自由に過ごせるように工夫しています。あれこれ指示したり、走らないようにとか。「何もせずに過ごしてもいいよ」という形で、気持ちよく心地よく過ごせるように心がけています。呼ばれたら一緒に遊んだり、ゲームをしたりといった感じです。

○子どもたちが自宅から地域へ出てこない状況をどうやって改善していくかが必要だと感じています。私自身の生活を振り返ると、昔は私たち自身が自由に遊び、異年齢の子どもたちと関わりながら多少悪いことも経験し、そこから元気をもらい成長してきました。しかし、今の子どもたちは、親が作った年齢の枠組みの中で過ごしているため、自分たちで人間関係を築き、成長する機会が本当に持てているのか、とても気になっています。現在、私は保育園の園長を兼務していますが、朝の送迎時に、兄弟だけでなく、異なる家庭の子どもたちとも積極的に関われるようサポートはしています。

○今おっしゃられたのは、子どもが習い事をしすぎているという問題です。１週間びっしり習い事があるため、友だちと遊ぶ時間がありません。異年齢の子どもとの交流がないのも問題だと思います。

○私たちの団体でも、どうすれば子どもたちが来てくれるかという課題は常にあります。まず母親が来て、そこで安心していただくと、「子どもも連れてきていいですか」となることがあります。そうやって大人も安心して地域に出られる場が増えると考えています。

○安心して過ごせる場所であることは本当に重要です。私たちからは「何をしたら」とか、声をかけすぎないようにしています。走ってはいけない場所がある時には注意しますが、それ以外は特に声をかけすぎません。私は自分が楽しむことを重視しています。「誰かこれ、一緒にやらない」とか。「なに？」と子どもたちが声をかけてきてくれたら一緒に遊びます。そういうところが、子どもたちが安心して、楽しく一緒に過ごす工夫かなと思います。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○保育園では懇談会を年に２回開催しています。その際に、家庭での子育てや子どもの具体的な状況、困り事があれば、保護者の方に「遠慮なく相談してください」と伝えるようにしています。そうすることで、各家庭が抱える課題が見えてくることがあります。他の保護者から「うちも同じことで困っている」「うちはこうしています」といった話を聞くこともでき、子育て中の若いご両親にとってプラスになっていると感じています。

○これまでも子どもの居場所として開放していましたが、なかなか子どもの利用が少なかったです。しかし、食堂を始めたら、食のあるところに人が集まるように子どもたちが来るようになりました。子育て中のお母さんが、土日に子どもが家にいて、ご飯を作るのが大変な時に、「子どもたちと一緒にそこで食べよう」という感じで利用してもらっています。あまり利用対象者を決めておらず、おとうさんとおかあさんが子どもと一緒に来たり、おかあさんが小さな子どもを連れてきたりする形で利用者が増えました。

○私の娘も不登校だったのですが、今大学生になって、当時のことを聞くと「私は友達と遊びたい」と本人が言うので、私は子どものつながりを広げようと一生懸命やっていました。しかし、娘が今振り返ると、「色々な大人と出会えたのが良かった」と言うのです。なので、大人も子どもも関係なくつながれると良いのかと思います。同年齢で一緒にいなければならない、といった固定観念にとらわれず、様々な趣味でつながれるなど、多様なつながり方を重視することが大切だと感じています。

○今の話につながりますが、今の家庭には三世代同居が殆どありません。シングルや親子のみの家庭が多いです。高齢者施設で体験教室や体験学習などで 10～15 人ほどの子どもを受け入れることがありますが、祖父母がいるかと尋ねると 1 人しかいませんでした。殆どが核家族。だから、子どもたちは年齢層の高い人がどのような存在で、どのような雰囲気で見守ってくれるのかをよく知らないということです。そう考えると、子どもたちの人間関係の豊かさをどう育んでいくかを考えなければ、将来、何かの拍子につまずいて、例えば仕事をやめてしまったり、学校に行かなくなってしまったりするケースが増えるのではないかと危惧しています。私の園では、開園当初から老保交流を行っています。回数を重ねるうちに、子どもたちがお年寄りに話しかけるようになりました。お年寄りも、子どもたちが来ると大喜びで、それまで笑わなかった人が笑顔を見せるようになるなど、子どもたちの存在が貴重な価値を生み出しているとよく分かりました。今後もこの交流を続けることで、子どもの人間性を豊かにする一助となると思っています。

○今のお話に関連しますが、私たちも団体を運営する中で、以前は母親だけのチームでしたが、今では 70 代の男性が熱心に関わってくれたり、若者も参加してくれたりするようになり、その場の雰囲気が

非常に穏やかになりました。多様性のおかげだと感じています。男性が一人入るだけで不思議と良い方向に向かいました。そこに学生も加わるようになり、運営側としても非常に楽になりました。そのような多様性も大切だと感じます。

〇安全で、面白い大人がいることが大事だと思います。人に来てもらうという点では、SNS での発信も有効ですが、実はチラシの方が反応は良いです。私の居場所でも、最初の 1 年間は頑張って周辺の 300 世帯に自分でポスティングをしていました。チラシを見て来る人が多く、SNS を見て来る人はほとんどいませんでした。チラシの配布をやめた途端、あまり来なくなったという経験があります。そのため、チラシが配りやすい環境が整うと非常に助かります。回覧板に入れるなどがもっと手軽にできるようになると良いのですが、現状では非常にハードルが高いと感じています。そもそも「どこに行けばいいか分からない」という声もあります。また、子どもたちはスマートフォンを持っていない子も多いので、そもそも SNS の情報に触れられません。紙媒体の方が手に取ってもらいやすいです。

〇つながりという意味では、先ほどの話にもつながりますが、家から出られない子どもへのアプローチとして、保護者は学校や幼稚園、相談室に相談に行くことが多いと思います。その際に、斡旋ではなく「このような場所もありますよ」と学校や幼稚園が紹介できるようになれば、その子にとってベストな居場所を探すことにつながると思います。選択肢を増やすことが大切です。学校との連携があれば、より良いと感じました。

〇活動する上で私が今一番心配しているのは、防犯。SNS で「どこどこで活動しています」と発信する際に、予期せぬ思いを持った人が急に来た時にどうすれば良いのかということです。どうしてほしいという具体的な想像はつきませんが、皆様はどうされているのか気になります。不審な人物が来た場合、どう対処すれば良いのでしょうか。

【他の参加者からの意見】

→よくきかれますが、まずそういう人は来ないです。そういうことは聞きませんが、おっしゃるような「ヤバい人」が来て暴れるとまではいかないですが、小学校での事件などを聞くと、場所を公開していても大丈夫だろうかと心配になりますね。

→たまに「手伝いたい」という形で来られる方はいます。そういった方には、一度私たちの会に来ていただき、私だけでなくメンバー全員で、親の会などに参加者として加わってもらい、自己紹介をしてもらいます。そこで話を聞き、少し懸念がある方にはお断りすることもあります。

〇私は、場所の雰囲気の写真は撮っても、SNS にはアップしません。盗撮などに使われる可能性もありますし。私自身も写真を撮らないようにしています。そうした懸念はあります。ただ、ご自身の活動の想いと全く違う人が来るということは意外とないと思います。自分がどのような活動をしているか、しっかりと打ち出していれば、全く違う目的を持った人が来ることはないと感じています。

〇発信する際には注意するに越したことはありません。写真などは特にデリケートなので、顔出しの許可、後ろ姿のみ、全く映りたくないかなど、細かく確認して掲載しています。

〇実際に園でも、家族が写真撮影を許可しないというケースが 1 割ほどいます。記録用やイベント写真として園内に飾ることも許可されないことがあります。そのような場合は写真を消すことになります。これはきりがありませんが、親が過度に気にしすぎると、子どもたちが「自分の顔があまり見られなかった」と感じるのではないかと心配になります。

〇今は、子どもたち自身も「自分がよく映っている写真しか出したくない」という意識があり、加工できない写りの悪い写真は出したくないという傾向があります。SNS で発信されるのが嫌というよりも、加工できない不自然な写り方を嫌がります。特に女の子はそうです。

○活動上の問題点としては、活動場所を増やしたいのですが、これ以上増やすと私の生活が成り立たなくなってしまいます。そこをどうするかが常に悩みです。スタッフは常に募集していますが、なかなか一緒に活動してくれる人が現れません。週２回ほどどこかで活動しているので、全てに来てほしいとは言いませんが、もう少し一緒に動いてくれる人がいればと思っています。どう自分の生活の収益と活動とを両立させていくかという点だけです。別にこれで生計を立てようとは思っていませんし、その必要もないと考えていますが、何かしらの収入があれば、生活のための労働を減らし、活動に時間を割くことができます。自由に動きやすくなるのですが、それが難しいのが現状です。

○私たちの活動では、関わっている人、例えばキッチンのスタッフや見守りの方々が皆ボランティアです。そのため、ボランティアありきという現状があります。できれば学生ボランティアにも関わってもらえれば子どもたちも喜ぶと思うのですが、なかなか担い手が見つからないという問題があります。あとは活動資金の問題です。食事を提供するので、フードバンクのような協力がないと難しいですし、大人の方からの 300 円以上の寄付で次の食材を購入している状況なので、資金面も課題です。

○学童保育で昼食を皆で作るという活動をしています。学童保育のすぐ後ろが里山なのですが、その里山の下は市街区域、上は調整区域となっています。たまたま学童保育の隣にマンションがあり、そこの住民から苦情がでています。竈でカレーライスや味噌汁などを作るとわずかな煙が出るのですが、消防署に通報されることがあります。この 10 年以上、何度もクレームがあり、場所から 70～80m 離れているのですが、燃やした煙の匂いがするからやめてくれ、ということです。周囲には何も建物がなく、ベランダに木や鉢植えがあるわけでもありません。里山の緑に囲まれ、人間も共生している場所なのに、そこまで言われるのは、ある種の制約を受けていると感じます。一人の苦情が、あたかも大多数の意見であるかのように行政に受け止められてしまうのは良くないと思います。むしろ、「あなたはそう言うかもしれないが、子どもたちの成長にとって 99 人が良いと考えることは、行政として受け止めて推進していかなければ、良い社会にはならない」という考え方で進めるべきだと思います。

○子どもたち自身が「公園に行ったらボール遊びをするな、大声を出すな、花火をするな。私たちは何をして遊べばいいの？」と言っています。花火の話題はよく出ます。目の前でやると近所からクレームが来るし、公園でも禁止と書いてある。花火が売られていても、どこでやればいいのか分からない、という声も聞きます。

○私たちはありがたいことに、事務所やコワーキングスペース、会議室なども借りることができ、社協さんの活動室も利用できるため、非常に動きやすくなりました。しかし、今一番困っているのは、物がどんどん増えてきて、各スタッフが持ち帰っている現状です。車がない若者も自転車で運んだりしています。来週も夏祭りがあるのですが、大量の荷物をどう運ぶかが課題です。そのため、皆でお金を出し合って倉庫を借りようかと話しています。子どもたちの遊び道具や、先日出版系の会社から大量に寄付された紙など、倉庫のようなものが借りられたらと思います。皆で共有して使える場所でも良いので、保管できる場所があると助かります。助成金などで物を購入できる費用があったとしても、保管場所がなければ物を買えなくなってしまいます。ボールなどで遊びたいという気持ちもあるので、保管場所は重要です。駅の近くに置ければ良いのですが、遠いと車がないと厳しく、近くは高額です。空家のような場所に一部屋置かせてもらえると良いなと考えています。

5　連携状況・今後の意向

○現在、市内の社会福祉法人が集まって地域公益事業推進協議会を設けています。障がい、児童、高齢など様々な分野の社会福祉法人が集まり、ブロック別に交流や意見交換を行っています。地域社会の福祉を支える社会福祉法人として、どのような取り組みができるか、何をしたいかを検討しています。私も協力しながら、次のステップに向けて提案していきたいと考えていますので、行政の方々にもぜひご支援をお願いしたいです。また、保育関係の協議会では、幼保小中連携の枠組みをぜひ作ってほしいということで、実現しているところもありますが、できていないところもあります。学校側の判断で「そんな面倒なことはしなくていい」と考える場合は協力的ではないです。幼稚園や保育園から小学校へ、そして小学校から中学校へと子どもたちが進む中で、課題を抱える子どもや家庭の情報をきちんと引き継ぎ、このような子どもがいるということを把握してしっかりと支援していきたいと考える校長先生がいらっしゃれば、つながっていきます。これをさらにしっかり進めていこうと、協議会で話を進めているところです。より良い子育て環境のステップができるように、支援していきたいと考えています。現在、市内には、子ども食堂のネットワークがあり、20～30 団体ほどが集まって、様々な情報交換をしていますが、今後のあり方についても、検討を進めているところです。行政も協力的に支援してくださる部分もあるので、ぜひ社会福祉協議会も含め、行政がこれからもそのような場を設けていただければ幸いです。

○２点あります。１つ目は、不登校の子どもたち、教室に行けない子どもたちの居場所についてです。中学校などでは、空き教室を使って取り出し授業を行っていますが、学校自体に行けない子どももいます。そのような場合に、地域の居場所を活用できるようになればと思います。市民センターなど様々な場所に居場所を作ってもらいたいです。また、そこに通うと出席扱いになるなど、様々な協力があれば、子どもたちは多様な居場所を通して地域に出てこられるようになるのではないかと思います。２点目は、子ども・若者の課題として、ヤングケアラーや自死、虐待の問題などがあります。これらを地域住民と共に、大人も子どもも一緒に学ぶ機会、例えば学習会や映画上映会などを、市に場所を提供してもらいながら実施できればと思います。

○私も２点あります。先ほど市民センターが居場所になり、出席扱いになるのが良いという話がありましたが、私たちも強くそう思います。本当に早い段階でつながりたいです。不登校になり始めた兆候がある段階で、私たちのような親の会とつながることができれば、親御さんはだいぶ安心すると思います。それができないと、一気に孤立してしまい、外に出られなくなってしまうことがあります。特に働く親御さんが、なかなか支援につながれていないということが、「夜カフェ」を始めてよく分かりました。親御さんがつながる場所としては、市民センターが利用しやすいとよく聞きます。そこで親の会のような活動を私たちも協力できると良いですし、全ての市民センターでつながりの場が持てたら良いと考えています。もう一点は、子どもたちが体を動かしたいというニーズがあります。最初は元気がない子でも、元気になると溜め込んでいたパワーが出てきます。しかし、暑い時期には外での活動が難しく、体育館のような場所で活動したいのですが、体育館の予約がなかなか取れません。そのため、平日の昼間に体育館を自由に誰でも使えるようにしてもらえれば、非常に助かります。１か所だけでも良いので、様々な団体が利用すれば良いと思います。逗子市でそのような取り組みがあったようですが、特に管理者は必要なく、場所を解放してもらえるだけで良いのです。そうすれば、私たちの仲間が利用できるし、様々なつながりも生まれると思います。学校が開催されている昼間に、子どもたちが自由に遊べるような、そうした空間を１か所でも作ってもらえれば助かります。

○私は市民の家を借りて活動していますが、荷物が置ける場所があれば非常に助かります。居場所を開催する際、自転車の前後に荷物を積んだり、背中に背負ったりして運んでおり、メンバーからは「いつか事故を起こすからやめなさい」と言われます。多少でも荷物を置けるスペースがあると良いなと思っています。また、学童保育に入れるには何日以上就労しているといった条件があるため、そうではないパート勤務の母親が夏休みに子どもの居場所に困っているという話しを聞きます。私は夏休み中、９時半から活動を開始していますが、「もう少し早く開始できませんか」という相談がありました。準備に 30 分必要で、市民の家は開館時間が９時からなので、もう少し早い時間から市民の家などを借りられるようになれば、いわゆる「小１の壁」と呼ばれる問題、つまり保育園では朝早くから預かってもらえるのに、小学校に入ると、学校の門が開くまでに親が仕事に出勤してしまい、子どもがその辺に放置されてしまう、といった問題にも対応できるかと思います。

○皆で、居場所で使うものが共有できると素晴らしいと思います。ちょっとした小さなプールなども、購入するか、誰かに貸してもらうかといった話が出ています。そういうものを、いくつかの団体でシェアできる場所があるとか、市がそのようなシェアシステムを構築してくれると、非常に助かります。

○「元気になったのなら、学校に行けばいい」というのが一般的な考え方だと思いますが、元気になっても学校に行くと、また元気がなくなり、結局２週間ほど動けなくなってしまうことがあります。私の息子もそうでした。皆、頑張って学校に行こうとするのですが、「元気になったなら行けばいいじゃないか」と言われると、また２週間動けなくなるといったことを繰り返し。せっかく元気な状態で過ごせている時間がもったいない。「元気になっても、なかなか学校に行けない」という状況を、もう少し理解してもらえればと思います。

○学校に行く子どももいます。例えば、音楽の時間だけ行く、オンラインでここだけ参加するなど、子どもたちは元気になると自分のやりたい学び方を見つけるようになります。そうできるようになれば良いです。行きたいところだけ行き、それ以外は図書館で過ごすなど。元気だけれど、学校に行かずに過ごせる場所。私の息子も学校は嫌だったけれど、友達と遊ぶのはとても楽しかったと言っていました。学童保育のような場所も、先生のような管理者がいると萎縮してしまい、楽しめないようでした。ですから、自由に遊べる、安心して遊べる場所が子どもたちには必要です。

○子どもは外にも出づらいんです。平日の午前中は「何しているんだ」「病気で休んでいるのか」といった目で見られる。大人は午前中から生き生きと活動しているのに、うちの子どもたちは不登校だったので、夕方にならないと外出できない。夕方になれば他の子どもたちも遊んでいるから、という状況に強い違和感がありました。なぜ子どもは午前中に外出してはいけないのか、という感覚です。

○子どもたちも小さな傷つきがあります。買い物に行った際、店員さんに悪気はないのでしょうが、「今日は学校どうしたの？」と聞かれる。その一言がしんどくて、誰とも顔を合わせたくないと感じる子もいます。しかし、そうではない、温かい目で見守る大人がいて、その子が学校に行っていようといまいと、そこで元気に過ごして「いいね」と言ってくれる大人と場所があれば、家に引きこもらずに社会とつながり、他の家庭の人ではない人ともつながっていける。そこからどんどん回復させてあげることになるのだろうと思います。

○皆様がおっしゃるように、フリースクールではない、公設民営の居場所が欲しいです。運営は、私たちに丸投げしてもらっても構いません。そのような場所ができてしまえば、どう運営していくかは話し合いでできると思います。今回のグループインタビューのような場が初めてできたので、スタートになるかもしれませんが、このような場がまず一つできることが大切だと思います。あとは、実際に活動している人がいるので、市の皆様には一度、その現場を見に来てほしいです。言葉では伝えきれ

ないものがたくさんあります。その場その場で、実際に行ってみなければ分かりません。このグループインタビューの場で全てを理解しようとするのは、楽をしようとし過ぎだと思います。ぜひ見に来てほしいです。そういうところから、もう少し一緒にやっていこうよという姿勢がほしいです。せっかく歩み寄ってくださるのですから、できれば一緒にやりたいです。

○今の話ですが、フリースクールはありがたい存在ですが、親御さんがお金を払っているので、学校以上に「行かなければならない」というプレッシャーになってしまうことがあります。辞めるかどうか決断しなければならない。フリースクールも自分に合うところがあればラッキー。様々な形態のフリースクールはありますが、自分に合わなかった場合とか、年齢により小さいときは合っていたけど、大きくなってきたら合わないとか。その子によって違います。

○フリースクールがビジネス的になってくると、思想がずれていると感じることもあります。教育は、その子が将来社会を作っていく公的な側面があるため、金儲けとは合わないと私は考えます。しかし、フリースクールは人を集めてお金を取らないと運営できないという側面もどうしてもあるため、そちらに走りがちです。そうなると「それは違うのではないか」という意見も出てきます。フリースクールがたくさんあって選択肢が増えるのは大切だと思いますが、それだけでは不十分だと私も思います。

6　今後の展望等

○私が思うのは、不登校などの問題は全て大人の問題であり、子どもはもっと伸び伸びと自由に過ごすべきだということです。大人が考え方や価値観を変え、地域全体を変えていくことが大切だと考えています。そうした理解者が増えれば、子どもも自然と元気になると思います。私たちは、親の会など大人向けの活動もしていますが、本当にやりたいのは子どもが元気になることです。しかし、子どもに直接アプローチしようとすると、つい親のようにコントロールしようとしてうまくいきませんでした。そのため、活動は若者に任せ、大人は自分たち自身が新しい価値観を取り入れて変わり、子どもを全力でサポートしていくという形が理想です。そうした仲間が増えることを願っています。

○地域と連携して居場所が増えていくと良いと思います。また、虐待を受けている子どもたちなど、地域で見えにくくなっている子どもたちの課題を拾い上げるためにも、行きやすい場所や相談できる場所、様々な形態の居場所があると、地域で見えなくなっている子どもたちの課題が拾えると思います。また、例えば、児童養護施設を出た 18 歳以降のケア、自立支援をする場所が地域にも藤沢市にも十分ではないので、そのような若者が自立して収入を得るまでの支援ができる場所や機関を増やすことができれば良いと思います。

○最後に気になる点ですが、来年度からの計画をまとめるにあたり、現場の状況、現実がどんどん変化していることを、ぜひ行政の方には把握していただきたいです。10 年、20 年前とは大きく変わっており、５年スパンで対応していかないと時代に合わなくなってしまうことがあります。この場だけでなく、現場の声や現状がどう変わっているかをぜひ掴んでほしいです。もう１つは、まだ藤沢市ではそこまでではないかもしれませんが、外国籍の子どもたちへの対応です。現在、日本全体で子どもの出生数が 80 万人を切り、70 万人になったと言われていますが、そのうち４万人は外国籍の子ども達です。私の保育園にも外国籍の親の子どもが２人いますが、これは今後どんどん増えていくと思います。見た目で日本人ではないと分かる子どももいるため、彼らが阻害されないようにするためにはどうしたら良いか、という視点を今から持っていかないと、私の園でも５年後には２人が 10 人になるかも

しれません。また、ちなみに、私の職場の職員 300 人のうち 1 割は若い外国籍の職員です。そういった点をぜひ計画の中に盛り込んでほしいと思います。

○このようなグループインタビューのような場ができたのは大きいと思います。できるだけ継続できたら良いのですが、今回限りなのでしょうか。継続が大事だと思います。変わらなければならないのは大人の方です。大人が意識を変えていくことが大切です。「能力はどうだ」などと言うけれど、「お前はどうなんだ」という話です。大人が面白くないし。だから、大人がどう変わっていくかの場を作っていくことが大切で、このような場もその 1 つだと思います。市が主導しても良いのではないでしょうか。むしろその方が人は来ると思います。民間だとどうしてもお金を取らなければならないといった問題が出てきます。大人が変わる場を作っていくことが重要だと考えます。

○私も同じような意見になりますが、このような様々な居場所があり、多様な視点の方々が集まって話をする機会は、以前参加した「子育てスタートアップ子ども居場所スタートアップ講座」で主催者の方が交流会を開いてくださったことはありますが、それ以外では全くありません。こうしてつながっておくと、「この居場所は合わなかったけど、こんなところもあるよ」と紹介もできると思います。今回のように交流する場が年に何回かあったり、状況がどんどん変わっていく中で、「こういう事例がありますよ」といった勉強会などがあれば、活動をよりブラッシュアップできると感じました。また、それとは別に、「見守る大人がいて、場所がある」というのを、民間ではなく藤沢市として実施することが、非常に重要だと感じました。小学校ではまだ分かりませんが、中学校くらいになると、社会的に「そこにいてもいいよ」と保障されている場所があることは、子どもにとって非常に大きいと思います。買い物に行って大人から「学校どうしたの？」と聞かれるような場ではなく、「そこにいていいんだよ」と保障してくれる場が実現すれば良いと強く思いました。

以上

２　９月１日（月）湘南台地区

日時	2025 年９月１日（月）13 時 05 分～13 時 50 分
場所	藤沢市役所４階会議室
地区	湘南台地区
事務局	青少年課、株式会社創建

１　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
湘南空手道クラブスポーツ少年団	子どもや若者の居場所（スポーツ）	湘南空手道クラブスポーツ少年団	小林志光様 奥田菜奈様	代表･師範

２　団体概要・活動内容

〇空手の稽古を通じて、礼儀を学んだり、体力づくりをしています。

〇湘南台、長後、大和、横浜の５つの道場と２つの幼稚園で 200 名強が参加しています。湘南台の道場に所属している子が長後の道場に参加しても良いし、横浜の子が湘南台に参加しても良いし、５つの道場のどこでも自由に参加できるところが特徴です。

〇うちの道場では、５つの道場での交流が盛んなので、学校単位ではない交流を子どもたちが自然にできるところが良いなと思います。学校では、「この子は、こんな子」という固定観念でみられている子どもでも、ここではそういうことは全くありません。また、学校には行かれないけれども、この道場ならこれるということで通っている子、不登校でも空手にだけはきている子どももいます。違う道場の子どもたちと一緒に稽古をして、交流して仲良くなれるところは非常に良いところだなと思います。

〇活動場所は、土曜日午前中に六会小学校の体育館、水曜日の夜は主に湘南台市民センターですが、湘南台市民センターは結構競争が激しく、場所が取れないときもあります。それとは別に、土曜日・日曜日に、もう少し強くなりたい子向けに特別の稽古をやっています。そのほか、火曜日に、主に長後市民センターの体育室を使っていて、空いていないときには、藤沢総合高校の体育館を借りています。

〇2000 年にスポーツ少年団に加盟して、スポーツ少年団の理念を踏まえて活動しています。

〇主に小学生で、中学生で続けている子もいるし、高校生、大学生になって手伝いに来ている子もいます。比較的残ってきてくれる子が多い印象です。

〇男の子の方が多く、女の子との比率は、８対２くらい。

〇長後道場には、外国籍のお子さんが 10 名ほどいます。スリランカやバングラディッシュ等。日本のお友達に誘われて入会する子が多いです。日本語で会話できるので、教え方や接し方等については、国籍に関わりなく、同じようにしています。外国籍のお子さんの保護者の中には、日本語が苦手な方もいらっしゃいますが、他の保護者の方が協力して伝えてくれたりするので、問題なくやっています。

〇コロナ禍では、体育館やセンターでは稽古をできませんでしたが、外の公園でやったり、ZOOM を使ってリモートでやったり、動画を送ってもらい見て返したりしていました。

3　子どもの居場所としての役割

○昔と比べて、子どもへの接し方はかなり変わってきています。教える側が、コーチングを重視するようになっていますし、セクハラ・パワハラに決してならないように指導しています。また、元保護者で指導者になってもらっている方向けに教え方の学習会、褒め方についての学びの機会を設けています。スポーツ少年団でこうした講習会をやっているので、それを活用して受講してもらっています。こうした講座を受講してもらい、道場に持って帰ってきてもらっています。

○子ども側の変化としては、運動能力が落ちているのではないかと思います。コロナ前から、子どもたちの運動能力が非常に落ちていると感じています。筋力、体力のほか、手足をうまく動かす調整力が落ちていると思います。簡単な動きを覚えられなくなってきています。

○保護者の中で過保護の方が多くなってきていると感じます。子どものことを必要以上にかまってしまう傾向が強くなっていると思います。空手では帯を結びますので、はじめに帯の結び方を教えますが、できない子がお母さんのところに行って帯を結んでもらうとか。保護者が、少し子どもにかまい過ぎているのではないかと感じています。

○空手を習いに来る最初の段階でお話をうかがうと、家でゲームばかりしていて何も運動をしていなから、空手でも習わせたいという親御さんもいます。習い始めて面白くなり、週に何度も習いに来る子もいますが、週に１回だけ空手をして身体を動かしてという子もいて、そういう子が多くなってきている印象です。外で遊ぶことが少なくなってきていますし、他のお稽古事が多くなってきていると思います。

○小さいお子さんは保護者に連れられてきますので、楽しんでやれることを重視しています。

○ある程度大きくなってくると、ジュニアリーダー制度というものがあり、大きい子が小さい子を見るようにしています。ある程度、年齢が上がってきた子に対しては、頼りにします。「学校でイジメをしたりせずに空手を習っている子たちはいい子が多いねと言われるようにしてね」「あなた達は道場の広告塔なのだから頑張ってね」という声かけをしています。この道場で「自分たちも一緒に小さな子どもたちのお世話をしているんだ」という気持ちになってもらえるように声掛けをしています。「中学生、高校生、大学生になっても、道場に来てくれて手伝ってくれると、とても助かる」ということは常に言っています。小学６年生で卒業する際に板を割るのですが、その際に、卒業した中学生等に声をかけて来てもらうようにしています。

○武道なので、級位・段位があります。より高い級位・段位になりたいということに楽しみを感じる子どももいます。

○子どもに任せることが非常に大切です。任せるということは信頼しているということです。任せることで、生きがいややりがいが出てきます。それは子どもだけでなく、大人も同じだと思います。そこを大切にしています。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○５つの道場のネットワークで、団体活動、運営をしています。その頂点にいるのが、私（小林氏）です。それぞれの道場で役員会を設けて自主的に運営していますが、全部をまとめていく後継の人材をどうしようか悩んでいます。理念をどうするのか、長期計画をどうするのか、会員をどう増やしてい

くのか等。そろそろトップを退きたいと思っていますが、次に誰に任せるのか。後継者はいっぱいいますが、まとめていく人がいないかなと思っています。

5　連携状況・今後の意向

○地域に貢献することを大切にしています。地域の方が、道場に足を運んでいただくことで、地域の方と知り合いになれて、地域の和ができます。老人ホームに行って交流を深めることもしていました。ただ、コロナ禍のため中断していましたが、老人ホーム側より訪問の要請なり要望があれば再開したいと思っています。

○湘南台市民センターと長後市民センターの公民館まつりには参加しています。そうしたまつりに参加する際には、違うクラスの子どもたちを１つのグループにして演武をしたりしています。また、上級生にどのような演武をするのかや、低学年に面倒をみることを任せたりしています。大会で結果を出せる子どももいますが、そうではない子どもの活躍の場というか、演武を通じた発表の場という面もあります。子どもたちにとっても、大会とは違う楽しみややりがいになっています。

○他の団体との連携という観点では、スポーツ小年団に入っているので、そこでの色々な行事には参加しています。スポーツ交換会（スポーツ小年団に加盟している人たちの運動会）や体力テスト等には参加しています。

○また、藤沢市空手道連盟に加盟しているので、そこでの大会運営等に協力しています。

○そのほか、こちらから他の空手道場の稽古に参加したり、他の道場の人たちに参加してもらったりはありますが、異業種というか他の種目の団体との交流はありません。

6　今後の展望等

○ハードの話しになりますが、小学校の体育館に冷暖房設備を入れてほしいです。今年の夏は猛暑でしたので、夏休みは六会小学校の体育館を使うことができず、湘南台市民センターの体育室を使っていました。

○また、なかなか難しいとは思いますが、市民センターの体育室を確保するのが難しくなってきているので、そこを何とかしてほしいです。

以上

３　９月９日（火）片瀬地区

日時	2025 年９月９日（火）16 時 20 分～17 時 40 分
場所	片瀬市民センター会議室
地区	片瀬地区
事務局	青少年課、株式会社創建

１実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
ひだまり教室	学習支援の居場所	片瀬地区社会福祉協議会	シブヤハルコ様	片瀬地区社会福祉協議会会長
			アオキリツコ様	片瀬地区社会福祉協議会理事　子どもの学習支援
ひだまり片瀬	地域の縁側		アリモトユミコ様	片瀬地区社会福祉協議会副会長　子どもの家運営委員
			マツモトマリコ様	片瀬地区社会福祉協議会理事　民生委員主任児童委員
にこにこ広場	親子の交流スペース		キタガワカヨコ様	民生委員主任児童委員　子ども会

２　活動内容

〇地区社協で色々と全般的にやっており、本当に生まれたところから高齢者までという感じで事業をさせていただいています。

〇学校の勉強に誰もが自信を持って参加できるように、学習支援活動を行っています（ひだまり教室）。スタッフの人数対応に合わせた形で募集をしており、応募者は多いです。参加している子どもは 16 名。２グループに分けて、殆ど先生とマンツーマンでやっています。週１回で１人の子については 50 分。2021 年から活動しています。はじめは社協の活動ということではなく、退職された学校の先生が、地域の中では学校の勉強についていけないようなお子さんがいたら、ちょっと見てあげたい、ということで、片瀬地区ボランティアセンターを利用して始めました。2023 年から社協で行う事業となりました。スタッフは元教員の方が４人いますが、家庭の都合等で毎週は来られない方もいるので、一般の方でそういう経験がある方や学生にも入ってもらい、きめ細かく見るようにしています。マンツーマンでやっているので確かに成果はありますが、定員があり毎年抽選しているので、今まで来ていたお子さんが落選して継続して来られないケースもあります。参加できる人数が限られているところが問題です。

〇子どもの関係の社協の事業をやっています。元々、民生委員・児童委員の時から、親子の子育て広場というのを始めました（かたせ・にこにこ広場）。15 年くらい前から毎週１回の子育て広場をやっており、親子の集いとして、孤立した子育てにならないように、地域で一緒に子育てしましょうということで、長年続いています。子どもたちは赤ちゃんなので、ここで育ったことを忘れてしまいますが、お母さんたちは結構覚えていてくれて、第２子、第３子の時も里帰りのように戻ってきてくれます。地域では浸透してきています。特別に指導している訳ではなく、手放しに「よく来てくれましたね」

という感じで接しています。赤ちゃんの遊び相手であったり、ママのお話しを聞いたりして、お母さんがリラックスできて、ニコニコして帰ってもらうことを目的に活動しています。困ったことがあれば、必要な方につなげたりしています。臨床心理士の方にも来てもらっています。２年前から、市民センターで水曜日、ボランティアセンターで木曜日にやっており、イベント以外は予約なしで、ママの都合で来られるようにしています。また、社協ではもう１つ児童交流会を長年やっています。地域で育った高齢者が小学校に来て、昔は何をやっていたという話をしてくれたり、昔の遊びを教えてくれたり等の交流事業を行っています。子どもの居場所ということでは、片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）の運営委員をしています。時々当番で入りますが、子どもの居場所として片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）は非常に重要な場所だと思います。不登校のお子さんも来ますし、片瀬地区以外の村岡地区や新林小・腰越小からも来ます。私立の子も来ます。孤立したお子さんが結構１人ずつで集まってきて、そこで一緒になると盛り上がったりしています。そこで「見守る人」もいますが、子どもたちは話し相手が欲しいようです。カウンター越しにずっと「見守る人」にくっついて話している子もいます。寂しさがあり、自分に注目して欲しいからか、わざと悪いことをしてアピールする子もいます。度を越している子もいるので、その対応を今後考えないといけないと思っています。絶対その子たちを排除してはいけないので、その子たちをどうやって受け入れていくか。夏休みには、朝からずっといる子もいます。子どもにとって本当に大切な居場所になっているので、もう少し行政に力を入れて欲しいと思います。

〇かたせ・にこにこ広場に開設当時から関わっています。にこにこ広場に来ていたお子さんたちがひだまり教室に来ることもあります。お母さんたちとも顔見知りになっており、小学生でも安心して預けられる場所になっていると思います。片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）にも関わっていますが、「見守る人」はお休みの日がありません。第３日曜日しか休みがなく、毎日 10 時から５時まで開いています。藤沢市には、こうした中学生でも利用できる居場所があり、そこには「見守る人」がいて、子どもたちがいつでも自由に無料で使うことができます。とても良い居場所なのに、そこで「見守る人」たちが物凄く大変です。設備的にも暖房・冷房も十分ではありません。この猛暑の中、「見守る人」が倒れないかと心配する状況に置かれています。せっかく良い居場所なのに、残念な思いがあります。先日、新林小学校に話を聞きに行きましたが、そこは週に２～３回ランドセルのまま遊べる居場所になっています。学校とは切り離して、地域の人が見てくれる場所ができています。そことの差が非常にあると思いました。小学生の居場所については、学童に行っている子は夏休みも行く場所はありますが、学童に行っていない子たちの居場所は本当に少ない。もう少し方法を考えていかないといけないと思います。また、ファミリーサポートもしています。親の要望は一人ひとり違いますが、対応は個人対個人に任されています。経済的に余裕があり何らかの形で他の人に頼める方は良いですが、頼めない方はどうなっていくのか少し心配しています。

〇皆さんが作ってくださった居場所に、最初はお手伝いという形で参加させていただきました。今ここにいる代の方たちがすごく一生懸命に色々なものを作ってきてくださり、導いてくださり、色々な繋がりを作ってくださって、本当に素晴らしいものができていますが、この後を継ぐ者がいません。皆さん、ボランティア。これからの時代、やっぱりボランティアだけでは、活動を継続できません。せっかく良い居場所があるのに、このままだと途切れてしまうのではないかと思います。子ども会の力になればという思いで片子連をやっていますが、忙しいお母さんが多いので、お手伝いができないということで子ども会には入らない家庭が増えており、子ども会の人数が減少しているのが現実です。そのため、複数の子ども会が合同で、色々な行事を続けています。昔から継続しているふれあい祭り

等への参加もありますが、あまりお母さん方への負担がかからず、子どもたちが楽しめるように工夫しています。

3　子どもの居場所としての役割

〇かたせ・にこにこ広場で活動していても、本当に１人ずつ要望状況が違います。

〇本当に疲れ切ったお母さんが来ます。もう手がパンパンになって。ママたちには「そのソファーで寝ていて良いから」と言って私たちが赤ちゃんを見ています。唯一のお母さんが休める場所になっています。赤ちゃんは遊んで楽しんでいきますが、お母さんが元気にならなければ子育てはできないので、まずはお母さんに元気になって帰っていただくことを大切にしています。暑い夏に、勿論自分で飲み物は持っているかもしれませんが、私たちは冷たいお茶をお母さんたちにさしあげています。お母さんたちは、誰かにお茶を入れてもらうなんてことはたぶんありません。だから、ほんの些細なことだけれども、こちら側の優しさ、「ママ、頑張っているね」というような、ママの頑張りを認めてあげられるような、そういう場所にしています。

〇片瀬地区ボランティアセンターに来る人同士が無理に仲良くなる必要はないと思いますが、割と狭い場所なので、嫌でも近くに一緒にいることになります。なので、話しを一緒に聞くこともできるし、自然と仲良くなることもできます。そういう居場所は、広くなくても良いのではないかと思います。隣にいることを肌で感じることができるようなアットホームな感じが良いのではないかと思います。お客様ではなく、ボランティアセンターに来る親子が主役、主体だと思います。

〇片瀬地区ボランティアセンターでは、どなたにも、高齢者でも、お子さんのいるお母さんでも、利用できる居場所を提供していますが、そこで当番をしていると、お母さんが子どもを連れて「もう、私、家ではやりきれない」と言って飛び込んでくることもあります。そこで、少しの間でもお子さんを見てあげることで、お母さんは「やっと気分が変えられた」と言って帰られます。やはり、親子へのサポートは大事。お母さんが余裕を持つことにより、子どもへの関わり方も変わってくると思います。幼児期のそういう親子の関わりが、子どもが小学校やその上に進んだ時も、やはり影響が大きいと思います。

〇ひだまり教室でも、おしゃべりをしてから学習に入る子もいます。こちらは勉強をしてもらいたいと思いますが、その子にとっては、そこで話しを聞いてもらえるということが大事なのかなと思います。今の時代、親が忙しい。学童に預けなくても働いている方もいます。仕事をしていなくても、家にいない親もいます。昔は、どこか近所の家に集まって皆で遊んだりしていましたが、今は友達の家で遊ぶことも限られます。そうなると、小学生の放課後の時間の過ごし方は、個々の家庭だけでは、子ども同士の交流の場が少なくなってしまいます。片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）は、子ども同士が関わり合いながら遊んでいます。やはりそういう場がとても大事だと思います。しかし遠いと、そこに行くまでが大変。この気象状況なので、夏の間は、外の公園は子どもの遊び場としては難しい。空調のあるところで、ある程度環境が整った場所が、近くに必要なのではないかと思います。公共の場所としての子どもの居場所は、これから必要になってくるのではないでしょうか。子どもが成長して大人になったときの人間形成にとっても、とても大きな役割を担うことになるのではないかと思います。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○ボランティアというのが、もう限界だと言われています。ボランティアでは、もう存続しません。若い人には考えられないと思います。

○片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）の運営を今ボランティアでやっていますが無償。「見守る人」は有償で少し出ていますが、それでも少し。有償ボランティアと言っても、時給にしたら、さほどもらってはいません。片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）は、藤沢市みらい創造財団が管理しているので、開館日時などやるべきことが決まっていますが、実際に運営している方や「見守る人」はキャパオーバーとなっています。また、社会状況の変化で、子どもへの対応もなかなか大変になっています。

○親御さんが働かなきゃいけない時代になっています。今はまだ家に帰ってくるなと言われている子どももいます。子どもたちの寂しさ、孤独感がすごいです。「見て、見て」というのがすごい。とてもわかりますが、そうした一人ひとりへの対応を、もう私たちだけではできません。少し暴力的な子もいて、「それはやっちゃいけないよ」ということをわざとやる子もいます。そうした子どもの寂しさというのは、本当に地域で埋められるのかなと疑問に思います。もう不可能なのではないかと思います。専門の人がいないとダメ。どうすれば、その子たちが満たされるのかは、私たちにもわかりません。少し支援の必要なお子さんも今はたくさんいます。不登校のお子さんや中学生も来ます。皆と群れたい子どももいるし、カーテンの中にずっと隠れている子どももいます。そういう子たちの居場所はとても必要です。自分に自信を持ってもらえるような場所が必要だと思います。

○信頼関係のおける大人のいる場所をわざわざ新たに作る必要はないと思います。今ある既存の場所を、子どもの居場所として利用すれば良く、例えば、片瀬地区ボランティアセンターを不登校の子の居場所にしても良いと思います。別に大人がそんなに喋らなくても良くて、自由にしていて良い場所で、話したい時には話せば良いと思います。そういう既存の場所を利用して、地域に子どもの居場所ができれば良いと思います。その時に必要になってくるのは、地域のボランティアだけではなく、中心となる行政の力です。

○片瀬子どもの家（片瀬こどもらんど）にも、１つコーナーを作って、そこを不登校の子の居場所にするとか。以前、不登校の子が来ていたが、ダメと言われました。学校に行けない子は、家からちょっと出て自分の場所が欲しいのではないかと思います。

5　連携状況・今後の意向

○地域の中で、社協の事業の中で一緒にやっている人たちとの仲間意識は強く、それがあるからこそ、ボランティアでも長年やってくることができました。

○ボランティアだけでは無理。民間企業や行政が入り、皆で子どもを支えてこうよということであれば、そこにお金を投資していただきたいです。

6　今後の展望等

○ボランティアに頼られるのは非常に辛い状況です。

○ボランティアではなく、仕事として対応するしかないと思います。

○就学前までの子どもの居場所は、だいぶ確立されてきていますが、小学校に行った時の子どもの居場所というと、学童に入っていない子たちは居場所がありません。休みの日、夏休み等。そこは、必要だと思います。

○子どもたちのストレスの発散の場がないと思います。そこに対して、私たちはどうしてあげることもできません。

○子育て期間は子どもの気持ちを受けとめられる環境が必要です。

○ボランティアで地域の居場所を支えるのは、今の自分たちの代で終わりだと思います。今のままの状況で、今後、より充実したものというのは無理。どう考えてもボランティアでは無理だから、そこはもう行政にやっていただくしかないかなと思います。人材が不足しています。

○ＰＴＡすらない時代なので、活動の核となる人をボランティアに頼るのは無理だと思います。ボランティアの善意に甘え過ぎています。

○子どもが気を使わずにふらりと行かれる場所は必要です。

○子どもが何か所もある居場所の中で、自分に合った居場所を選べるようにすることが必要です。

以上

４　９月10日（水）片瀬・辻堂・六会・湘南台・長後・村岡地区

日時	2025年９月10日（水）10時30分～12時00分
場所	藤沢市役所３階会議室
地区	片瀬・辻堂・六会・湘南台・長後・村岡地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

１　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
一般社団法人インタナティブ・スクール協会 湘南ホクレア学園	オルタナティブスクール	一般社団法人インタナティブ・スクール協会 湘南ホクレア学園	小針一浩様	理事長
マナ子ども食堂	子ども食堂	マナ子ども食堂	濱本瑞惠様	代表
Genius Discovery 湘南台教室	放課後等デイサービス	株式会社 KONAKA SHINING FUTURE	井上悟実様	施設長
森の仔じゆうがっこう	不登校児童生徒対策事業、 子どもの学習・生活支援、 障がい児相談支援	NPO法人 森の仔じゆうがっこう	人見窈子様	理事長
nico川名	子どもや若者の居場所（スポーツ以外）	nico川名	田中文枝様	代表
スケッチブックSHONAN	不登校児童生徒対策事業	スケッチブックSHONAN	下村友哉様	代表
あすなろサポートステーション	子どもや若者の居場所	社会福祉法人 白十字会林間学校	渋谷巧様	相談支援担当係長

２　団体概要・活動内容

１　湘南ホクレア学園（片瀬地区）

〇国公立校を「第１の学校」、私立校を「第２の学校」とするならば、近年、日本各地で増え始めているのが、「第３の学校」ともいえるオルタナティブスクールです。これらは、学校教育法に基づく「学校」としては認定されていないものの、市民が主体となり、市民のためにつくられている学びの場です。元々は公教育の画一一斉授業に異を唱えて個性を引き出すことを重視して出来上がってきた教育メソッドである、シュタイナー教育、モンテッソーリ教育、イエナプラン教育などを「オルタナティブ教育」と呼んでいましたが、日本で設立されている多くは、地域で子どもを育てる「寺子屋」に近いイメージで設立・運営されています。法律上は学校ではなく、私塾等として位置づけられています。

〇湘南ホクレア学園は、2022 年 4 月に開校したオルタナティブスクールです。教育メソッドは 100 年前にドイツで生まれ、オランダで発展した「イエナプラン教育」をベースにしながら、「日本語と英語が公用語のバイリンガル教育」で、「子供たち一人ひとりの持つ興味関心から始まる探究学習」に力を入れる独自の教育をしています。

〇平日朝９時から夕方５時まで開いています。現在約 30 名の小学 1 年生から中学生が通っています。

〇「世界中に仲間をつくる！」というビジョンを持ちながら、どんな世界でも生きれる人になってもらうために「コミュニケーションスキル」「起業スキル」「アウトドアスキル」の３つのスキルを育んでいます。

２　マナ子ども食堂（湘南台地区）

〇湘南台にあります子ども食堂をやっています。2022 年９月から始めました。最初はお弁当の提供だけだったのですが、2023 年４月からイベント参加型の子ども食堂になりました。子どもたちにゲームを楽しんでいただいて、お弁当も提供します。

〇毎月第２土曜日 1 回で年 1 回８月はお休みです。

〇親子で殆ど来てくださって、地域の年配の方も２人くらい来てくださったりしています。

〇50～70 人くらい来ていただいています。７月はメニューがタコライスで良かったからか、80 人近くの申し込みがありました。

〇イベント参加型にすることで良かったと思います。12 時から 14 時までですが、ゲームがあるので、食事してもすぐには帰らず、子どもたちが楽しめる居場所になっています。

〇母体がキリスト教会なので、教会のボランティアの方や地域の方が 30 人近く来る時もあります。

〇地域のボランティアさんも、子ども食堂を手伝うとすごく元気になれるという声をききます。多分、子どもたちから元気をいただくから、お手伝いすることを楽しみにして来てくださっています。それが感謝だなと思います。

〇現役の保育士さんがいてゲームを５つぐらい考えてくださるのですが、その時にゲームしてお菓子をあげたりしています。

〇皆さんに差し上げるものが時によっては不足気味になる時もあるのですが、社協さんやボランティアさんからの寄付で、結構、お菓子とか頂いたりして、今のところはやっています。

〇今年９月から、月２回第２、４木曜日の 15 時から 17 時まで、学習支援を始めることになりました。

３　Genius Discovery 湘南台教室（株式会社 KONAKA SHINING FUTURE）（長後地区）

○株式会社コナカシャイニングフーチューチャーという社名になっていますが、放課後等デイサービスの事業所名がジーニアスディスカバリーといいます。ジーニアスディスカバリーというのは、社長が天才発見ということで、天才を見つけるためにこの事業所を開くということで命名しました。

○最寄駅は、小田急線長後駅になります。

○個別指導なので、支援プログラムは皆、個々で異なります。子どもに合わせての支援プログラムを作成し、アプローチの仕方も違うので、それ全て個別にやっています。

○定員が 10 名なので、10 名のお子さんと毎日活動しています。

４　森の仔じゆうがっこう（NPO 法人森の仔じゆうがっこう）（六会地区・湘南大庭地区）

○不登校や学校以外の場所で学ぶという選択をした子ども向けのフリースクールと、藤沢市の委託事業で「子どもの学習生活支援事業」ということで、生活保護や生活困窮世帯のお子さんの学習支援・場所づくりをやっています。また、障がい福祉サービスで障がい者相談支援事業ということで、障がい児、医療的ケアのあるお子さんたちの生活に関する相談を受けています。

○フリースクールは、不登校のお子さんたちの学習、居場所として長く活動しており、13 年前に NPO 法人格を取って、事業化して活動をしています。

５　nico 川名（村岡地区）

○藤沢市川名地区、新林小学校の学区内で、放課後の子どもの居場所を今はメインでやってます。

○新林小学校の学区が、藤沢駅の南側で、駅から大人の足でも 20 分程度という距離で、コロナ禍前ぐらいから大型マンションが立ち始めまして、その関係で低学年でも学童保育に入れないということが続きました。放課後、自分の子どもも含め、安心安全に遊べる居場所が必要だなということで立ち上げています。

○今はメインが、放課後の子どもが遊べる居場所であり、地域の皆様にも今後は集まれる居場所づくりや地域食堂等もやっていきたいという構想を持っています。

６　スケッチブック SHONAN（辻堂地区）

○うちの教室は、デジタルアトスクールという形で一応看板は出していて、イラストレーションやコンピューターミュージック等 DTM と言いますが、そのほかプログラミングだったり、3D プリンターで作品を作ったり等の活動を中心としています。

○結構うちの教室は、割と自由に、子どもたち１人ひとりの個別ニーズに対応できるように、あまりルールを設けていません。

○学習支援については、５年生なんだけれども４年生の頃の国語の勉強を、学校に行けてなかったからやり直したいというお子さんの学習支援をしたり、中学校の進学や進路で悩みがあって相談や進路助言を行ったりしています。保護者と連携しつつやっています。

○利用者は、小学２年生から高校２年生ぐらいまで結構幅広く利用してもらっている教室で、非常に緩い教室となってます。

７　あすなろサポートステーション（社会福祉法人白十字会林間学校）（辻堂地区）

〇社会福祉法人白十字会林間学校の中にある児童養護施設が母体となっており、あすなろサポートステーションも同法人内にあります。主に施設の退所者や里子たちのサポートを行っている相談機関になります。

〇私たちは相談支援機関として、若者支援をおこなっています。

〇居場所としての機能では、もしかしたら皆さんのような居場所に参加できない、もしくは施設から育っている中で、生活面や精神面で不安定な方たち向けに食卓の機会ということで、毎週土曜日の夜に、夕食を提供しています。

〇団体としては、お金がない・精神面でのサポートが必要な利用者に対しての相談やアウトリーチをかけるような取り組みをしています。

【オブザーバー】藤沢市社会福祉協議会

※辻堂地区と六会地区の担当者が参加

〇社協の方でも、夏の自習室ということで、生活困窮の自立相談を行っていますが、困窮であったり、制度の間に落ちている世帯と関わる中で、お子さんがいる場合、クローズな形ですが、自習室を開いて４年目になります。

〇子どもの食と学習と居場所ということで、長期休みの間に少し居場所のところに向き合ってやってきています。今年度は中高生を対象にして、自習室に特化した形で、食を無料で提供する事業を行いました。周知が浸透していないという課題もありますが、28 日間開催して、お子さんがいらっしゃった日が 18 日間で、多くて３名の中高生が来ていただきました。

３　子どもの居場所としての役割

〇公立校に通わないという選択をした家庭が、他の学びの選択肢を探す中で湘南ホクレア学園にたどり着き、その教育理念とプログラムに共感した上で入学を希望されます。一般的に言われる「居場所」としての役割とは、少し異なる位置づけかもしれません。ホクレアの建学の精神は、「どんな世界でもサバイブできる子を育てる」というものです。それは、「温暖化や環境破壊による食糧危機（食糧が減り高騰する）」「急激な少子高齢化と人口減少による日本経済の縮小（円が弱くなり収入が減る）」「AI やロボットなどのテクノロジーへの労働の移行（就職先がなくなる）」「甚大な災害の常態化による生命の保護（安全に生きることが難しくなる）」といった、不可逆的な変化を含む世界を、今の子どもたちが生きていくことを前提としています。だからこそ、そうした振れ幅の大きな世界においても、未来にワクワクしながら、イキイキと生きていける子どもたちを育てる――その使命感をもってスクール運営をしています。その想いに共感してくださった保護者の方が、子どもたちを通わせてくれています。現在は、1 年生から入学する子どもがほとんどで、在籍校には入学前に「ホクレアに通います」と伝え、了承を得ています。子どもたちは「世界中に友達をつくるんだ！」というモチベーションを持って通っており、そのための学びを楽しんでいます。その結果、「ゴールデンウィークも夏休みもいらない！」と子どもたちから言われることもあります。とはいえ、スタッフにも教材づくりやイベント準備の時間が必要なため、春・夏・冬にそれぞれ 10 日程度の休みを設けています。ただし、ホクレアがすべての子どもに合うとは考えていません。どちらかというと、自ら考え、主体的に動こうとする子どもに合うスクールだと思っています。

○私たちは、なるべく大人は介入しない。子どもの世界は、子どもの世界なので。例えば、遊んでいて、物の取り合いとかもあるのですが、そこには大人は仲裁しません。やはり言ってくる子どもはいて、「誰々ちゃんが何取った」とか。それは、なるべく子ども同士で話し合いをさせます。暴力が出た時、蹴った、殴った等が出た場合には大人が入りますが、極力、見守りに徹しています。なるべく子どもたちの意見を吸い上げるために、子ども会議というものをやっています。居場所は、本当にフリーで、何をやってもいいよということにしています。一応、遊び道具等は用意していますが、その中で子どもたちが自分で選択できるようにしています。それでも足りないもの、もっと欲しいものがあった場合には、最近ノートを作りまして、やりたいことノートというものに、自分たちで書いてもらうようにしています。それをやったことにより、今まであまり意見を言わなかった子の意見が書いてあったりとかして、少しずつ私たちも効果を感じています。それを見て、「これを次はやりたいね。そうであれば。これを用意するね」というのを、予算の中から出したりしています。兄弟で遊びにくると、兄弟喧嘩が始まり、そこを１人っこの子が見ると、少し引いちゃって見ている部分もあるので、本当に激しい喧嘩は私たちも仲裁に入るようにしていますが、それ以外、遊びのルール等は、全部子どもたちにお任せして、それを自分たちでルールを作ります。そこから、それを皆で共有して、それをやりたいという子が乗っかって皆で遊ぶという感じで、普段の活動はしています。

○うちは放課後等デイサービスなので、障がい児と言われてる子がほぼほぼなので、できるだけ今は見守りながらも、言語化ができるようにしています。怒ってしまう子にも、その子が言えない何かが必ずあるので、それをどういう気持ちなのか、自分の気持ちをまずカードであったり、そういうもので示してもらい、こういう時にはこういう風に伝えた方がいいのではないかな？ということを、毎日毎日積み重ねてやってます。1回では絶対無理なので、100回、200回と積み重ねて、少しずつ人とのコミュニケーションであったり、周りの空気を感じてもらえるような活動しています。

○うちの教室では、子どもの居場所として安心して過ごせる工夫として自分が今一番心がけていることは、自分の教室を立ち上げた時から大事にしていることですが、自分の小学校の教員時代からずっと考えて大事にしていることでもあるのですが、子どもとの対話です。結局、子どもたち自身が言葉にしない部分というのは結構多くて、目線や表情、姿勢や佇まい等、そういう仕草の部分から、その子自身がどんなこと考えていて、どのように受け取っているのかなというのをこちらで予想して、その都度、こんな感じのことを多分この子は求めているのかなとか、こういう声掛けをしたらきっとこの子は動くかなみたいなことを、こちらが想像しながら声掛けしていくことを大事にしています。あくまで押し付けない。居場所を求めて来る子たちは、基本的に家庭でなかなか安心できなかったり、学校で安心できなかったり等、色々なストレスを抱えており、緊張で硬くなっている子が割と多い印象なので、ふわっと、大丈夫だよ、みたいな雰囲気をこちらが結構積極的に出すようにしています。なので、教室環境、その場所の環境がすごく大事だと思っています。音楽、観葉植物、インテリア等、空間づくりを結構大事に意識しています。「ここは大丈夫なんだ」と子どもが自分のテリトリーとして認識して、ここでは安心して自分のパーソナルスペースが守られるということを、すごく意識しています。活動面での課題は、連携。行政との連携もですが、他団体との連携。結構、藤沢市には、たくさん色々な団体があり、先日も「こどまなメッセ 2025」に出させてもらいましたが、子どもたちのために意欲的な団体がたくさんある中で、なかなかそれが繋がってない印象を持っています。そこをうまく手を取り合えれば、もう少し利用者目線で選択肢が増えると思います。情報にアクセスできるようになるということをずっと課題として、立ち上げた時から感じています。

○フリースクールや藤沢市の子どもの学習生活支援事業でも、学習と居場所というところがあり、今の話は居場所の話だと思いますが、スタッフが何人も来ていますが、スタッフが来た子どもに対して声かけはするようにしています。名前で呼んだり、誰々君、誰々ちゃんとか、呼び捨もありますが、「よく来たね」「学校、どうだった？」等、何気ない会話を、スタッフそれぞれがするようにしています。その時の子ども反応をみて、学校や家で何かあったのかなとか、衛生面を気にしながら、声掛けしてるところもあります。話しの内容から必要に応じて、「後で、あっちでちょっとお茶を飲もうか」とかという感じで、ちょっと別室でお話することもあります。また、来た時、「学校で、今日ここでつまづいて」という話しがあった場合には、「今日はここからやっていこうか」みたいな感じで話を持っていたりしています。今日は勉強したくないという感じだったら、「あっちのスペースで何かやる？」という感じで、勉強ではなくて、まずは居場所という感じで、その子がやりたいようなものをやっています。教室の中でも、その子が過ごしやすそうなスペースを作るようにしています。また、子どもの意見聴取ややりたいことに関しては、適宜、きいています。課外活動や食育の中でも、子どもたちから意見をきいてやっています。

○工夫については、刺激だったり、色々な生い立ちのところで課題感と言いますか、不安感が強い方たちなので、基本的に、スタッフ一同、平穏、いわゆる安定した関わりを心がけ、目指しています。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○フリースクールに対する補助金は、藤沢市は、今はないです。鎌倉市では、個人に補助金が出ます。

○フリースクールだと、どうしても質を担保しようとすると、コストがかかります。ただし、そこにはやはりかけられなくて、利用料金が上がってしまうと、家庭の負担が上がります。結構、不登校のお母さんは、今までずっと正社員で働いていたけど、子どもがずっと家にいることになった場合、正社員をやめて非正規になりましたとか。世帯としての収入が下がっているのに、子どもの教育費用がめちゃくちゃかかるようになるという状況は本末転倒だと思います。できるだけ低コストで、家庭がうちに払うコストを下げてあげたいという想いで、自分の教室をやっています。自分は、放課後のアフタースクールで習い事的な動きもしているので、それで何とか経営は成り立ってはいますが、それでもギリギリです。そこで助成金を考えてはいけないと思いますが、家庭、利用者、子ども目線で考えた時に、お金がかかってしまうところを、何か違う形で賄うことができたら良いと思います。そこにお金を使うぐらいだったら、違うことにお金を使ってほしいです。家庭の充足感をもう少しあげて欲しいです。

○家庭の支出は減らしたいです。

○生徒が減ってしまい、月々の収入である月謝が減ってしまった時に、経営が続けられないとなると、ずっと通ってくれているお子さんの居場所が切れてしまう、なくなってしまうという不安定さを非常に感じています。

○資金の仕組みについてですが、少し整理してお話しします。公立学校の場合、学校運営に必要な財源は、国・都道府県・市区町村がそれぞれの役割で負担しています。国は主に教職員給与の一部を国庫負担金として支出し、残りの教職員給与の負担と教員採用は都道府県が行い、学校施設や日常的な運営は市区町村が担っています。これらに加えて、地方交付税措置などを通じて、自治体全体に財源が配分されています。これらの公費は、不登校であっても在籍している限り、その子どもに関わる学校運営費が個別に減額される仕組みにはなっていません。結果として、学校に通っていない子どもが別

の学びの場に通っている場合、家庭側は実質的に追加で費用を負担している状態になっています。また、不登校の子どもへの経済的支援については、自治体ごとに対応が異なります。たとえば、鎌倉市では月額1万円程度、東京都では月額2万円程度の支援制度があります。ただし、これは家庭への補助であって、在籍校の運営費が個別に減るわけではありません。税金を納めている側の視点で見ると、二重で補助をおこなっていて、税金の無駄遣いが起きているように見えてきます。つまり「子ども一人ひとりに教育予算が直接ひもづく仕組み」になっていないことが課題なのです。参考値として、東京都では児童一人あたり年間200万円前後、神奈川県でも170万円程度、少なく見積もっても100万円以上の公教育費がかかっていると聞いたことがあります。一方で、学校に通っていない子の分も、在籍している限り、その分の学校運営費が減額されることはありません。この構造が見えにくいこと自体が、日本の教育財政の課題の一つだと感じています。もし、子ども本人に教育予算を振り向ける仕組みがあれば、私たちのようなオルタナティブスクールも無償化に近づける可能性があります。ホクレアは「授業料が高い」と言われることもありますが、公立校にかかっている公的コストと比べれば、実際には低い水準です。170万もの教育費を子ども1人に振り向けてくれれば、お釣りが出ます。現在、不登校の子どもは全国で約35万人超、長期欠席者は50万人超です。35万人を学級規模に換算すると、35人学級で約1万もの教室が空いているということです。その規模の学校運営に相当する予算（単純計算だと「35万人x100万円=3,500億）が、実質的には既存の制度の中で動いています。まずは、この構造そのものに目を向ける必要があると考えています。国や自治体には、不登校の子どもに対する支援予算が用意されていますが、その多くは学校制度を前提に設計されています。家庭や学校外の学びの場に直接届く仕組みになっていない点は、大きな課題です。

〇湘南ホクレア学園には、複数の小学校区から子どもたちが通っています。その際に課題になるのが、在籍校での出欠の扱いです。以前、藤沢市の校長会において、「オルタナティブスクールに通う子供は、不登校児童生徒を除いて一律欠席扱いとする」という判断がなされました。在籍は続きますが、出席としては扱われません。教育の多様化に向けて「教育機会確保法」が施行されているにもかかわらず、オルタナティブスクールに通う子供たちの出欠席を校長会でこのように一律で決定するというやり方自体に大きな問題を感じますが、現時点でこのことに言及はしていません。ちなみにですが、自治体によって対応はかなり異なります。県内のある市からホクレアに通う子がいて、その教育委員会に出欠の相談をしたところ、「インターナショナルスクールとオルタナティブスクールに通う子は一律”除籍”にしている」と言われたことがあります。除籍とは、自治体の判断で住民票を奪われるようなものですから、非常に受け入れ難いものです。「30日間欠席してくれたら不登校扱いにできるので、除籍は免れます。なので、いったん不登校という形を取ってもらうことを検討してもらいたい」といったニュアンスの提案を受けたことがあります。つまり形式的にでも不登校と認められれば、除籍になることなく、ホクレアへの通学が欠席どころか「出席扱い」にできるということです。このように自治体で一律に決めているところもありますが、出欠の判断は最終的に校長の裁量に委ねられています。そのため、藤沢市の学校でも、「ホクレアでしっかり学んでいるのだから、出席扱いにします」と判断してくれる校長もいらっしゃいます。ただし、過去に校長会で決められた統一基準が残っており、それに基づくと欠席扱いになるという状況は続いています。それでもホクレアでは学習報告書と出欠席簿を学期ごとに作成して、それらを各家庭から在籍する学校に、子どもと一緒に持っていくようにしています。それは、子どもたちが元気にホクレアで過ごしていることを在籍校に伝えるためです。また、教育委員会が気にしているネグレクトの懸念がないということを伝え、安心してもらうためでもあります。しかし、市内のある小学校では「各家庭に来てもらっては受け取るのが大変なので、

ホクレアでまとめて提出してほしい」と要望されたことがあります。また、公立校に通っていなくても、教育公費は出ているので、通っていない子の教科書も在籍校には配られます。その受け取りについても、「誰か一人がまとめて取りにきてください」と言われたこともあります。効率を考えたら言いたいことはわかりますが、在籍校には子どものたちの状況を把握する責任があるので、そのやり方が怠慢すぎると感じ、そのことを伝えたことがあります。

○公立校は、子どもを預かる仕組みの中で公的な予算が投入されています。１回も通っていな子どもが何人いたとしても、人数分の予算がもらえます。一方で、毎日子どもたちが通っていたとしても、現時点でオルタナティブスクールは公金を受けることができません。授業料で運営せざるを得ません。そのため授業料が高額になってしまいます。しかし、公立校にかかっている実質的な公費と比べれば、決して高額ではなく、むしろ安いという点はお伝えしておきたいです。出欠の扱い、予算の流れ、多様な学びの位置づけなど、制度全体として見直すべき課題が多く残っていると感じています。

○利用者に関して、あり続ける存在であることを大事にしています。どうしても事業委託を受けている身なので、委託先が変わったり、職員が変わったりすると、結局、そこに関わっていた子たちにとっては、関係が途絶えたりするので、永続的な関わりが難しくなります。どこで生活をしていても、立ち戻って来られるような場所づくりを考えています。それが、もう少し低年齢になった時でも、もしかしたらそういう意識というのは大事なのかなと思いながら活動をしています。

5　連携状況・今後の意向

○うちは、藤沢市教育委員会が主催しているフリースクール等情報交換会に参加して、藤沢市内でフリースクールを経営・運営されている団体と知り合いになったり、名刺交換させてもらったりしています。顔見知りになり、情報交換していく中で、一番多いのは、お互いの困り感等の情報交換がメインになっています。７月にあった交換会では、「何か一緒にイベントをやれたら良い」という話していました。そうした中で、藤沢こどもの多様な学び応援団（米澤代表）が主催して、藤沢市役所分庁舎で「こどまなメッセ 2025」を開催していただいたりした。ああいう形で、少しずつ結びつきが強まっていけば良いと思います。つながりを広げていかなければいけないという空気感は、それぞれの団体が感じていると思います。まだ、情報交換どまりという感じです。誤解を恐れずにいうと、玉石混合のところはあります。昨年まで、幾つかの小学校に非常勤講師で教えに行っていましたが、その時に校長先生や久しぶりに再会した職員の友達と話しをしていると、「学校から結びつきたい」「連携を取りたい」と学校側が思っていても、学校を敵として認識している団体もいます。理想を持たれて活動されている方がたくさんいる中で、その理想がどうしても合わない場合、一律にフリースクールといって連携を取ることがなかなか難しいことがあります。様々な団体を一枚岩にすることは難しいと思います。それぞれの良さになるので理念はそれぞれにあって良いのですが、それ故に、手を組みづらい部分を抱えていたりします。そこが根っこにあると思います。

○私のところは放課後等デイサービスなので、今年 10 月に藤沢市の放課後等デイサービスが集まる会があります。新１年生の保護者たちが来て、色々な放課後等デイサービが集まるので、そこで自分の気になるところを見て、話しを聞くという会はあります。

○僕らは、公立校と連携を取りたいと思っているので、「定期的に学習報告はします」「出席日数も出します」と言うのですが、公立校からは「年１回にしてください」と言われます。僕らは、毎月でも良いですし、せめて学期ごとにさせてくださいと言っています。先ほどフリースクール側に学校を敵視

するところがあるという話しがありましたが、僕らは公立校側にフリースクールを敵視するところがあるのではないかと思っています。また、「健康診断に行きたいという子どもがいるので」と公立校に言うと、「えっ？」という顔をされます。

6　今後の展望等

○素人目線というか、利用者目線の意見になりますが、自分がもしそういう場が必要になった時に、どうやって調べれば良いのかがまずわかりません。わかりづらい気がします。先日の「こどまなメッセ2025」でも、たくさんの団体・施設があるのに、ユーザー側としては選べないし、わからない状況です。例えば、ホットペッパービューティ等のように、そこにアクセスすると全部一覧で見ることができて、市内、茅ヶ崎、鎌倉等が出てきて、料金もわかる、スタッフや教育内容等、施設でやっていることがわかり、どんな空間なのかがわかるとか。そういうことが見られるようなものがあれば、すごく選びやすいと思います。

○保護者の方から相談を受けた時に、その方がすごいおっしゃってたのは、行政にコンシェルジュのような人が欲しいという話しです。仲介してくれる人、案内してくれる人がいれば、そこが窓口になって情報を入手することができます。個別に窓口はたくさん用意されていますが、そこが１つにまとまって、子育て支援課でも、教育委員会でも良いですが、１つ相談できる場所があり、そこに１回行けば、一応、道は開けるという場があると良いです。今は、そこすらないので、親はまず学校に相談しますが、学校ではそうした情報を持っていません。学校には、学籍はあるのに、来ていない子はいます。その子については、要録は残していないし、指導記録もありません。名前しか記載されずに、他の欄は空欄の紙が６年間置かれているだけです。コンシェルジュがいると、アクセスの窓口になります。幼稚園、保育園、認可外の保育園くらいの位置づけでフリースクールを見ていただいて、案内してもらえる場所があると良いです。その入口があると、躓きがなくなります。自分は地元の人間ではないから情報を持っていないし、どこが良いのかもわからないし、子どももそんな状態だから、お母さんもすごく不安だし。不安に不安を重ねる状態になっていて、大変そうだったので、そういう仕組みがあると良いと思います。

○うちも、結構、要対協のお子さん（要保護児童対策地域協議会）に関わるケースがあります。藤沢市のこども家庭センターでのケースに関しては、ガラガラと閉まってしまいます。そこから先、子ども家庭センターで情報は集約するけれども、どんな風に動いているのかはわからず、「情報の共有はできません」「アウトプットできません」とはっきりと言われます。藤沢市では、「要対協になったケースに関しては、関係機関以外の団体とは情報の共有ができません」ということを、長く聞いている話しではありますが、その関係機関になぜ入れないのかなといつも疑問です。国が示している中では、関係機関というところには、地域の福祉サービスや地域の関係団体と連携していくことと明記されていますが、藤沢市の判断としては、関係機関には、民間や福祉サービスがなかなか入れないところが、すごく課題に感じています。藤沢市でも、児童相談所のケースの場合には、なぜか入れるということもあります。その差は何なんだろうと思います。そういうところを藤沢市にはもう少し変えていただきたいと思います。私たちは、日頃から子どもたちに一番近いところで接しています。その後、どういう風に家庭が動いているのか、どういう風に子どもに対して支援をされているのか。そういうところの情報は共有していきたいです。うちも話しをしながら、ここのお子さんに対してはどうやって支援ができるかなというのを、皆で考えていきたいと思います。改善している状況でも、危ない状況で

も、情報をもらえることによって、子どもの支援の仕方、子どもたちの未来が変わっていくところがあると思います。そのあたりの仕組みづくりを考えていただきたいと言い続けています。

○社会的養護の中で「類するもの」という言葉があります。地域の中で虐待もしくはその近いものを受けていた、それによって児童相談所に小さい時に関与していた、ただ保護はされてない、そういう子たちが世の中に大勢いることが、どんどん浮き彫りになってきています。その子たちが相談をするケースが増えてきています。より年齢層も上がってきています。１つの団体でどうにかできる範囲ではなくなってきています。なので、社協さんに協力いただいたりしています。官民関係なく、児童支援、子どもたちの支援をしてるところの連携という形はやっぱり考えていきたいと思います。勿論、お互いにできること、できないこと、役割も違うとは思いますが、その擦り合わせをして、どういう形で児童福祉というものが、藤沢市の中でできるのかという話し合いの場が、まずは第一段階として必要なのではないかと思います。継続的にそういう擦り合わせができるだけでも、まずは良いと思います。それと同時に、個別で色々なケースに関わる中で、おつなぎできるところと一緒に情報共有できるのかを探りながら、皆さんと協力体制を整えられたら良いと思います。そうした場合に主となるのが、市であったり、公的機関だと思います。児童相談所もそうだと思います。皆で考える仕組みというのがあると良いと思います。

○不登校児がいる家庭や一人親家庭、生活困窮している家庭に対してのサポートの仕方については、本当に無知な状態なので、できればフリースクールさんとかと繋がって、そこに不登校のお子さんやちょっと学校に行き渋りのあるお子さんをご紹介できるようなシステムがあったら良いです。先ほどのコンシェルジュの話しのように、私たち団体側も聞ける場所があると、とても助かります。行政には、そういうところをお願いしたいです。

○居場所が、もう少し開かれたものになると良いと思います。居場所に来る子たちが、教育現場ではあまり良しとされていない印象を受けます。また、保護者の刷り込みも子どもたちにはあると思います。絶対子どもが思いつかないようなことを発言する子がいます。保護者が家庭で言っていることを、子どもたちが耳にして、先入観を持っているのだろうと思います。私はそういう言葉をきくと、毎回、悲しくなります。皆、それぞれ違って良いということを、もう少し教育現場であったり、私たちも伝えていかなければいけないと感じています。子どもたちが行ける場所の選択肢が増えるようなシステムがあったら良いと思います。

○コンシェルジュは良いと思います。ソムリエでも良いですが。この子にはこれが合うとか、合わないとか、そういうことが多様性だと思います。公立校が合わない子が悪いとは全然思いません。公立校はここが合うけど、放課後はここが良い等、それぞれの子どもに対して、オーダーメイドではないけれど、そういうところに予算を使って、子どもの未来のためにそういうやり方をされると良いと思います。そういうサイトもあれば、スクリーニングができて、自分の要望に合うようなところ、エリアや予算も、そういうサイトみたいなのもあったら良いだろうという点には、とても共感しました。

○最近では、長野県がフリースクール認証制度というのを始めて、年間 200 万円をその制度からスクールに出すという動きもありますし、東京都ではフリースクール等に通う子に２万円の補助が出たりしています。神奈川県もなかなか動きが悪いので、そういう動きを藤沢市が先駆けてやっていただけると良いです。是非、子どもたちに予算を使っていただきたいと思います。そういう取組が、藤沢愛にもつながっていくと思います。

○学校の管轄は文部科学省で、放課後等デイサービスは厚生労働省になります。「管轄が違う」ということを割と言われます。不登校の子については、私たちのところにも、「学校から色々な意見を聞いてく

ださい」といわれますが、現実はきびしいです。大切なのは、その子の多様性を、色々な面から見なければいけないと思います。１つの視点から見ていては駄目だと思います。うちに来ているからこういう部面があるけどでも、他のところだと全然違う面が必ずあると思います。厚生労働省や子ども家庭庁等、そういう縦割りのことではなく、本当にその子を見るための居場所を考えるのであれば、そうした縦割りも取っ払っていただきたいと思います。「その子を見る」ということに重点を置いていただきたいと思います。

○先ほどから話しが出ているコンシェルジュ等をやるにしても、多分、行政だと難しいと思います。一度民間に投げてもらい、そこで色々な情報を持って対応すると良いのではないかと思います。教育と福祉というのはなかなか繋げることが難しかったりしますし、ご家庭の考え方で福祉には行きたくなくて教育で何とかしたい等の考え方もあります。そういうところをヒアリングできるような、相談システムもあり、子どもの居場所と保護者やご家族の相談場所みたいな場所。外でも活動できて、中でも活動できて、ご飯も食べることができて、という施設が、藤沢市の北部と南部に１箇所ずつあると良いと思います。

○私個人の目線ですが、今４年生の息子がいて、その息子が保育園に入る時に非常に保活をしなければいけませんでした。申し込み用紙に第７希望まで書いて、どこに入れるのかというので、すごい大変な思いをしました。今度は、小学２年生になる時に「もう学童には入れません」となり、また同じように学童を探すという活動をしなければいけないとなった時に、「このまちは、あれだけ子どもに優しいと言っていたのに、何なのだ」と思いました。川名地区の保護者には、そうした意見が多かったです。今後、そういう立場になる保護者に受け継ぎたくはないです。こうしたことは、ここで食い止めたいというのが、私たちの想いです。学校との連携の部分が、結構、難しいです。不登校の子たちに対しても、藤沢市でももう少しサポートしていただきたいです。また、実際にどれくらいの不登校の子どもがいるのか、どこの学校に何人というような実態調査をしていただきたいです。さらに、この場に団体が集まって団体の話しを聞くだけではなく、大変だと思いますが、現場を見に来ていただきたいです。どんな子どもたちが実際に来ているのかというのを、目で見て、確かめていただきたいと思います。

○不登校の親御さんや子どもたちと話をしてみると、割と学び直しができないという声をよくききます。学校では、５年生の子は、５年生の勉強になってしまいます。５年生に２年生の教科書を使って教えることはできないというか、しないというか、その発想がそもそもないです。そういう学び直しができる場を、例えば、夏休みや休業期間に、退職されたベテランの先生たちと連携して、そういうニーズに応えられるのではないかと思います。

○団体の活動場所として、自宅を改装されている方もたくさんいると思いますが、店舗を借りることは結構ハードルが高いです。そのあたりの予算もあると良いです。

○こういう場がもっとあっても良いです。団体と行政の話し合いの場というか、そういう場が多ければ多い程良いと思います。コミュニケーションが多いに越したことないと思います。

○子どもの居場所の言葉の定義のようなものは、皆さん、共通認識されているものはありますか。藤沢市でいう、子どもの居場所とは何かという目標みたいなものの統一だけでもした方が良いのではないかと思います。

以上

5　9月14日（日）六会、鵠沼、藤沢・村岡、湘南台、長後地区

日時	2025年9月14日（日）10時30分～12時00分
場所	藤沢市役所本庁舎５階　会議室５－１
地区	六会、鵠沼、藤沢・村岡、湘南台、長後地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

1　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
ご縁食堂	子ども食堂	医療生協かながわ瞳班	川本修三様	班長
ららららランチの会	子ども食堂	ららららランチの会	北原博子様	
nico川名	子どもや若者の居場所（スポーツ以外）	nico川名	上野緑様	副代表
MOP	子ども食堂、子どもや若者の居場所（スポーツ以外）	学生団体My Own Place	李紀慧様	理事
非営利団体ボードゲームでツナグ手	子どもや若者の居場所（スポーツ以外）	非営利団体ボードゲームでツナグ手	長山陽司様	代表

2　団体概要・活動内容

1　ご縁食堂（医療生協かながわ瞳班）（六会地区）

〇平成 30 年 11 月から活動を開始しました。
〇当初、70～80 食のお弁当等を配布するフードパントリーを行っており、現在でも実施しています。
〇現在、六会市民の家において、月に１回、第４木曜日に、25 食分のカレーを作って提供しています。
〇利用者は、一人親家庭の保護者と子ども、独居高齢者を中心に様々な年代の方々となっています。
〇社会福祉協議会と連携し、特に支援が必要な人へは、食材等の配達をしています。
〇スタッフは５～６名で、ボランティアの方に入っていただくこともあります。

2　ららランチの会（鵠沼地区）

〇平成 28 年から活動を開始しています。
〇元々は、NPO 法人湘南ライフサポート・きずなから、冬休み中に学習支援を行う子どもたちに対して夕食を提供できないかという相談を受けたことをきっかけに活動が始まりました。
〇月１回、カトリック藤沢教会において、第１土曜日に 30 食提供しています。
〇利用者は、カトリック藤沢教会にいらっしゃる方、外国にルーツを持つ方も数名いらっしゃいます。
〇スタッフは、食事づくりの方が６人、後片付けの方が１人います。

3　nico 川名（村岡地区）

〇新林小学校の学区内である川名地区において、子どもたちが遊び・学べる居場所を地域につくることを目的として活動しています。
〇川名通り町市民の家、川名富士見ヶ丘自治会館を活動拠点としています。
〇利用者は、主に小学１～３年生で、常時 10～15 名となっています。
〇スタッフは、常時２人、大人がつくようにしています。
〇令和７年度藤沢市ミライカナエル活動サポート事業に採択されました。

4　学生団体 My Own Place（湘南台地区）

〇学生団体 My Own Place は、私が大学生の時に作った団体で、2016 年に設立しており、10 年目になります。団体の特徴は、学生が運営をしているというところになります。その場にいるメンバー、子どもと関わるメンバーは学生に限定しています。
〇メンバーは、大学生が大体 20 人ぐらい。毎回の活動に来るメンバーが 10 人くらいになります。大学１年生から４年生まで在籍しています。また、OB・OG が何名かいるので、全体ではもう少し増えます。
〇お寺を月２回、子供の居場所づくりを行っています。お寺では午後 1 時 30 分から午後７時 30 分までという長い時間をオープンして、子ども食堂という名前ではなく、子供の居場所として、好きな時間に来て午後５時に「いただきます」をすることだけをルールとしています。
〇食事提供については、子どもは無料、保護者は 300 円、見学者は 500 円にしています。
〇活動を始めて 10 年目になるので、OB・OG が増えてきており、年１回の地域の皆さんをお呼びした謝恩会の開催や、寄付金の管理等を OB・OG が行っています。
〇今ある月４回の活動を変わらず継続し、居場所を存続させ続けることに注力したいと思います。

５　非営利団体ボードゲームでツナグ手（長後地区）

○ボードゲームを通して、家庭内、子どもと大人、子ども同士等、コミュニケーションを取りやすくしていくこと目的に活動しています。

○主に子ども食堂を利用する方々と一緒に親子で遊べるフリースペースや遊び場を設けたり、駄菓子屋さんの前でゲーム体験会を開催したり等を行っています。

３　子どもの居場所としての役割

○子どもだけの参加はありませんが、親子で就学前のお子さんがいらっしゃる際には、高齢のボランティアの方についてもらうことはしています。また、子ども食堂でカレーを提供する際には、カット肉を使用して、肉には直接手に触れないようにする等、衛生面に気を付けて活動をしています。

○例えば、市民の家を活用する際には、静かな場所にいたい子ども向けにスペースを確保する一方、活発に遊びたい子どこ向けのスペースを別に用意する等、子どもの自主性に任せることを主眼として、子どもたちが、自由に、安心していられるような工夫をしています。

○活動の中での工夫や安心できる居場所になる工夫としては、学生が関わっていることに関係しますが、私がこの団体を作ったのは「斜めの関係を大事にしたい」からです。大人である先生や保護者という「敬語を使ったりする相手」「大人」として関わるのではなく、地域のお兄ちゃん、お姉ちゃん、タメ語、タメ口で良いという、そういう斜めの関係の中で、子どもにとってのロールモデルを作れないかなと思っています。学生が等身大で子どもと同じ目線で遊ぶこと、学生の感性を大事にしています。

４　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○子ども食堂を運営していく上で、食材というよりも、その原資である資金の確保は常に問題です。社協さんから提供していただいたり、様々な助成金を活用していたりします。また、「ふじさわこども食堂・地域食堂ネットワーク」からの分配金を活用したりしています。

○団体として法人格を有している訳ではなく、個人個人が集まって活動しているため、活動母体としての金融機関の口座はありません。また、食材・調味料・機材等、子ども食堂の開催日に、その都度、会場まで運搬しています。

○住宅街の中にポツンとある市民の家で活動しているので、活動を始める際に、子どもが大きい声を出すとご迷惑になるという苦情が結構過去あったという話しがあったので、工夫の１つとして、活動開始前、周辺地域に「ご迷惑にならないように活動しますので、ご理解をお願いいたします」とポスティングを２回させていただきました。今のところ苦情等は頂いていません。

○市民の家を活用する際にはイベント保険に加入していることから、活動日数分、保険料が発生しますし、子どもの遊び道具の購入費等、資金不足が大きな問題となっています。また、マンパワーも十分ではありません。

○問題点としては、学生のメンバー確保で、常に毎年かなり苦戦しています。新入生歓迎会だとかやりながら、苦戦しながらも 10 年続いています。また、大学生は４年で卒業していきますので、代が変わるごとに、藤沢市役所や地域の方との関係性がまた初めからとなることの繰り返しは、いつも課題となっています。

○基本的に毎年学生２名は、必ず食品管理衛生の講習を受けて厨房に立つようにしています。ただし、そのためには、1人13,000円、トータルで２万６千円程度の費用がかかり、交通費も出すとなると、なかなか資金面でカツカツになってしまうところが課題です。

5　連携状況・今後の意向

○他団体との共催が多いですが、できる限り、一緒に活動する団体さんに対しては、口出ししないようにしています。

○市内の子ども食堂に関わる団体のネットワークとして「ふじさわこども食堂・地域食堂ネットワーク」が立ち上がっています。年１回の交流会と、社協さんがきて寄付金に関する打ち合わせを毎月実施しています。余った食材があると情報を共有したりしています。また、立ち上がったばかりの団体さんから、「人手が足りないから、手伝ってもらえないか」という相談を受けて、人の手配をしたこともあります。現在、18団体が参加していますが、それぞれ母体ややり方が全然違います。私たちのように民間ボランティアでやっているところもあれば、社会福祉法人や居酒屋さんがやっているところもあります。なので、お金の困り方も全く違います。中には、活動内容が勤務表に組まれているところもあります。「ふじさわこども食堂・地域食堂ネットワーク」の中でも、各団体からの要望全てを吸い上げることはなかなか難しい状況です。

○今のところ、他の団体さんとの連携は残念ながらないです。毎回毎回の開催で精一杯で、そこまでの余裕がありません。

○設立当初から、藤沢市役所さんと密に関わらせていただいていて、例えば子どもの気になったケース等は、相談員の方に相談させていただき、団体内で抱え込まないようにしています。

○「ふじさわこども食堂・地域食堂ネットワーク」の立ち上げに携わりました。当時かなり困っていたことは、ご寄付でいただいた食材を余らせたときに、持って帰れない、使い切れないこと。学生なので、車もなく、基本的に慶応大学湘南藤沢キャンパス近くに在籍している学生がメインですが、埼玉等から来ている学生や、別の大学から来ている学生もいるので、電車で持って帰ることも大変ということがありました。「ふじさわこども食堂・地域食堂ネットワーク」ができてからは、LINE グループがあり、余った食材等を地域の方の中で流しあえたり、お裾分けし合えるシステムが出来上がっており、すごくありがたいと思います。

○私たちは、立ち上げる時に、レインボーカフェ湘南さんのワークショップで知り合い、最近もそこでの受講生の皆さんと色々情報交換をやらせてもらっています。横の繋がりはしたいですが、活動場所が藤沢市内でバラバラにやっているので、私たちが活動している新林地区のところでの繋がりがまだちょっとないかなというのが正直あります。他団体についても知ってはいるし、Instagram 等のフォローはしていますが、実際のところ、自分たちの活動で精一杯な状況です。藤沢市の方からのお声がけがあるとありがたいです。

○子供の居場所づくりに向けたネットワークづくりに取り組んでいます。まだ、ホームページができただけで、本格的に動けてはいません。藤沢市の総合窓口、人の融通、居場所の検索、ノウハウや専門知識の学びの場、団体間の顔合わせや交流、相談の場など機能も包括させたいのですが、手が足りなくて動けていません。事業として発注として受けられると、時間をかけることが出来ると考えています。

○私たちは、社協さんとの繋がりが強いので、非常に助かっています。コロナ禍で人手が足りない時に、一緒に手伝ってもらったりしたこともあります。「ふじさわこども食堂・地域食堂ネットワーク」のオブザーバーとして社協さんにも入っていただいているので、連携がそこでとれるので、非常に助かっています。藤沢市の社会福祉協議会の CSW や事務局長さんの姿勢が協力的で、関係する団体は非常に動きやすくなっています。社協さんを通してのボランティアさんの協力等、非常に助かります。

○私たちも立ち上げの際に社協さんにものすごく助けていただいたエピソードがあります。私たちの団体では車がなく、活動しているお寺が駅から歩いて 20 分かかります。真夏は結構辛いです。買い出ししたペットボトル等の重いものを持って学生が歩くのです。農福連携の日が、２週間に１回木曜日に藤沢市であるのですが、そこに行ける学生メンバーはいません。それでも土曜日に何かしらの食材を欲しいとなった時に、社協の方がアレンジしてくださったのが、地域の方が車を持っているから、木曜日に必要な何かしら良さそうなお米なり野菜をピックアップして、土曜日にお寺まで届けに行くよというシステムを作ってくれて。それをもう何年もずっと続けてくださっています。団体によって、多分求めるものがそれぞれ違うので、ここに手が欲しいというのがそれぞれ違うと思います。そこを、市役所の方が「それなら、こうすれば、いけそうじゃない」というご提案をしてくださり、調整してくださったことは、本当にすごく助かっています。

6　今後の展望等

○活動場所の予約がデジタル化されたことで、予約がしやすくなった等のプラス面がある一方、これまでなら、前後の時間帯の利用団体がわかったので、例えば、前後に使う団体と利用しやくするためにコミュニケーションをとっていたりしましたが、それができなくなったというマイナス面もあります。

○村岡公民館が新しくなり場所も移動しますが、遠くなるのでなかなか行かれないですし、新林地区には子どもの家がなく、物理的なところで、子どもたちの居場所がない状況です。その代わりに、放課後子ども教室が始まっていますが、正直、一保護者の意見としてはニーズには合っていないかなという印象があります。子ども教室であったり、私たちの活動であったり、そのほか民間で良い活動をやられている方もいますが、保護者は全然知らないです。My Own Place さんとか、とても良い活動をされていると思いますが、保護者は本当に何も知らないです。そういう情報を取りまとめるところが必要だと思います。

○学校のスグールというアプリが今藤沢市にはあり、何でも連絡をしてくださるのですが、そういうところに私たちの活動内容を入れることができないか等を少し模索しています。連携は取りたいですが、どう連携をとって良いのかがわからないです。誰が、どこで、何をやっているのかがわかりません。それぞれの団体はとても良いことをやっているのに、情報がアチコチにあり、集約されていません。

○あれはここの部署、これはここの部署、助成金はここ、社協さんはここ、市民活動センターはここに登録してください等、色々な方から連絡していただきますが、共有できないものかと思います。市の居場所づくりに関する窓口を１つにしていただけるとありがたいです。

○緩やかで良いので、団体同士のつながりの場があると良いと思います。

○市の中でも地区の中でも良いですが、子ども関係のことは、そこに行けばちゃんと揃うという場があると良いです。

○子どもの居場所づくりということでいろいろなところがつながると良いと思います。

○子どもを育てている親からすると、新林小学校学区では、今すごく生徒数が増えていて、学童が不足するという危機感があります。転入して子どもが増えることは良いことですが、受け皿が足りていないのではないかと思います。子どもたちは、公園しか遊べる場所がなく、夏でも炎天下の中、公園で遊んでいます。親としては心配です。子どもたちも工夫をして、秩父宮体育館のちょっとしたスペースや小田急にある図書館に行ったりするようですが、狭くて遊べる場所はありません。私たちの居場所も、毎日開けてあげられれば良いのですが、ひと、もの、かねという面で十分ではなく、開けられる日が限られます。秩父宮体育館のどこかのスペースを子どもたちの遊べる場所として開放していただくとかがあると良いです。公園は暑いし、どこに行けば良いのだろうという、子どもたちの中に焦りが伝染していることが良くないと思います。大人が、「そこは大丈夫だよ」と言ってあげられる環境をつくらなければいけないと思います。ハードに関しては、市にお願いするしかないです。

○村岡に関しては、公民館が新しくできますが、遠くなったので行けません。また、公民館を使ったことはありませんが、登録とかがあり、少し使いづらいです。市民の家は使いやすいです。うちの団体では、まだ公民館（市民センター）の利用のハードルが高いです。もう少し良い方法がないかと思います。例えば、居場所ネットワークのようなところが借り、その枠の中で利用できると良いのかなと思います。

○小学生だと行動範囲が狭いので、大きな施設があっても遠いと行くことができません。大きな施設に、代わる代わる色々な団体が入って利用するという考え方もありますが、小さな施設をきめ細かく地域に設けるという考え方もあると思います。

○市全体で子どもの居場所と捉えると少し難しいと思います。地区によって、子どもの多い、少ないも違うと思います。

○地区ごとでも良いので、年１回とかでも、こうした色々な団体の集まりがあると良いと思います。若い世代の声を聞けるような集まりがあると良いです。こういう顔の見える関係性があれば、例えば「その困り事だったら、こちらで何かできる」とかできるのはないかと思います。

○私たちの活動に来ていただいているボランティアの方で、地区に住んでいる方はいません。また、子育て世代の方もいません。皆、孫がいる世代です。私たちの活動は、地区で一人暮らしをされている高齢の方にはくっついていますが、子育て世代の方には全然くっついてないと実感しました。これからはそういう世代の方ともくっついていくことが必要なのではないかと思いました。

○皆さんが仰っているとおり、それぞれの団体さんの顔が見える関係性づくり、ネットワークづくりは、とても大事だと思います。それが、各々の団体にとって、負担にならない形態、時間帯であることが大事だと思います。尼崎市では、どういう風に地域の繋がりを市が管轄しているかというと、顔の見える関係で雑談でき「あの人を知っているよ」というのも大事ですが、同時に、例えば、虐待を疑われる子どものことや、公衆衛生や食品衛生のことをもう少し知りたいとなった時に、専門家のちょっとした講義をきくことができたり、講座を受けることができます。そういう専門的なことを学ぶ機会もあると良いと思います。居場所づくりについてのネットワークを作るのであれば、顔の見える関係の構築も大切ですが、ちょっとしたことでも専門家の話しきくことができたり、専門的な知識を得られるような機会も同時に作ることが必要だと思います。例えば、色々な団体が参加するネットワークが月１回でも顔を合わせる機会を作るのであれば、その際に同時に少しの時間でも専門的な知識を得られる講習を組み込む等をしても良いのではないかと思います。

○そういう専門的な知識を得られる講習等は今もあると思いますが、日にちが限定的であったり、回数が少なかったり、そもそも、あまり知られていなかったりすると思います。

○気軽に相談できるようなネットワークは大切だと思いますが、例えば、それが市の事業となると、何件相談があったという数値（結果）を求められ、例えば、件数がゼロであれば、「それは必要ないことだよね」と捉えられてしまうことは、少し怖いと思います。実績がなければ必要ないということではなく、もう少し長い目でみて、本当に必要なことは何かを見極めながら、次期計画を策定していただきたいと思います。

○こういう場を設けることが非常に大切だと思います。

○それぞれの団体さんの活動の現場に、是非、市の方に来ていただきたいです。現場で子どもがどのような表情をして、どのように過ごしているのかを、肌で感じ取っていただきたいです。

以上

6　9月17日（水）湘南大庭地区

日時	2025年9月17日（水）15時10分～16時20分
場所	湘南大庭市民センター第三談話室
地区	湘南大庭地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

1　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
コミュニティスペース リエゾン	多世代交流の居場所	マイミライ next	細沼惠美子様	代表
遊びリパーク Lino'a おおば	放課後等デイサービス	特定非営利活動法人 laule'a	大郷和成様	副理事長、 施設長
森のようちえん& 森ラボ／つむぎ	子どもや若者の居場所 （スポーツ以外）	森のようちえん& 森ラボ／つむぎ	横山歩様	代表

2　団体概要・活動内容

1　コミュニティスペースリエゾン（マイミライ next）

○マイミライ next は 2023 年 1 月 1 日、藤沢西高校の 2021 年度の生徒会長さんと 2022 年度の生徒会長男子２人の３名で立ち上げました。地域の活性化を目指して、それを目的としてやっています。

○この地区には藤沢西高校があるので、西校の生徒、近隣の子どもから大人（小学校５年生から 80 歳）まで、約 40 名のスタッフに入っていただき、コミュニティスペースリエゾンというものも運営しています。リエゾンは、大体月７回ぐらい開催しています。希望、シフトを取っているので、例えば、水曜日と土曜日しか来れない子がいれば、必ず月に２回は水曜日や土曜日に入れてあげないと、その子が来れなくなってしまいます。また、土曜日にしか来れない子がいたら、土曜日に開催したり等、子どもたちの都合を優先してやっています。

○地域のイベントの運営・主催もしています。最近だと８月２日に、湘南大庭市民センターで「みんなのおおばミライまつり～楽しいに、出会える場所～」を主催でやらせていただきました。昨年に引き続き、今年もやりました。

○マイミライ next をやろうと思ったきっかけは、元々、子ども会議というものを私が作りたいと思っていて、コロナ禍に、藤沢西高校の生徒会さんが、活発に動くところが全くないということで、生徒会長と交流していたので、「何かやりたい」というところから、「まず子ども会議というのを立ち上げてみよう」ということから始まりました。

○その言い出した彼が卒業するにあたり、もう少し自分は活動したいということで、卒業生が入れるような組織としてマイミライ next を立ち上げました。当初、卒業生で構成する予定だったのですが、当時現役の高校生たちもやりたいということだったので、現役の高校生も入ることになり、段々年齢が下がってきて、今は小学校５年生から入っています。

○なぜそうなったのかというと、不登校の子がいて引き籠っている状態を、週に 1 回でも地域に出て、色んな人と触れ合えると良いと思っていましたが、私が応募したり求めたのではなく、おそらく口コミで、「ここなら大丈夫」ということで集まってきています。他地区の子や近隣の小学校の子もいて、地区内外問わず、不登校の子もいますし支援級の子もいます。そういう子どもたちの居場所にもなっています。去年ですと延べ 2500 人の方がリエゾンを利用してくださっています。地域の独居の方の居場所にもなっています。

○私の団体に関しては、子どもだけではなく、子どもから大人、地域の人の居場所、それからスタッフの自分たちの居場所にもなっています。

○社会福祉協議会さんから３年間、助成金をいただき、運営しています。今年もお祭りをやったり、色々なものを運営しています。

○コミュニティスクールの学校コーディネーターとして、大庭中学校で、毎週月曜日の午前中に保護者を対象にした居場所を今年４月から開いています。

2　遊びリパーク Lino'a おおば（特定非営利活動法人 laule'a）

○私たちの団体は、NPO を立ち上げたのは 2015 年で 10 年前になります。

○団体設立のきっかけは、障がいがある子どもたちの中でも、身体に障がいがある肢体不自由児というお子さんと、医療が必要だったりする重度障がいと言われるお子さんたちの居場所が、なかなか制度の中で増えていかなかったので、そういう場づくりをしようということでスタートしました。

○辻堂地区でスタートして、今は藤沢市内に辻堂と大庭に子どもの事業所が２箇所、茅ヶ崎市に１箇所、横浜市に１箇所、子どもの事業所４箇所と、あと羽鳥に、高校卒業した後の大人の方の居場所づくりという形で、もう１箇所を運営しています。

○私たちの事業は、ボランティア活動ではなく、公的サービスの提供の中で、居場所づくりを実施しています。ただ、施設内だけではなく、できるだけ地域交流を進めていきたいという思いがあり、大庭地区では５年前に敷地の一角を整備して公園をつくりました。インクルーシブ公園で、車椅子の子どもたちも遊べるように、車椅子ごと乗ってグルグル回れるものや、寝たまま乗れるブランコ等を自前で設置して、地域交流ができるような形をとっています。

３　森のようちえん&森ラボ／つむぎ

○ひっこりーの森のようちえん＆森ラボ、つむぎという名前で、色々な活動をしています。

○活動を始めて１年未満です。藤沢市発達連続講座を受けて立ち上がった団体です。

○活動内容としては、子どもが自然の中で遊ぶことによって心が癒されるということが狙いとしてあります。

○私自身が保育士をずっとしていて、保育士時代に子どもたちの生きづらさを解消したいという想いがありましたが、保育園でやろうとすると、なかなかそれが叶わないと感じていました。そこで、どこだったら叶うかなということと、どんなことがやりたいのかなというものも自分自身が探していて、その時に居場所と森のようちえんに出会いました。

○理念がすごく子どもの生きづらさを解消するにはぴったりだなと思い、森のようちえんのことを勉強しつつ、それを小学生と子どもに下ろしていき、心の根が腐らないように育てていきたいというのが理念にあります。

○不登校を抱えているお母さんと２人でやっています。

○もう１人、２年生のお子さんがいるお母さんとつむぎという活動をしています。

○森のようちえん自体は、これから普通に活動資金を得ながらやっていくものになるので、フリースクールと森のようちえんが一緒になった感じで運営してこうかなと思っています。

○一方、つむぎはボランティアでやっているので、資金運営がすごく難しいと思っています。

○子どもたちを預ける場所を提供したくて、それがお母さんたちの罪悪感がないようにというのを考えています。つむぎという活動では、ご飯を作って食べることと遊ばせるということを、全部一体として、１日預かる形で今は運営しています。ただし、そこでも、運営資金の関係で、長期休みの間だけ、年に何回かやろうという感じで、イベント型で始めていています。

○また、ラポール稲荷さんが居場所づくりをしていますが、その場所を借りて大雨とかの時に使える居場所や、高齢者と一緒に関わることができたら良いと考えています。

○森のようちえんは、地域の方と密接に活動することが狙いにあり、自分１人で生きていくのではないよ、皆で支え合って生きているよということがコンセプトにあるので、地域の皆さんの農業や味噌作り等、一緒に体験しながら、食を学びながら、衣食住を学ぶというか、そういう感じの活動ができたら良いなということで、今動いています。

４　藤沢市社会福祉協議会コミュニティソーシャルワーカー

○今年の４月から大庭地区を担当していますが、その前に御所見地区を５年間担当させていただいています。

○生活困窮者の自立相談支援の個別の相談支援と地域づくりのお手伝いというのを、自転車の両輪にして、個別の課題から見えてくる地域の課題だったり、地域の課題から見えてくる個別の方々の様々な生活困窮の困難のところを、どうやって地域と繋ぎ合わせながら解決していくかということで、地域の皆さんにお世話になりながら活動をしています。

３　子どもの居場所としての役割

○私は、あまり根掘り葉掘り聞かないようにしています。「なんでここに来たの？」等、自分から聞くことはしません。元々、口コミで来ていただくことが多いです。例えば、西高校の生徒のお母さんと、不登校のお子さんのお母さんが同じ職場だったりして、「リエゾンであれば行けるかも」という感じで、子ども同士は会ったことはないですが、お母さんが不登校のお子さんを連れてこられることもあります。実際に私たちがやっているところを見てもらいますが、スタッフは一切質問しませんし、普通に接してくれます。「コーヒーを入れてみる」や「洗い物をしてみる」等、そこで実際にやってもらい、帰宅した後にお母さんに聞いてもらい、次この日あるけれども「来る？」ときいて、そこから来てしまえばスタッフとして接します。「今日何かあったの？」「どうしたの？今日顔色悪いね」等、スタッフ全員何も聞かずに、向こうから言ってきたら答えています。高校生だと、皆 LINE を繋げたりするので、家で何か良くないことがあると、「今日こんなことがあって、聞いてくれます？」という感じに自然になります。意外にさらっとしています。不登校の子に関しては、そのような感じです。

○支援級の子については、お母さんが自立させたいと想いがあります。大庭中学校、滝の沢中学校両方にありますが、年々増えています。中学卒業して就職させるか、支援学級に行かせるか、お母さんたちもすごく悩んでいます。そういう方もすごく来ているので、お母さん同士をつなげてあげることをしています。中学３年生になり進路が決まると、中学２年生のお母さんは気になるので、そこを自由にやってもらえるような場に自然となるように、あまり意識せずにやっています。

○小学５年生だろうが、同じスタッフとして接しています。一緒の目線で接しています。褒めることもしますし、勿論怒りはしませんが、注意はします。「ここはこうだよ」「今のは少し良くなかったよ」等は言います。

○私たちの事業所は、サービス提供なので、基本、契約が原則になって来られます。不特定多数の子どもが来るのではなく、特定数の子どもの支援がベースになっています。プラスアルファで、敷地内に遊びに来た子どもと交流していますが、ここでは、根掘り葉掘りきかずに遊びに来てもらっています。

○私たちは、重度の障がいのある子どもに対しても、ベースとしては子どもとしての育ちをしっかり見ていこうと考えています。なので、重度だからこうするという訳ではなく、本来、子どもには自然の体験も必要だよねとか、人と出会うことも大切だよねとか、社会に出てくことも必要だよねということなので、重度障がいですが、施設ある場所の道を挟んだところにある田んぼを貸していただいているので、重度の子どもでも３人かかりぐらいで田植えをしたりしています。そのほか、イベントを開催するとか。また、藤沢市役所のイベントの時に車椅子の子が出展したりしています。社会に出ていくこと、体験、社会体験を結構大事にしてやっています。

○藤沢市内には、障がいのある小学校１年生から高校３年生までの子が通う放課後等デイサービスが 70 以上あります。10 年前立ち上げた時は 27 番目の施設だったので、ものすごい勢いで増えています。ただ、おそらく近隣の子どもと遊ぶ機会はあまりなくて、結局散ってしまいます。私たちも、放課後の時間に、どうにかうまく学童の子とかと遊べないかなと思っていますが、なかなか機会がないです。辻堂の施設では、海浜公園で学童の子どもたちと遊んだりはしています。私たち施設側から社会や地域に出ていかないと、接点がなかなかないです。それがなくても、多分、子どもたちは支援を受けて育っていきます。「それで良いのか？」というのが私たちの中にありますので、極力、外に出て、人との触れ合いを大事にしています。

○私たちは、まだ親子で来ている方が多いので、親が連れてきているという感じで、親へのケアの方が多いです。子どもたちに対しては、子どもたちのありのままの姿を見守ることを大事にしています。喧嘩が始まろうが、まずは見守るスタンスでいきたいと思って接しています。喧嘩は、手が出ないように、怪我がないように見守る姿勢でやっています。また、子どもの主体的な活動を考えています。先日、子どもたちと遠足をしましたが、子どもたちにプランを立ててもらい、子どもが行きたいところに行きます。真夏ですが、子どもたちが外で水遊びがしたい、水鉄砲がしたいということだったので、バス、電車に乗り、新林公園で水遊びをして帰ってきました。不登校の子も参加していたので、不登校の子と、普通に学校に通う子が知り合う機会にもなりました。参加してくれる子どもたちのリピート率が高いので、そういうイベントを今後も続けたいと思います。子どもたちは喜んで帰ってくれています。今後の活動として、お祭り出店を考えていて、江ノ島のフィッシャーマンズマーケットに出させていただくことになりました。そこで、子どもたちが作ったものが売れたら、本当に良いなと思います。高校生世代の不登校の子たちが、社会復帰できるような活動も少し取り入れて、いろんなところで子どもたちがキラキラできたら良いと思います。子どもたちの生きづらさがなくなる活動を今後もしていきたいと思います。

○基本、企画は全て子どもたちにやってもらっています。子どもたちが「やりたい」ということに対して、そこで「ダメ」と言ってしまうと、子どもたちは自分たちの意見は通らないと思ってしまいます。なので、必ず、どうにかしてやれるようにすることが、こちら側のすべきことだと思っています。場を提供するから、企画は全部自分たちでやってみてというスタンスで接しています。子どもたちの言っていることをどうにかしてあげます。勿論、ダメなものはダメと言います。ものすごい案を出してきますから。流石にそれは無理だろうというものもありますが、まずは一度ホワイトボードに全部書いて、子どもたちに考えてもらいます。皆でそれをみながら、流石に無理ではないかというのは、自分たちでもわかります。高校生や大学生になると、ちょっとこれは無理じゃないかと小学生に言ったりして。そこは子どもに、何時間かかろうが任せて、それでは「これでやろう」と決めていきます。お金と場所は大人が用意するから、みんなは当日頑張ってという感じでやっています。そして、反省会もします。子どもなりに、やっぱりこうした方が良いのではないかというのはあるので、それは次の年に活かすようにしています。以前、イベント開催時に過剰にチラシを印刷して大量に余らせたことがありました。それを小学５年生の子が見ていて、「あれは無駄だから、当日チラシはやめて、暑いから団扇にして、そこに会場図を入れた方が良い」という案を出しました。私は、それは是非やってあげようと思って、西校を卒業した専門学校の美術部の子にデザインしてもらい、裏は私が頑張って作って、今年のイベントでは団扇を作りました。先日の反省会でも、あの団扇は良かったという話しになりました。子どもから出たちょっとした声や意見でも、それを拾い上げることを心がけています。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○この地域で 20 数年ボランティアをしてきており、ずっと青少年団体をやってきました。こうしたこともあり市民センター内でカフェ営業もでき、非常に恵まれています。なので、活動する上で困ったことというのが、今のところありません。場所代や光熱費がかからずに活動をやらせていただいていることは、非常にありがたいと思っています。次の世代の方に譲っていますが、私自身が、今、自治連の会長をしており、地域に根付いています。

○今後のことでいえば、今年までは助成金をいただいて活動しているのですが、来年からは自分たちで全部運営していかなければいけないので、イベントの拡大などを考えています。

○今、大庭地区には、49 自治会ありますが、退会する方も増えており、地域でのコミュニケーションはいらないのではないかという風潮にもなっているので、今日は本当良い機会だと思い参加しました。

○元々、大庭地区には、あまり地の方はいないです。ここで生まれ育っても、会社に入り都内で勤務していたりすると、なかなか地域に残る人が少ないです。その中で、長く会社に勤めていて、65 歳や 70 歳で、いざ地域デビューしようと思っても、特に男性は友達もいないし、地域に入りにくいです。意外に女性は馴染めると思います。鵠沼や片瀬のように元々の地の方が多くいる地域の中で、こうした居場所づくりの活動をするのと、こういう元々ニュータウンのような場所で活動するのとは違うと思います。そういう地域性はあるのかなと思います。大庭地区のようなところでは、新しい事業所さんが入ってきたとしても、何らかの機会がないと、なかなか知り合いになることはないと思います。

○私たちも活動する上で困っていることがあるかという、あまりありません。

○地域の子どもたちとの交流の機会が増えているのかどうかというと、そこはまだ少し課題ともいえます。どこかに音頭を取ってもらい、地域の子どもや私たちのような事業所が来るようなイベントみたいなものがあれば参加しやすいです。自分たちが、企画、調整するというのは、結構大変です。

○私たちはまだ知名度が低く、ドキドキしながらやっています。インスタで問い合わせをしてきた人たちには情報をオープンにしています。また、森のようちえんは、外で歩くことが主になるので、事前に連絡をしてもらわないと参加できないシステムになってしまっています。少しずつ知名度を上げたいとは思いつつ、知名度が上がったら上がったで少し戸惑ってしまいます。少しずつやっていこうと思います。

5　連携状況・今後の意向

○近隣で田んぼを耕している人との繋がりから、人が人を連れてくるような形で、つながりは増えています。先日は、人と人とのつながりから、ラーメン屋さんが来てくれて、振るまってもらうということもありました。

○事業所自体は城南の交差点近くなので、周辺に住居が少ない場所で、自治会等との繋がりはほぼない状況です。事業所運営として立地しているので、そこに住んでいる訳ではありません。住宅街に立地している訳でもないので、そういう意味で地域交流は少ししづらい場所だと思います。敷地内に公園も整備しましたが、元々、住んでいる方、徒歩圏の方も少ないので、なかなか活用されていません。

○施設に来所しているのは車椅子の子たちなので、パパっと外に行くという訳でもありません。基本、放課後の一時的な支援なので、学校が終ってから１～２時間ぐらいでまたご自宅まで送迎することになるので、普段繋がる時間がなかなかありません。日頃とまではいかなくても、外に出るきっかけか

ら、まずは知るということを増やしていきたいと思います。ただ、いきなり何か関わろうというのは、ハードルが高いと思います。以前、地域の子どもたちに来てもらったことがありましたが、接し方がわからないので、それぞれが自分たちだけで遊んでいました。そういう場合には、大人側がその間に入り、遊びの中でもまずはコーディネートしてあげることが必要だと思います。最初は、広い場所でたまたま一緒にいたりするというところから始めていかれると良いのではないかと思います。インクルーシブの取組でいうと、神奈川県と一緒に「ともいきゆうえんち（インクルーシブ移動遊園地）」というイベントを開催しています。去年は辻堂海浜公園で開催して、先日は茅ヶ崎市総合体育館で開催しました。10 人ぐらいが一緒に飛べるトランポリン等を持っていって、車椅子の子もそうでない子も一緒に飛ぶような取組をしています。そこで一緒にいることで、お互いに視界に入るので、それが楽しいイベントであれば、嫌な気持ちにならず、ポジティブなものが繰り返されていくと、直接的に介助や支援しなくても、そういう人もいるということが当たり前のこととして認識されていくと思います。そういう意味では、幼少期から関わる機会を増やしていきたいと思います。

〇私たちは、ふじさわ SDGs 共創パートナーとなっているので、色々な企業さんが入っていて、その中で毎回勉強会や、ラジオに出させてもらったり、色々とお話をいただけるので、そこには副代表３名の学生と一緒に参加するようにしています。そこをきっかけに企業さんと繋がったりしています。制服のリユースをされている企業さんと勉強会で一緒になったことがあり、その企業さんがランドセルの譲渡会をされているのでリエゾンで「いらないランドセルを集めています」という張り紙をすると、持って来てくださる方がいます。市役所のロビーで開催されているので、その横でコーヒーを一緒に販売しようかなと考えています。

また、今年の４月 29 日に大庭図書館 25 周年企画「図書館 de カフェ」というイベントをやったのですが、とても好評でしたので今後も大庭図書館のテラスで、リエゾンを開催できることになりました。また、色々な団体と連携 して地域のお祭りを開催しています。社会福祉協議会さんと連携してやったりもしています。連携した取り組みの方が多いかもしれません。

〇私たちのところでいえば、例えば、全員で行かないにしても、森のようちえんさんのところに行って一緒に遊ぶとか。数人の子でも行くことができて、一緒に遊べると良いと思います。以前は、地域全体が、本来は遊び場だったはずですが、私たちのような事業所でのサービスでは、箱の中でのサービス提供になってしまいます。本来は、地域が広いということも、本人たちには見てもらいたいと思っています。色々な出会いを体感して欲しいと思います。そういう意味での情報が、なかなかキャッチできていないかもしれません。

〇私自身、カラフルサポーターズというのにも入っているので、その人たちから情報を得ています。また、今後は不登校支援とかもやっていきたいと思います。また、ラポールさんが結構イベントをしていて、皆で作りながら参加しているので、そうした中で、いろんな人と繋がっています。

〇地域の中でどう顔見知りを作っていくのかということは、これからの課題として取り組んでいきたいと思います。

6　今後の展望等

○活動する場を簡単に用意できる方はあまりいないと思います。結構厳しいと思います。なので、藤沢市としては、居場所づくりの場所としてこういうところがありますよという情報発信とマッチングができると良いと思います。団体を立ち上げたばかりの方が、自分たちの活動場所を確保するのは、相当、ハードルが高いので、そこは市の方が提供してくれて、一緒にやってあげることをしないと、やろうと思っている気持ちが萎えてしまうと思います。やりたいと思っている人と場をうまくマッチングできれば良いと思います。

○居場所づくりの活動をしたいという人はいると思いますが、その場を見つけることが難しいと思います。

○私たちは、障がいのある子どもたちのケアについての専門的な知識や技術を持ってサービス提供していますが、そういう人材が、例えば、地域、学童等に入ることにしっかり予算がつけば、そこで一緒にいることに配慮しつつ、共に体験することができると思います。そういう藤沢市モデル、居場所ができると良いと思います。

○自分で情報を見つけて外に出ていくというのは、結構、難しいです。事業所の方も、目の前の支援でいっぱいいっぱいなので、そういう情報の発信や、団体同士のマッチング、この事業所ではこういうイベントがありますよという情報を投げてもらえると、「それなら行こうか」というきっかけになると思います。そういう意味では、居場所に関する様々な情報を提供してもらえると心強いと思います。

○文化センターや遊べるプール等に行くことも多いのですが、そういう施設を子どもの居場所づくりをしている団体として利用する際の割引のようなものがあるとありがたいです。そこで費用が発生してしまうと、参加してくれる子どもからお金をいただかないといけなくなります。サークルとして子どもを預かるとするとお金がかかってしまうので、施設を借りて子どもを預かることはできないねという風になってしまいます。そこが難しいです。活動団体に対する無料の活動チケットのようなものがあると助かります。

○例えば、子ども居場所づくりの講座を受けた人が、指導員として学校に入っていけるような仕組みが作れると良いのではないかと思います。そうすることで、不登校にならずに、学校で学びを深めることができるのではないかなと思いました。

以上

７　９月17日（水）藤沢、村岡、辻堂、片瀬地区

日時	2025年９月17日（水）18時00分～19時30分
場所	藤沢市役所本庁舎５階　会議室５－１
地区	藤沢、村岡、辻堂、片瀬地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

１　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
村岡テラス	地域の縁側	社会福祉法人八寿会	永岩秀之様	社会福祉士
つじどうすなやま 子ども食堂	子どもや若者の居場所 （スポーツ以外）	辻堂砂山子ども食堂	内本英樹様	
寺子屋ハウス	不登校児童生徒 対策事業ほか	特定非営利活動法人 湘南まぜこぜ計画	原田建	代表
よつば保育園 子ども食堂	子ども食堂	株式会社ストーブ カンパニー	齋藤勤様	代表取締役
てらこやわはは 自由な学び場 まなびこ	子どもや若者の居場所 （スポーツ以外）	NPO 法人育ち合い広場・てとてとて	小川智子様	代表
藤沢市科学少年団	子どもや若者の居場所 （スポーツ以外）	藤沢市科学少年団	石井幹夫様	
まりあ食堂	子ども食堂	まりあ食堂	相澤純子様 柳田あゆ様 鳥生文子様	代表

2　団体概要・活動内容

1　村岡テラス（社会福祉法人八寿会）（藤沢地区）（村岡地区）

〇法人としては、高齢や障がい、教育に関わる事業をしています。
〇今回は、地域の縁側という取り組みとして参加しています。子どもの居場所づくりがテーマだとは思いますが、私たちは多世代という形でやっています。
〇地域づくりと地域共生を１つ大きな理念として軸に持っていきながら、取り組んでいます。

2　つじどうすなやま子ども食堂（辻堂砂山子ども食堂）（辻堂地区）

〇小学生を中心とした対象で子ども食堂をやっています。
〇子どもに食事を提供して、食事の後にレクリエーションを提供しています。
〇時折、学習支援を行っています。

3　寺子屋ハウス（特定非営利活動法人湘南まぜこぜ計画）（藤沢地区）

〇居場所について、市役所の近くで 2016 年から寺子屋ハウスというものをやってきていますが、今はハロワークの前の公園がメインのフィールドです。
〇駄菓子屋を開いたり、フードバンクからの食料品を提供したりということで、毎週開いています。
〇もう１つは、空家を使い、片瀬１丁目で町内会と協働して、寺子屋や高齢者のお茶飲みの居場所づくりをしています。

4　よつば保育園子ども食堂（株式会社ストーブカンパニー）（藤沢地区）

〇保育園を運営しています。湘南台地区と藤沢地区等、よつば保育園という保育園を市内で７園運営しています。
〇また、その中の一園で子ども食堂を運営しています。

5　てらこやわはは（NPO 法人育ち合い広場・てとてとて）（藤沢地区）

〇私たちは 2017 年に任意団体を立ち上げ、2022 年に法人化しました。
〇法人化のきっかけは、学校に行っていない子どもたちの拠り所、学習の場を提供したいというところで、必要に迫られてというか、学校とやり取りするために、法人を取得した流れになっています。
〇学校に行ってない子どもの拠り所を、週４日開いています。
〇弥勒寺を拠点として、青少年会館や大鋸地区の市民の家等を活用して活動しています。
〇また、週１回、だれでもどうぞの放課後の居場所活動を大鋸地区で行っています。
〇その他、フードバントリーや、年に数回の大人の座談会、親子の自然体験活動等を開いています。

6　藤沢市科学少年団（藤沢地区）

〇基本的に居場所として活動している訳ではありませんが、結果として居場所になっているということで参加させていただいています。
〇1983 年に設立されました。大体、小学校４年生から中学校３年生までで、多い時は 120 人くらい参加しています。最近は少し少なくて 70 人くらいです。
〇子どもたちと月に１回、自然科学に関する様々な活動をしている団体です。

７　まりあ食堂（片瀬地区）

○まりあ食堂は、2016 年６月から月に１回第１木曜日に、子どもとその保護者に対して、まずは一緒に食堂に集まってご飯を食べようということで、地域のボランティアと教会の信者の有志と一緒に立ち上げたものです。

○居場所というところでは、子どもとその保護者がお弁当を取りに来た時に遊んだり、みんなとお話ししたり、お母さんたちとスタッフがお話ししたりします。

○また、高齢ボランティアの方がコロナ以降に相当増え、お弁当形式に変えたということもあり、お弁当を作る人、盛り付ける人として、自分たちができる時にできることをするということで、ボランティアの居場所にもなっています。

○お弁当は予約制で 180 食をマックスにやっていますが、予約不要のパントリーと遊び場を提供しています。また、サポート校の高校生の方たちが活躍して、子どもの遊びを担ってくれています。

３　子どもの居場所としての役割

○社会福祉法人という団体であり、医療と福祉の専門職がたくさんいます。地域づくりということに関しては、我々のプロとしての仕事はそれとして、それだけにとめず、地域社会の一員として、そういう専門家が地域社会に広く開放されるというところを、すごく今テーマにして取り組んでいます。なので、職員が地域に開放されるということと、法人が持っている建物や設備を地域に開放していくという取り組みを大事にしています。例えば、地域の子ども会等の色々なイベントに我々も参加しています。一市民、一地域の住民として参加していくというスタンスで、働いている間ですが、そういう形で地域社会に参加しています。専門家が、地域の中に何となくいるという状況を作っています。そうすることで、顔の見える関係が自ずとできてきますので、世代を問わず、子どももそうですが、何となく知っているおじちゃんに段々なってきているという実感があります。取り組みをして８年になりますが、朝、自分の職場近くを歩いていると、小学校や中学校のお子さんが普通に挨拶してくれるような状況になっています。近いおじさんと言いますか、顔の見える関係づくりをしながら、福祉専門職というところを大事にしつつ、地域社会に広く参加しています。

○参加者を増やす工夫としては、公式の Instagram で、開催を知らせる告知や、終わった後に開催の状況を説明する写真や文章を発信しています。そうすることで、所謂 SNS の口コミから、結構、参加者が増えてきています。また、安心して来てもらえるということでは、子ども食堂ですので、食中毒を極力出さないように、保健所の指導を色々と受け、それに忠実に実施することを徹底しています。

○基本的に居場所は、子どもたちが歩いて来れる距離感で、広がる必要があると思っています。親でもなく、学校の先生でもない、今なかなか空洞化して失われつつある地域のコミュニティの再生にとっても、やっぱり子どもが中心にいるということが、居場所の多様性にとって非常に重要です。子どもが、学校に行っていようがいまいが、まぜこぜいうことで、そういう子どもがまずは安心して居られるような場所を心がけています。来る子が慣れてきて、困り事がそこに見えてきたら、個別支援をするという基本スタイルでやっています。

○子ども食堂に関して言えば、始めて２年経っていますが、保育園の卒園児が来るようになっています。保育園の時はすごく手厚く見ていたのが、小学校に行って少しお困り感が出てきたりとか、悩みが出てきたり等しても、卒園した保育園であれば気軽に来れて、知っている先生にはちょっとお話ができ、

お困り感が少しでもなくなったら良いと思います。同時に、保護者支援もすごく重要だと感じています。子どもが安心するためには、やっぱり保護者が余裕を持って子育てできてないといけないと思います。保育園を利用した後に食事をして、子どもと一緒に帰るということで、ちょっとでも時間的・精神的な余裕を持ってもらい、子育ての悩みを保育士に相談できるような環境を提供できると良いというところから始めています。保育園も、ただ子どもを預かる場所というだけではなく、多機能化して地域と繋がり、いつでも相談できるようになることが、これから求められてくると思います。そういう意味で、開かれた保育園ということが重要だと思いますが、安全面を考えると、不特定多数の方を入れることは、なかなか勇気のいることです。その辺をどう折り合いをつけながらやるのかが今後の課題です。

○私は地域の小学校の保護者として始めたので、先ほど、地域の中での顔の見える関係性や、地域の中で歩いて来れる場所という話しがありましたが、全くその通りだと思います。地域で「おはよう」と顔を知っている中で来れるような距離感と関係性を大切にしています。私自身、長いこと PTA に関わっていることもあり、結構子どもたち間でも「見たことのある人」と認識されています。お話し会等にも関わっているので、学校にいる人という安心感、地域の親・保護者がいるという安心感があると思います。普段から心がけていることは、地域で歩いている子どもたちに積極的に声をかける、挨拶することです。

○少年団の性格上、自然観察で野外に行ったり、屋内で科学実験や電気工作をやったりと、色々なことをやっています。そうした活動の中で、子どもたちが怪我をすることは少なく抑えられています。子どもたちが意識をしているからだと思います。保険にしっかり入っていますが、40 年間で保険を使ったの３回だけです。山で転んで怪我をした時、自転車で転んで怪我をした時、スズメバチに刺された時の３回です。それだけ、子どもたちも気を付けて、頑張ってやっているのかと感心しています。

○工夫というところは、周知、広報で安心していただくことです。初回からマリア通信というものを月に１回必ず終わった後に出しています。これを小学校、保育園、幼稚園、関係者、ボランティアにお配りしています。また、衛生、怪我の対応、保険の加入、食品衛生というものは、定期的にアップデートをして、メンバーと共有しています。皆さんとやっぱり重なっていると思いましたが、自然体で構いていて、「ああ、来た、来た、来た」といって囲むのではなく、子どもは、どんな居場所をやるにしても、大人が何かをやっていると自然に寄ってくるところがあるので、自然体で関わりながら、大人が本気で遊ぶこと、一緒にやることを大切にしています。そのほか、教会という場を使っていることが、私たちは大変に恵まれていると思います。教会やお寺は、安心感を人に与えるということを、お世話になっている皆さんからも言っていただいています。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○活動の中で大事にしていることは、指導者をできるだけ増やしていくことですが、これがなかなか難しいです。活動の性格上、学校の教員が良いのですが、皆さん忙しくてなかなか来てもらえません。最近は、学校の教員ではない方も結構増えてきています。また、中学３年生で終わりますが、その後OBとして残ってくれて、ずっと手伝ってくれる子が、高校生から社会人までいます。

○地域の縁側という取り組みをしている団体が、今、藤沢市では 40 団体ありますが、私たちのように法人格でやっているところもあれば、地域の有志の方でやっているところもあります。そういう方々とお話しをしていると、真っ先に頭に浮かんだことは続けることの難しさです。その方が担う負担感というのが、私たちは法人だからこそ何とかできているけれども、そこを気持ちでやっていたり、地域の一人でやっていたり、地域の有志の方がやっていると、やっぱり辛いというのはあります。そうした時に、公的な支援があったり、何らかの繋がりづくりのサポートがあったり等、活動を続ける人をサポートすることはすごく重要なのではないかと思います。

○私自身、地元の湘南台で今年から地域の縁側の活動もやっています。ボランティアスタッフは 70 代後半から 80 代の方が多いです。そうすると本当にいつまで続けていかれるのかなと思います。火曜日の昼しかやっていないので、その場に子どもが来ることはないですが、本当であれば子どもたちにも来てほしいです。小学校に入る前のお子さんがお母さんと一緒に来て、情報交換してくれると良いなとは思っています。活動を知ってもらうということは大事だと思います。また、そういう場所は、意外とこじんまり固まってしまって、入りにくい雰囲気になるリスクもあるので、できるだけそれを撤廃して、入りやすくなってくれたら良いと考えながら運営しています。

○やっぱり続けることが、本当になかなかの課題です。今日も、学び場に関わっているスタッフさんで、活動の最初から関わってくれた人ですが、12 月末で辞めたいという話がありました。後任を見つけなければなりません。続けていくには、どのような形であれ、何らかの見返りが不足していると思います。切実な悩みです。人手不足への対応と、公的な支援があると、安心して活動できると思います。私たちは、子どもたちが安心できる場づくりをやろうと思っていますが、私たちが不安になってしまっては、多分それも子どもたちに伝わっていくと思います。やっぱり自分たちが少しでも安心して活動を続けられるような状況になると良いというのが一番の想いです。

○私の団体は、今年度、地域の縁側に応募しましたが、落ちました。地域の縁側は 10 年経ち、やっぱりそこにも課題があると思います。要件等。うちがもし入れたら、平日の昼間に開いている地域の縁側が多いので、不登校の子等が、家に引き籠っているよりは、地域の縁側と結びつく、そういうスタイルが作れないかと思っています。空家を使った居場所では、不登校だった子が、図書室を中学生ながら企画して開いたりとかしています。当事者が担い手になっていくスタイルが必要なのではないかと思います。一方で、その図書室のもう１つの側面としては、ダウン症の青年がコーヒーを入れたい、バリスタになりたいという夢を持っていて、月２回、そこにコーヒーを入れに来ています。そういう当事者が、自ら自分のやりたいことがやれる場を作っていくと、そこにはすごい発信力が生まれます。だから、なるべく支援者という関わりを広げるというよりは、やっぱり当事者が担い手となってやりたいこと発信していく場づくりが非常に大切だと思います。今、不登校の小学生が寺子屋には必ず来るのですが、その子がもっと平日の昼間に来れるように、「自分で企画を立てな」というと、「ゲームをやりたい」というので、それもありだなと思っていて、引き籠りでゲームを得意としている大人を見つけてやろうとしています。それも当時者が自分で企画を立ててやるスタイルです。そこに、さら

に当事者が集まってくるということができないかと思っています。ただ、活動の場として教会やお寺があったり、社会福祉法人の皆さんには場があることが羨ましいです。空家を使って町内会にも補助をしてもらっているとはいえ、家賃が月 10 万円かかります。維持することにどうしても汲々としてしまう現状があります。地域の縁側では、月何回か開けばいくらという基準があるわけですけれども、うちのメンバーは全員働いているので、日中の平日に週何日も開けることはできません。そういう場づくりに必要な、そのための基盤にかける経費、これが子どもの居場所づくりをしていく上で一番困難なところです。そういう状況なので、直営でやる居場所はこれ以上負担をできないことから、幼稚園と共創でやることを考えています。とある幼稚園で経営が厳しくなっている中で、そこを居場所にできないかという相談を受けています。小学校にはすぐに溶け込めずに、小学生になって困り事を抱える子たちにとって、自分の保育園や幼稚園なら身近だしで、それが１つの受け皿となって地域と関わっていくというスタイルを考えています。また、ある団体から寺子屋を立ち上げたいという話があり、そこでも場所は提供してもらえることになっています。これからは、そういうコーディネートであれば、子どもの居場所を広げていくことが少しはできるかなとチャレンジし始めています。

〇僕らは、普段毎日保育園事業を一生懸命やっていて、情報不足というのもありますが、今日初めて地域の縁側事業を知りました。子ども食堂にしても、居場所ということが、どのぐらい周知されているのか。果たして、それを必要としている子どものところに届いてるのかという不安があります。知ってもらうにしても、ただ大人が「行ってみたら」と言っても、なかなか来ない状況があります。この辺がものすごい課題だと思います。また、継続していくための資金というところは、どうしても見ていかざるを得ないところだと思います。私たちの子ども食堂は、給食室を使ってやっているので、簡単にボランティアの方を入れることはできません。「衛生管理はどうなっていますか」という話しになってしまいますので。そこはすごく厳しい状況になっています。例えば、「野菜をもらったので使えませんか？」と言われても、すぐにそれを使うことはできません。決まったメニューを、決まった衛生管理のもと、調理士や栄養士がしっかり作る形になっています。資金的には持ち出しで、社内でやっています。補助金も多少あり、補助金をもらった時には、フードパンリーや、一般の方にもお出ししています。活動面で困っているといえば、お金とどうやって周知させるかということです。また、「本当に必要な方なのかな？」というところは難しいです。また、子どもの支援ということでやっているので、子育て世帯にフードパントリーをやっていますが、それを見分ける術はありません。誰が来ても良いという風にしてはいますが、それでも子ども支援だということは謳っており、なかなかそこを見分けるのが難しく、本当に届いているのかと不安に思うところはあります。

〇困っていることとなると、お金と人になります。お金は民間の財団から援助してもらったり、たまに個人の方から連絡をいただいて「寄付したいので」と言われてまとまったお金をいただいたり、銀行に振り込んでいただいたりすることも結構あります。そういう状況ではあります。民間や個人の方から、どうやったら寄付をしてもらえるのかということを今考えています。人の問題については、ボランティアをしてもらえるように知人に声をかけたり、チーム藤沢というボランティアサイトがあるので、そこで声掛けしていますが、現役世代の方は仕事を持っていてなかなか毎回は来れないとなると、やり方が少し雑になってしまうところがあります。その辺、少し固定メンバーを作り、プラスアルファの人たちでやるという風にできないかと、今悩んでいるところです。

〇お金は最初持ち出しでしたけれども、寄付のメニューや助成金が相当増えたことと、企業の SDGs で、かなり色々なものが落ちてくるようになりました。これを取りに行くことも考えて、藤沢市域での子ども食堂ネットワークを 2023 年に仲間と作りました。実施する側の皆で情報をシェアしたり、企業

の助成金のメニューや寄付をしてくださる企業さんの情報等、色々と流通させています。また、利用者にとっては、どこでどういう食堂さんが参加してるということを見える化しています。企業さんに対しても、加入団体として一度にお礼を申し上げられます。子ども食堂ネットワークの仲間のうち２団体が、今、子どもの居場所ネットワークというものを立ち上げているので、もし良かったらアクセスしていただけたらと思います。人手については、お年をめしたボランティアばかりで、楽しみで来てくださっています。みんな元気で来てはくれていますが、若い世代が繰り返し継承していかれるようにということで学校を探していたら、サポート校と縁ができました。卒業生が夏休みには来てくれますが、在学生が常に回ってきてくれるので、循環することができています。次世代継承ということでは、利用しているお母さんたちとも仲良くしており、「君たちが次の世代だよ」と言っています。面白がって、楽しんでもらえる、おしゃれな居場所ということでやっており、ボランティアをしてくれるママもたまにはいます。そういう方々に「私たちは、あの場に行くことが楽しかったから、またやりたい」と言ってもらえるような、おしゃれな工夫をしています。私たちは、子育て中の方が何にどう困っているのか、悩んでいるのかは分からないので、経済的な貧困にこだわらず、時間の貧困や繋がりの貧困、ご家族に恵まれていない方等様々なので、「みんないらっしゃい」ということでやっています。

○やる側の人間が「楽しい」と感じないと絶対に続かないと思います。私たちの活動も 40 年続いていますが、やる側が楽しいから続いていると思います。これが義務的なものになってしまうと、絶対に続かないと思います。

○何を心がけて活動しているかというと、私は、やっぱり「やっている側が楽しい」「楽しくなければ、やらない」、そこは貫いています。

5　連携状況・今後の意向

○地元、湘南台の自治会での活動ですが、朝の時間帯に子どもたちを預かる事業をやっています。「小１の壁をぶっ壊せ」ということで、子どもよりも保護者の方が早く家を出なければいけない場合、低学年の子を預かる事業になります。その後、学校に送ります。今のところ、２人来ています。その時間帯だと、ボランティアスタッフを集めることが大変な反面、70 代や 80 代の方がボランティアで来てくれますが、皆、子どもと関わることで、若返っています。すごく生き生きされています。そういう面では、やってみて良かったと思います。ただ、この事業を自治会がやるべきなのかと思うところはあります。今のところ、同一自治会内のお子さんを対象としていますが、今後、近隣の自治会のお子さんも受け入れようかという話しはしています。自分の自治会内よりも、近隣の自治会からの引き合いの方が多い状況です。今後、近隣の自治会との連携により、より住みよい藤沢市にしていかれると良いと思います。

○子ども食堂の活動では、学校、幼稚園、保育園と連携して、そこで通信を張り出してくれることで、新たに子ども食堂に来てくれたり、ボランティアで来てくださる等しています。また、仲間の団体や市社協との連携で、市社協の日常生活自立訓練を受けてる方がボランティアに来てくださって、社会に出る一歩を踏み出していただくこともしています。そのほか、地域の自治会の方や民生委員さんが繋いでくださったり、あるいはおはようごボランティアをされているおじいさまが、子どもが飛び出さないように門番をしてくださりしています。市民センターとも連携しています。

○村岡地区で行ったタウンミーティングでの繋がりで、近隣の団体さんと連携を取ることができました。ありがたい機会であり、また、ああいう機会があると良いと思います。その他の連携としては、同じように学校に行かない子どもたちが拠り所となっている団体同士が集まって「藤沢こどもの多様な学び応援団(こどまな)」というのを２年前に立ち上げています。そこでの繋がりから、先月８月に市役所で「こどまなメッセ 2025」を開催しました。そのほか、村岡地区ではありませんが、稲荷にラポール藤沢というところがあり、そこで色々な団体さんが集まり、私たちも参加させていただき、そこでも繋がりができています。私たちの学び場の子どもたちを連れていき、子ども同士も交流が生まれたりしています。

○先日、フードバンクをする際に、社協さんに連絡させていただいて、本当に困っている方にお声掛けしてもらえないかとかいうお願いをしました。また、保育園同士のつながりはあるので、今後、そういうつながりの中で、居場所づくりをテーマにやっていくことは、やれなくはないのかなと思います。

○繋がりを作るということでのうちのスタイルは、お祭りをやることです。将来的に居場所をそこで作れないかなと思っているところと連携してお祭りをします。最初は鵠沼にある幼稚園でやり、毎年それをやるようになっています。もう５年ぐらい、毎年紅葉の季節にやっています。幼稚園だけれども、大人の居場所、大人の文化祭と銘打って、町内会の人たちも出し物をしたり、フードの出店やキッチンカーを呼んだり、子どもたちが発表するイベントをしています。善行では、介護施設と一緒に入居者の方々も楽しめて、そこに駄菓子屋を開いて、子どもたちも招いて、善行の市民センターを拠点に活動している色々なサークル活動をしている団体に声をかけて、結構な演者の皆さんが演奏したり、マジックショーをしたり、フラダンスをしたり等、そういうお祭りを作り、今年で３年目になります。幼稚園で始めたところは、お祭りをきっかけに、居場所を立ち上げることになりました。お祭りに来た幼稚園の卒園生や卒園生の保護者が担い手となるような仕掛けをしています。お祭りを地域でやるということで、いろんな関わりがそこにできるのと、子どもが楽しめる場を一度でも作ると、子どもたちの間でも、「お祭りをした場所だよね」ということが広がるので、お祭りをきっかけに、子どもの居場所づくりをスタートしやすくなります。そういうスタイルを最近やっています。

○うちは、市民の家を借りており、そこに幼児から小学生ぐらいまでの子どもたちが遊びにくる児童館があるので、そこで「今度、子ども食堂をやります」という案内を出して、ビラを配っていただきます。また、開催当日には、児童館のスタッフの方に、子ども食堂が開催されることを声掛けしていただきます。そういう連携から参加者が増えています。また、湘南工科大学が近くにありますので、湘南工科大学のボランティア部と連携しています。部員が 40 人ぐらいいらっしゃって、毎回、子どもたちの遊び相手として来ていただいています。大学生のボランティアの方に来ていただき、子どもたちは非常に楽しく過ごしています。

6　今後の展望等

○私の取り組みを軸にして考えると、子どもをいかに地域全体で支えるかというところを大事にしたいと思います。どこがではなく、地域全体で支えるという視点です。そのためには、地域づくりがとにかく大事かなと思います。具体的に「地域」というと、子どもが生活する範囲、つまり、小学校や中学校の圏域だと思います。今 SNS 等、色々な情報発信の仕方があり、色々な取り組みが世には出回っていますが、圏域にいかに届くかが大事だと思います。圏域に届けることは、非常に難しいというのが私の体感です。圏域では、SNS を使えない方はたくさんいらっしゃいます。それをどうクリアして

いくのか。数ヶ月前に、村岡地区でタウンミーティングをやりましたが、地域の一主婦が自分の家の一部を開放してちょっとした折り紙づくりをしたり、そうしたことを子どもたちと一緒にやる場があります。30 団体が集まりましたが、その大半を私は知らなかったです。そういう方々の情報を、いかに圏域の中で共有するのかは、非常に大きな課題、テーマだと思います。タウンミーティングはとても盛り上がりましたが、残念ながらそのあとが続かないです。名刺交換もしましたが、次の集まりが生まれてこないです。そこを、例えば、行政の人に期待したら良いのか、そう言っているのだから「お前がやれよ」ということなのか、色々と悩んではいますが、なかなかそこまでパワーを十分につぎ込むことはできません。

○私たちはネットワークで年２回交流会をしていますが、愚痴を言い合いながらも、ヒントももらっています。今こういうところに困っているのだけれどもと相談して、ヒントをもらって自分たちの活動に生かしています。加盟している全団体が参加する訳ではありませんが、その時その時で、例えば、食品衛生をしたり、手洗いチェッカーをしたり、あるいはイベントで映画会をしたり、色々な工夫をしてやっています。やっぱり仲間同士のつながりは重要だと思います。

○青少年登録団体として青少年課から、年に 24,000 円の補助をいただいていますが、十分ではないと思います。継続していくためには、ある程度の資金的な援助は大事かなと思います。私たちの活動は、保護者からお金をもらっているので、何とかやっていますが。それも今では、１家庭に対して 16,000 円でやっています。徐々にカツカツになってきています。藤沢市内で活動を頑張っているので、もう少し市から支援をいただけるとありがたいです。

○活動に関わる本人たちが楽しむこともすごく大事だと思いますし、本人の後ろにいる家族の人たちが、その活動を認めていくようになるには、そこにもハードルがあると思います。本人は行きたいと思っていても、家族の反対があるというのは、これまで活動をしている中で結構あります。そういうところで何が必要かなというと、お金の支援だったり、そういうものがあれば、家族の納得も得やすくなるのかなと感じています。

○情報のコントロールをどのようにやっていくのかは大切だと思います。皆さん、それぞれ、多分お金のない中で、自分たちだけで活動内容等を発信していくことは、非常に難しいのかなと思います。例えば、藤沢市さんが取りまとめてくれて、どういうプロモーションしていくのか。色々な試みや団体さんがいると思いますが、それを本当にプロモーションできてないと感じます。行政主導でも構わないので、そこをもっと強化できたら良いのではないかと思います。

○地域の縁側が今 10 年経っていて、今後そこをどうするかという議論があります。地域の縁側が、こういう子どもの居場所という課題に、より適切に適応した、マッチした受け皿になるべく、是非アップデートしてほしいというのはあります。10 年やってきたので、色々な課題を職員の皆さんも感じていると思います。そこを本当にアップデートできるのかということだと思います。地域の縁側を知らないという方がまだいらっしゃるということも課題ですし、子どもの居場所としては、まだ制度的にマッチしていません。せっかくある地域の縁側がアップデートする中で、そういう課題とマッチングするのであれば、それは制度的にあるものを使っていけば良いのではないかというのがあります。もう１つは、うちも夏休みの昼ご飯を提供する事業をやっていて、そこで圧倒的に多くのニーズを掘り起こしました。もうこれ以上は、１NPO では全然担えないので、企業をまわろうと思っています。企業の CSR の一環として協力していただくことが必要だと思います。企業からの単発の寄付はありますが、持続的に企業が社会貢献活動として、子ども居場所の基盤づくりに乗り出してもらえるように、藤沢市が音頭を取ってやっていくことが必要だと思います。今でも、子ども関係の基金は色々とあり

ますが、もう少し子どもの居場所ということに焦点を当てて、さらに営業活動をプロモーションするような形を取れると、全体としてはありがたいと思います。

○藤沢市への要望になりますが、少し藤沢市で整理して、色々な団体、NPO、企業、任意団体がありますが、「藤沢市にはこういう団体がこれだけある」というのを、広報藤沢でやるという手はありますが、あれを見ているターゲットがどれぐらいいるかというと、非常に首をひねるところがありますので、藤沢市で SNS、子育て支援の SNS を作って、そこでどんどん紹介していくっていうことができないかなと思います。

○学校で居場所マップみたいなものを配ってもらえるとなお良いです。ネットでは、自分からアクセスしないと情報を得ることができません。

○私、遠藤市民センターにおりますので、行政の立場として発言させていただきます。地域の縁側でも、遠藤地区ではもんのきの家が非常にうまくいっていますし、明治地区ではかるがもという基幹型のところが子どもの居場所や障がいのある方の居場所になっています。地域の縁側については検証も必要だと思いますし、お互いに見に行く等の交流があっても良いのかなと思います。

○地域の縁側として、地域の祭り事をもう９年続けてきています。また、子ども食堂も続けてきています。また、福祉施設を利用している高齢者が駄菓子屋の店主となって、子どもたちに駄菓子を売っているという取組もあります。ただそれは、全て地域の方のためという部分を、あらためて強く感じました。我々の取り組みは、地域、圏域の自治会や町内会、夢クラブ、子ども会等、日本の戦後脈々と続いてきている地縁組織の方々にかかっていますし、やっぱり地域共生の主役はそこだと思います。その主役をしっかりと述べられた上で、我々の取り組みがあるということを強く意識しました。

○自治会、老人会、子供会、学校の PTA にしても、現役の人たちが参加できる状況にないということの問題を抜きには、あらゆることを考えられないと思います。例えば、不登校気味であっても、生活もあるので仕事をしなければいけません。でも、学校からは、体調が悪いからということで、迎えに行かなければいけないと、仕事を早退することになります。私の場合には、ボランティアコーディネーターというのを長年やっていたことから、周りに一緒にやっている人がいて、そういう人が受け持ってくれたこともあり、何とか対応でき部分はありました。今の話を聞いていても、そういう存在というか、現役世代が参加できる状況にあるのかどうか、それを持続可能な形で続けていかなければならない、いきたいと思っていても、そこをどう繋いでいくのかという、例えば、成功例や失敗例もすごく大事だと思います。そこに触れられずに、計画に集約されてもどうなのかと思います。私は、ある時から、もう割り切ってしまっていて、本当に必要だったら、またその時にできると思っています。子ども会もそうですが、やってくれる人がいなければ、一層のこと、一度なくなり、皆困って、その後に新たに本当に困っているという人たちが、また立ち上げて、自分たちでやらなければという力をつけていかないといけないと思います。善意に頼ったり、行政に頼ったりという状況は、絶対に持続可能ではないと思います。さりとて、自分がやっている側に立つと、やりがい詐欺というか、いつまでも行政が、子ども食堂に対して全部丸投げしている的な考え方もやっぱりありますし、皆さんそれぞれの活動がどうしてもそういう風に思ってしまうこともあります。「それはなぜなのか？」ということも、行政の立場に立った時と運営側に立った時の両方が分かり合わないといけないと思います。

以上

８　９月 26 日（金）湘南台、長後、御所見地区

日時	2025 年９月 26 日（金）10 時 30 分～12 時 00 分
場所	湘南台市民センター第４談話室
地区	湘南台、長後、御所見地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

１　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
YUME School 藤沢湘南台校	不登校児童 生徒対策事業	YUME School 藤沢湘南台校	原様	
朝の児童見守り事業	朝の居場所	四ツ辻団地自治会	堀澄子様	
長後みんなのおうち食堂	子ども食堂	長後みんなのおうち食堂	鈴木彩子様 櫻井様	代表 副代表
長後寺子屋ぽかぽか	学習支援	長後寺子屋ぽかぽか	荻野直美様	代表
みんなの居場所 れいんぼーかふぇ	多世代交流の 居場所	みんなの居場所 れいんぼーかふぇ	鈴木理恵様	代表

2　団体概要・活動内容

1　YUME School 藤沢湘南台校（湘南台）

○この建物に面した大通りの向かい側の正面にある AU ショップの上階にあるところに校舎を構えており、フリースクールを運営しています。
○基本的に対象者は小学校から高校生までですが、あわせて通信制の松陰高等学校もやっています。
○小中学校の義務教育課程のその後の部分や進路にもつなげるような形で、子どもたちのサポートをさせていただいています。

2　朝の児童見守り事業（四ツ辻団地自治会）（湘南台）

○湘南台にある自治会で、朝の児童見守り事業を行っています。
○小一の壁という言葉を皆さんお聞きになったことがあるかもしれませんが、学校が始まるまでの間、１時間ほどお子さんを預かって学校に登校させることを行っています。

3　長後みんなのおうち食堂（長後）

○こぶし荘で毎月１回、誰でも来られるみんなの居場所ということで、食事と遊びの広場を開催しています。
○子どもの長期休み（夏休み、春休み）に合わせて、子ども限定で、お昼ご飯の提供と学習会を開催しています。
○今年度に関しては、子育て支援、子どもだけでなく、まずはお母さん、保護者の子育ての力になればということで、親子支援イベントをやりました。
○ケーキのデコレーションを親子でやってみたり、味噌づくりをやったり等、そうした企画を年間通じて何回かさせていただいています。

5　長後寺子屋ぽかぽか（長後）

○長後駅近くにある就労継続支援Ｂ型事業所えにしんぐというところで、週１回木曜日、５時から７時まで、無料塾をやっています。
○無料塾といっても、学習だけではなく、様々な経験をさせたいので、調理をしたり、藍染め体験教室をしたり、お母さんの日の食事を作ったり、１ヶ月１回くらいは何かのイベントをやっています。
○子どもは 10 名で、スタッフが７名います。
○心を育てていきたいなと思います。

6　みんなの居場所れいんぼーかふぇ（御所見、湘南台、長後、片瀬）

○団体名は、みんなの居場所れいんぼーかふぇとなります。
○藤沢市内で４箇所の居場所をやっており、用田と江ノ島では子育て広場、宮原では子ども食堂、湘南台では 10 代・20 代の若者の居場所をやっています。
○普段は、社会福祉士で、不登校やひきこもりの相談員をしており、過去には PTA をやっていて、お母さんたちへの子育て相談をするハードルの高さ、相談窓口に行くことの難しさをとても気になっていたので、普段のおしゃべりの中でそういうことを聞けたらなという風に思っていて、そういう出会える場を作っているという形です。

○それをやっているうちに、居場所をやりたい人から「どういう風にやるのですか？」ときかれることが増えたので、2023 年からは藤沢市さんと協働で、「子どもの居場所スタートアップサポート講座」をやっていて、その講座の受講者さんから 12 箇所ぐらい居場所が増えています。
○また、横の繋がりが必要だと思ったので、子どもの居場所ネットワークというのも今年の春に立ち上げて、皆で支え合って学び合って、ブラッシュアップしながら、子どもたちに安心な場を増やせていけたらなと思っています。

６　非営利団体ボードゲームでツナグ手（長後地区）

○ボードゲームを通して、家庭内、子どもと大人、子ども同士等、コミュニケーションを取りやすくしていくこと目的に活動しています。
○主に子ども食堂を利用する方々と一緒に親子で遊べるフリースペースや遊び場を設けたり、駄菓子屋さんの前でゲーム体験会を開催したり等を行っています。

３　子どもの居場所としての役割

○私たちは、フリースクールという場所になるので、学校に行くことが難しい子たちだったり、学校には通えていますが、心理検査とかの結果でどうしても学習面の課題が大きい子でしたり、そうしたご家庭が学校復帰したケースもあるんですけれども、いつそこが崩れてしまうかわからないので、そのあたりの継続的なサポートという部分を徹底しています。日頃の関わり方としては、私たちも一応職員という立場ではあるのですが、先生として関わるというよりは、１番最初の友達になるような感覚で関わりながら、皆がみんな集団での活動が得意という訳ではないので、個別に配慮できる部分はしながら対応させていただいています。
○保育園に預けていた共働きのご両親が、お子さんが１年生に上がる時に、保育園は７時から預かってくれたので７時に預けていったのが、学校は８時 15 分ぐらいが開門、昇降口が開くので、そこに１時間の差ができてしまい、勤めを辞めようか、時間を遅くしてもらい勤めを続けようかと、かなり大きな悩みが生じます。そこで、小一の壁という名前がついています。同じ自治会から、「来年、娘が小学校に上がるのだけれど」という話がポンと出た時に、そういう子を預かってどうにかできないかということから「朝の児童見守り事業」をスタートさせました。幸い自治会館が自治会内にありますので、その場所が確保できている関係で、何とかできるのではないかということで自治会の中で有志が集まり、着々と準備を進めながら、社協の方や行政の方に相談させていただきながら、「ケガしたときはどうするか」「保険をどうするか」等、折衝した後に、2024 年４月 1 日からスタートしました。まず、小学１年生の女の子を預かることになりました。何名かメンバーを集めて、シフトを毎月作り、朝７時から８時ちょっと過ぎまで自治会館でみて、１番最初は１年生だったので学校の校門まで送りましたが、今は自治会館から出て危ないところの交差点を渡ったところまで付いていき「行ってらっしゃい」としています。子どもの朝の学童保育みたいな形になると思いますが、私たちは努力して頑張っていますけれど、最終的には行政の方でやっていただければと思います。東京都は随分進んでいて、学校の教室を開けてそこでボランティアにより子どもを預かることを進めていますので、藤沢市や神奈川県でも、そういう形が整って、いずれは行政主導で、きちっと預かれるようなシステムができることを私たちは望んでいます。今までは事故もなく、子どもも嫌がらずに来てくれていています。また、今年から３年生の男の子も預かっていて、今は２名を預かっていて、必ず私たちも２名で受け入

れるようにしています。同じ自治会館で、今年４月からサロンしげたという地域の縁側もスタートしています。火曜日の 10～14 時なので、お子さんの放課後の時間帯ではないのですが、今後は、例えば、不登校やひきこもりのお子さん、子育てしていらっしゃる若いママさんや小さいお子さん等、誰でも気軽に来ていただければと思っています。色々なニーズに応じて事業を拡大していければと思います。

○食事を通して、子どもから高齢の方まで、色々な世代が一か所に集まり居場所として提供しているという点では、とても軌道にのっていて、人数も来ていて素晴らしいと思います。今後の私の希望としては、食事をするだけでなく、雰囲気を味わうだけでなく、何かこう緒に、会話の場等の余裕ができたら良いと思います。

○どこも同じだと思いますが、子ども食堂では、100 人くらいの食事提供をしていますが、それが結構大変で、食事を作っているスタッフさんが、子どもとゆっくり会話する時間が取りづらいです。普段の月１回の開催では難しいので、コミュニケーションを取っていくようにするためには、どういう風にしたら良いかなと思います。食事だけではなく、居場所として満足して帰ってもらいたいという想いがあるので、長山さんにすごく助けていただいていますが、食事が終わった後に、隣の部屋に移動してもらい、遊んで帰ってもらうようにしています。長山さんがそこを見守りしてくださっているということで安心でき、安全な子どもの居場所を提供できていることに繋がっていると思います。そうすることで、一緒に来ている保護者の方が一息つける、ちょっとした息抜きスペースになっています。

○無料学習支援塾と謳っており、来る子たちはとても勉強を一生懸命するのですが、大人と子どもたちと講師で来てくださる方と繋がっていきたいという想いが強いと思います。心掛けていることは、１人の子どもに対していつも同じ人がつくのではなく、皆がその子のことをわかるように、毎回、スタッフの担当をかえています。皆でどの子に対しても、色々な角度から、想いを伝えていかれるようにローテーションしています。子どもも、色々な大人と関わることで、「色々な人がいるな」ということを肌で感じてくれて、教え方もワンパターンではなく、その子のことをよく観察しながら、それではこうしてみようかなという対応をスタッフの方がしています。また、親とのコミュニケーションも大事です。お子さんの様子をスタッフさんから LINE で送ってもらい、私がその様子をお母さん方にお伝えしています。その際には、否定的なことは一切言いません。そういうことの繰り返しにより、お母さん方も、子どもを見る目がちょっとずつ変わってきたかなと思っています。お母さん方も孤立していると思いますので、そこを繋いでいく、想いを受け止めてあげることが大事だと思います。私たちのところに来る子どもたちの中には、中学校の先生からご紹介された方がいますが、その子がどんな状況なのかを全然知らずにお受けします。慣れてくるうちに、その子の家庭事情がわかってきたり、その子の抱えているものがわかったりします。最初から問題があるというのではなく、関わるうちに対応を考える必要性が出てきた時に、皆でどうしようかと考えます。大人は応援しているよというエールを必ず送ることで、子どもが安心できるようになっているので、スタッフさんがすごいなと思います。それと、絶対に勉強だけにはしていなくて、例えば、小学生が終わったらおやつを食べるとか、ちょっとしたリラックスタイムがあります。小学生はゲームをしたり、かるたをしたり、工作をしたり、自分が好きなものを持ってきて遊ぶ時間が１時間あります。中学生も半年前まではそうしていましたが、今は勉強したいということで２時間続けてやっています。最初は何をやっているのかわからなかったけれど、段々わかってくるようになると勉強を楽しく感じるようになっています。２ヶ月に１回は必ず何かイベントを入れています。勉強ができなくても、子どもが段々成長していくので、イ

ベントは大事だと思います。色々な講師の方に来ていただき、子どもが色々な大人がいるなということで、何かワクワクすることを大事にしています。

○子ども食堂さんと一緒にやらせてもらうことが多いのですが、お母さん連れできているところとお父さん連れできているところでは、ちょっと接し方は変えています。お母さん連れのところは基本的には、あまり深くいかないです。お母さんに対しては、相談員さんに任せて、子どもの面倒を見ながら一緒に遊びます。お父さんに関しては、一緒に遊ぶようにしています。僕はゲームを使ってコミュニケーションの取り方を一緒に実践できるので、一緒に遊んでみながら、お家で良かったら使ってみたらどうですかという話をします。また、ボードゲーム教室というのを半年前から月２回やっています。狙いは、当初、ボードゲームを使い非認知能力を高めたり、平日にやっているものもあるので、不登校の子が来られるような場所になれば良いかなと思っていました。半年やってみて、少し打ち出し方を変えていく必要があると思っています。子ども食堂さんとやっているように、体験の場を作っていく形でやっていこうと思います。体験や試しというのを前に出しながら、一緒に学びの要素もあるような形できると良いかなと思います。

○長山さんは、2020 年に私が長後で始めた時に「長後で何か居場所のことをやっている人がいる」ということで訪問してくださり、「ワンオペの親子が遊び来れる場所を作りたい」というような話をされていました。ただ、私は「いや、ちょっと待って。お母さんが喜ぶのは、お母さんが１人の時間を持てることではないか」ということで、お母さんが男の人が運営している居場所に行くことはなかなかハードルが高いかなと思い、むしろ「お父さんと子どもが遊びに来れる場所をやったらどうか」と提案してみました。また、「一緒にやれば、家族で来てお母さんは私と喋ることもできる」と言っていたのが、今のスマイルカフェに繋がっていると思います。とにかく私はお母さんと話がしたいので、他の子育て広場も全部そうですが、保育スタッフに子どもと遊んでもらうために入ってもらい、役割分担をしています。子ども食堂は、2021 年 12 月から始めたので、もうすぐ丸４年経つところですが、当初は思春期以降に人間関係が複雑になるので、その辺の子と出会いたいと思っていましたが、結構、小さい子たちばかり、未就学児と１～２年生ぐらいでした。居場所を始めた人が「思ったような人が来ない」というような話しがあるのですが、４年経ってみたら、その子たちが高学年や中学生になっていて、友達同士で来るとか、そこで出会った子が今年春入学したら同じクラスになって「あれ、スマイルカフェにいた子だよね」という感じで急にマブダチになるとか。保護者同士も関係を作りやすくなっている、出会いの場というのを果たせているなと最近感じています。なので、最初から思ったような場所というよりは、一緒に皆と育てていけると、理想の形ややりたいことができるようになると感じています。スマイルカフェについては、ルールは１つだけあって、「自分も、皆も、心地良い場所を一緒に作る」というものです。具体的に「あれをしろ」とか「これをするな」みたいなことは言っていません。例えば、子供たちは、走り回りたいわけです。広ければ走る。空いてれば良いけど、混んできたら違うよねという風にしています。「走るのなしです」というルールにしてしまうと、考えなしに全部ダメみたいになってしまいます。そうではなくて、自分たちで考えて、自分たちでやることを決めて、やめる時も決めて、自己選択という体験をうんとさせてあげたいなと思っています。子ども食堂は、最初は給食式でやっていましたが残食が多かったので、今はビュッフェ形式にしています。お皿の大きさも大か小かを自分で決めて、自分で食べられる量だけ取る。おかわりは自由です。なので、今は残食がほぼありません。やっぱり自分で決めることは大事だなと思います。野菜の寄付とかもたくさんいただけているので、「意外とここでは野菜食べます」という話もあります。また、お母さんたちが、「今日すごいこれを食べたので」と言って、調理の人にレシピを聞く姿も見られます。

調理スタッフは、ママさんたちのグループが作ってくれていますが、最近、老人会の夢クラブの方が入ってくれて、すごくイキイキとされています。地域の方にとっても活躍の場となっています。貢献するということは、自己肯定感を上げるということでは、とても大切な活動だと思います。また、お仲間の老人会の方が食べに来てくれることで、自動的に多世代交流の場にもなっています。ある日中学生が 15 人ぐらい来て何事かなと思ったら、BeReal という今いる場所の自撮り写真を２分以内に送らなければいけないアプリがあるのですが、誰かが今子ども食堂にいるという写真を送ったみたいで「中学生いますか？」と、それを見てきた中学生がいっぱい集まってきました。一見、「そういうのやめなさい」と言いがちなアプリですが、集客ではないですが、初めて来るきっかけになることもあるので、何でも否定するというよりも、一旦その文化みたいなものを面白がることも大切だと思います。青少協のメンバーでもあるので、月１の地域の会議で校長先生とかにもフィードバックしています。そういう風に学校とも連携しながら情報交換をしています。校長先生が食べに来てくれることもあるので、地域みんなで、大人みんなで、地域の子どもたちを育てるところが、雰囲気として出来上がってきていると思います。

４　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○とにかく場所が問題です。「行きたいよ」と言ってくれる人はいっぱいいるのですが、あの場所で 10 人以上になると無理です。家賃をお支払いするのに私たちの力だけでは少し難しいです。社会福祉協議会さんからも補助金をいただいており、大変助かっているのですが、色々なイベントをしたり、日頃の活動でも、色々と資金は必要になるので、これ以上広い場所で活動するために、今のところから移転する余裕はないのが現状です。活動当初は、不登校の方や生活困窮されている方に限定してみてはどうかと思っていましたが、最初からそういう人たちが集まるというよりも、お話していくうちに何となく「この家庭は少し困っていらっしゃるのかな」というのが見えてくるので、色々な人が来ても良いのだなというのは、この頃、思うところです。なので、色々な人を受け付けるには、場所とお金の問題は切実だと思います。

○２つほど気になってることがあります。１つは、子ども食堂としての運営面ですが、準公共施設を借りてやっているので、活動の認知度が地域に広まるにつれて、色々と寄付やフードバンク、パルシステムさん等、福祉団体に支援してくださる団体さんからいただくものは大変ありがたいのですが、そうしたものをストックする場所というのに本当に困っています。特に、冷凍品や冷蔵品等、取りに来てくださいと言われて、取りに行きたいのは山々ですが、結局、それを保存する場所がありません。長後子ども食堂さんだと、冷蔵・冷凍スペースをたくさん持ってくださっているので、緊急避難的に少しそちらで預かってもらったりすることもあります。１活動団体としては、そうした寄付食材等をどうストックするのかという部分は、とても大きな課題です。せっかくいただけるのに、置く場所がないです。共同で使えるスペースのようなものがあるとありがたいです。こぶし荘で子ども食堂をやり始めてちょうど２年になりますが、メンバーは段々入れ替わってきたり、中学校に入学するタイミングで来なくなったり、子ども同士で来るように変わったり等、人の入れ替わりはありますが、結構、固定化されてきています。知らないし、１回も来たことがない層というのは、たくさんあります。そういう方々にも、もっと知ってもらいたいし、来てもらうための工夫は必要だと思っています。もっと敷居を下げていきたいです。そこに関しては、学校との連携や行政との連携が必要だと思います。例えば、学校の総合学習の一環として、子ども食堂とはどんなところなんだろう？という形で取り上

げてもらうとか。地域の小中学校等と連携していくことがすごく大切なことだと思います。こぶし荘との共催なので、学校には告知のチラシを配布させていただきました。市の広報や回覧板を使うことができないので、地域の大人の方に周知することが難しいです。

○困り事は、ずばりお金だと思います。今は、結局、助成金を取れているので運営はできていますが、助成金は申請や報告等に結構時間を取られます。事務専用の人がいる訳ではないので。まだ、子ども食堂は、比較的、助成金はありますが、神奈川県では一昨年は 12 万円で、昨年は６万円で、今年は０という減り方になっており、今後、そこをどうしていこうかなというのが悩みの種です。解決法としては、おそらく月に 10 万円ずつ寄付しますというような会社さんと繋がるというのが、多分、持続可能な方法だと思いますが、そういうところにアプローチする時間をどうやって捻出するのかということで、堂々巡りになっています。その他の活動については、私がいなくても回る形にはなってきているので、緩やかに継続していけるのかなと思います。

○ちなみに、回覧版は、市民センターの判断だと思います。昔、PTA でベルマークの箱がここにありますということを地域でお知らせしたいという際に、地区の両方の小学校の共同名義で出すなら出せますよ、という回答をいただいて、何千枚刷ってくださいとかいうのはありました。学校も今は校長先生の判断です。備蓄ストックの話しですが、藤沢市の子ども食堂ネットワークに入っているのですが、別団体から冷凍庫ストッカーの無料レンタルのお話が去年あり、それに手を挙げたので、サイズを選べてレンタルしたものがあるので、そこである程度のストックができます。また、社協さんが、藤沢市卸売市場の中に部屋を借りてくださり、フードバンクさんと共同で大きい冷凍庫があります。子ども食堂が夕方からなので、その日の昼間に市場へ取りに行きます。フードバンクからたくさんきたもの、冷凍の揚げるだけのもの等、子ども食堂ネットワークに加入していると、そういう情報も来ると思うので、ご活用いただけると良いと思います。

5　連携状況・今後の意向

○市のイベントに参加させていただく機会が増えましたが、こういう場に来た時に、周りの皆さんが結構連携されている様子を見ると、うちももう少しその辺を強めていきたいと感じます。湘南台東口商店街の方々とはすごく連携をさせていただいて、先日もチャリティ納涼祭のお手伝いをさせていただいたり、大相撲の藤沢場所の前日のお手伝いもさせていただいています。高校生たちが、アルバイト始めるためのきっかけだったり、そうしたボランティア活動を通して社会性を育んでいきたいというところがすごくあるので、是非そういった形で何らかのお手伝いに行かせていただける場だったり、そういった面で是非連携をさせていただきたいと思います。どうしても月謝制のところがありますので、例えば、東京都では助成金がフリースクールの利用のところで出ていたり、鎌倉市や相模原市、海老名市等も進んできているところなので、そのあたりの助成制度が藤沢市でも進むとすごく嬉しいと思います。

○是非、子ども食堂さんのところのお力になれるのであれば、その辺りの連携ができると良いです。うちも校舎の中で調理実習をする機会がすごく多くて、他のボランティアに参加させていただいた時とかも、結構、積極的に現場の方に聞きながら動いたりできた子たちもいました。高校生に出てもらう形になると思いますが、楽しく皆でもオッケーですという会であれば、小中学生も参加できると思います。うちのところは、掲示のルールも厳しくないので、お知らせもしやすいと思うので、是非、ご

一緒にさせていただけたらなと思います。また、皆で遊べる場でも、是非、連携させていただけたらと感じています。

○うちの子ども食堂では、長後フロンティアプロジェクトからボランティアとしていつも１～２人に来てくださっています。また、藤沢総合高校のボランティア部の生徒さんが何人か来ていただけます。調理スタッフは、高齢のシルバースタッフもいますが、高校生からシルバー世代までが入り混じってお手伝いに来てくださっています。年齢層は、参加者、お手伝いの方ともに、本当に幅が広く、もし来ていただけるのであれば、大歓迎です。これから連絡を取り合って、遊びに来ていただけるとありがたいです。

○力仕事をやっていただけることは助かりますし、高校生の発想力というのが、私たちの世代とは全く違った発想をされたりするので、とても良い影響があると思います。学生さんにとっても、社会と繋がる、何か役に立っているという実感を持てると思います。

○社協さんの方から「もし手が足りなかったら、こういうルートで頼めるシステムがありますよ」と教えていただいてますので、どうしてもギブアップした時には、そちらの方にヘルプをお願いしようと思います。そこは、すごい安心感があります。今のところは、自分たちで賄っていますが、段々私たちも高齢化してくると、人手が足りなくなったり、預かる小学生が増えた時に、今２人の受け入れで２人のスタッフで見ていますが、それが増えることは本当に嬉しいことですが、ちょっと手が足りなくなる場合もあるかもしれません。実は、今日、隣の自治会の方から１人「スタッフになります」と言って見学に来てくださった方がいて、早速、申込書を書いてくださり、スタッフが１人増えました。50 代や 60 代の方がスタッフとしていらしてくださると非常に心強いです。どういう活動をするにしても、どこも高齢者が多いのが実情だと思いますので、若い高校生等が１番求めている部分かなと思います。若い世代につなげていくことが、今の私たちの世代の役割でもあるかなと思います。

○れいんぼーかふぇ江の島というのは、湘南人不動産という不動産屋さんが「火曜日、水曜日が定休日で空いている、海岸線沿の良い場所なので子育て支援をしている団体が使いませんか？」という話が市民活動推進機構に行って、そこから「使わない？」という話をいただいて始まりました。なので、場所代がかからず、すごく良い部屋をお借りして、おもちゃ等、欲しいものも用意していただけます。また、スタッフの人件費も出していただいています。本当に理想的な形で今運営をしています。子育て世代のお母さんたちで、自分たちで居場所をやりたい方はいっぱいいるのですが、完全ボランティアはちょっと難しいです。ちょっとでも有償でボランティアに出せるのは、すごくありがたいです。そういう形を広げるためには、やっぱり企業さんと繋がりたいなというのがあります。あとは学校との連携です。チラシ１つ配布するのも、結構、大変です。市内全部に配りたい場合には、教育委員会かもしくは校長会とかに行かないといけないですし、エリア内の配布だけなら、学校ごとに校長先生が「良いよ」と言ってくれたら配布できますが、先生が変わるとダメになったり、逆に配れるようになったりします。人で対応が変わってしまうところが、なかなか難しいところだなと思います。御所見エリアは自分も住んでいるので、そういう意味では交渉しやすいのですが、江ノ島とかはそういう繋がりがないので、いきなり地域の団体が連絡しても「誰？」というところからになってしまうのが、なかなか難しいかなと思います。なので、学校と良い関係を築きたいというのは大きいです。また、子どもの様子や、「何年何組が学級崩壊しているらしいですね」というような話も、地元の学校だとできたりします。保護者の方やお子さんたちから「学校は、ちょっと不安なんだ」というのを聞いたら、それを学校にお伝えして、学校で、「あのクラスね。でも、来週から教育委員会の人が入ってくれる」というような話を聞けると、それをまたご家庭にフィードバックできます。そういう懸け橋的なこと

をやることが多いので、そういう懸け橋的な存在が、各エリアにいると良いのかなというのは、すごい感じます。藤沢市では、13 地区くらいのエリアが、１番連携しやすいと思います。CSW さんも各地区にいらっしゃいますし。居場所づくりをしていく上で、CSW さんとの連携というのも、すごく大事だと感じています。気になるご家庭があった時に、それを解決するのが私たちの役目ではないと思います。それを拾って「こういうご家庭があります」と CSW さん等と共有することで、専門的に関わっていただくという流れがすごく大事だなと思っています。むしろ、こちらで抱え過ぎないということは気をつけているところです。一般市民として、居場所づくりの活動をするまで、CSW さんの存在を知らなかったので、そういう人はまだまだ多いと思います。なので、子どもの居場所スタートアップサポート講座の中でも「やりたいエリアの CSW さんとは必ず繋がってください」とお話しています。また、子ども食堂のネットワークや不登校支援のネットワークはあるので、それぞれの団体が、関係するネットワークに所属し、色々な情報をもらえる立場になることも大切だと思います。不登校支援に対して、藤沢市から助成金を出してもらえるように働きかけたりする等、１団体ではできないけれども、ネットワークだからこそできるという強みがあると思います。子ども食堂と不登校支援のネットワークはありますが、その他の子どもの居場所に関するネットワークがないので、子どもの居場所に関するネットワークを立ち上げました。

○子どもの居場所に関するネットワークについては、色々な機能を持たせようと今話をしているところです。居場所の運営のノウハウや専門知識を学べる場を作ったり、人のシェア・派遣、物のシェア、市役所の方々とのパイプづくり等。ゆくゆくは CSW さんたちとの座談会等もできたら良いと思います。また、このエリアには、こういう学習支援がもっとあると良いなというような情報もあると良いと思います。

○今のところ、私たちのスタッフの中には、民生委員・児童委員さんが多いので、自分たちが見ている子どもさんの中で、心配な面が出た場合には、各学校に持っていっていただいています。また、毎月、ぽかぽか新聞というものを作っていますので、私たちの考え等を先生に伝えています。先生の方からも「この子は、こういう風に変わってきましたよ」等、お互いの情報交換をしています。ただ、そういう情報を出してくれない学校もあります。学校による温度差があります。情報が出てこない学校があるところが悩むところです。社協さんにはおんぶにだっこで、社協さんの担当の方には、大活躍していただいています。ちょっと心配なお子さんについてのご相談や、「生活面で難しいとお子さんがいた場合どうすれば良いですか」等のご相談をしています。

６今後の展望等

○うちのフリースクールでは、出席の振り替え制度を実施しており、うちに通った分、学校さんに報告書を出して、その分を出席に振り替えていただきますが、藤沢市では、そこがなかなか通らない学校さんが結構多いです。他の地域では、教員に対して、その辺りの連携についての話がしっかりあるようです。学校の先生方にもっとご理解いただける体制があるとすごく嬉しいなと感じています。

○立ち上げる時に、自治会内で回覧板を回して「こういう活動をするので協力してくださる方がいたらお願いします」と働きかけましたが、誰１人手を挙げてくださる方がいませんでした。皆さんは、運営スタッフをどのように確保して、どのようにみんなで理解を深めて一緒に運営していくのかと思いました。

【上記の質問に対する別の参加者からの回答】

→４つやっている居場所それぞれで流れは異なります。子育て広場に関しては、最初、私が親担当で、子ども担当の保育士の友達と２人で立ち上げたのですが、そのうち常連になる親子さんが増えてきたのですが、その常連の親子さんたちが、保育士、元特別支援学校の先生、言語聴覚士のようなすごいプロ集団だったので、私がその場に行かなくても、その人たちがいるので、「どんな子が来てもオッケーです」というような居場所が出来上がりました。新しく募集するよりも、子ども食堂もそうですが、常連の人でここの居場所のことをよく知っている人に「ちょっとスタッフとして、次から入りませんか？」という声掛けをしています。想いを共有するところから始めると、結構大変です。また、良かれと思っていたら「ちょっと違う」という場合もあります。そうではなくて、できれば、いつも来てよく分かっている人の中から、ちょっとずつ役割をお願いして、気づいたらスタッフっぽくなっているような接し方をしています。お土産等を用意していると「手伝いましょうか？」と言ってくれるお母さん等もいるので、そういう場合にはどんどんお願いをして、そうすると、次からはもう勝手にやってくれるようになります。理想的な感じで、今は引き継ぎができています。なので、見学会のようなことをしてみると良いのではないかと思います。「この期間は、自由に見学してください」みたいなのがあっても良いのかなと思いました。

→私自身、子ども食堂をやりたいなという気持ちが結構前からありましたが、子ども食堂を誰か一緒にやりませんかというよりは、自分自身がPTA活動や地域の自治会活動、またご縁があって民生委員もやらせていただきましたが、子ども食堂をやりたいなと思っていたこと以外のところで、色々と人脈を作れたことが、いざ自分がやりますとなった時に、周りの人に来ていただけるようになったと思います。自分がやりたいことだけではなく、その周りで色々な繋がりを持ち合うことが、いざという時にお手伝いしてもらえるきっかけに繋がっていくのかなとすごく感じています。

○私は民生委員をさせていただいていて、近所の方々のお困り事を聞いているうちに、専門家につなげるのは勿論だけれども、あらゆる世代で居場所を求めているのだなと思いました。そんな時に子ども食堂を立ち上げるという話があったので、手伝わせていただいています。行政は、システムを色々と作るけれども、なかなかそれが横に繋がらないので、今日の会のように繋がること、知ることが大事だと思います。皆がそれを知って個々にアクセスできたら、もっと広がっていくのかなと思いました。

○市民センターやその時の校長先生の判断によってやり方が変わるというのは、非常に不安定な要素を占めています。行政に応援していただく、学校に信用していただくにあたり、今後、私たちがどういう点をクリアしていけば、安定的に信頼していただけるのか。行政の方から見ても、学校側から見ても、ある程度こういう基準をクリアしていれば、うまくバックアップしていただけるような団体として認めていただけるのかなと。そのあたり、もう少し明確な基準が欲しいなと思います。子ども食堂の運営においては、例えば、保健所の許可を取って運営しましょうとか、色々と衛生的な部分もあるし、子どもとの向き合い方や対応等、今は割と緩く、その運営者に任せられている部分があると思います。行政と一体となって、そういう部分を後押しして、もっと広げていこうというのであれば、ある程度ルールや基準を満たしてないとちょっとダメだよねというのが、自ずと必要になってくる部分かなと思います。その辺を明確化していくことについても、ご相談させていただかないといけないのかなと思います。

○スタッフは７人から増えていませんが、そのスタッフの中で色々なネットワークがあり、「こういう人がいたよ」「こういうことをやっている人がいるよ」等の中で、ちょっとやっていただきたいということになります。つてのつてを頼って活動しています。私たちの中で「これはちょっとやってみたい

ね」というような興味深いことをやっている人を、知り合いを通して辿っていくやり方をしています。色々なイベントに参加して「これはちょっと使えそうかな」ということをやってみます。そうしたつながりで万華鏡づくりをやったこともあります。「それも良かった」「あれも良かった」というようなネットワークや事例があるとやりやすくなるのかなと思います。また、子どもが相手なので、誰でも良いというわけではないです。例えば、子どもの見方についても、学習面の能力だけを見ている人はお断りします。そこは曲げられません。活動場所が狭いので、そういう場所を公的に提供していただくとか、各地区でこれは無料で貸しますよというような空家があると良いと思います。長後市民センターを貸してもらおうと思っても、そのための手続きが面倒ですし、毎週貸してもらえる訳でもありません。そのあたりを保証していただきたいというのはものすごくあります。

○市役所の方々やCSWさんは正直手一杯だと思っているので、むしろ僕らが取ってあげなきゃいけないと思っています。例えば、ルールに沿った書類を作っていくとか、話をするためのつなぎの場所を設けるとか。そういうことを子どもの居場所に関するネットワークでやっていきたいと思います。仕事を取りながら一緒にやらないと連携していけないと思います。活動団体の悩みもネットワークが間に入って対応することが必要なのではないかと思います。

○本日頂いた話を聞きながら、例えば、子どもの居場所に関するネットワークのホームページを、市民の人が自分の行きたい居場所を探せるものにもしたいし、居場所をやってる人たちが欲しい情報を得られる場所にもしたいと思いました。その中に、ゲームだったらこんな人いますよとか、音楽だったらこの人いますというような、支援者向けのリストの部屋みたいなのがあっても良いのかなというヒントをいただけたと思います。この居場所のネットワーク自体の信頼度が上がれば、学校ごと、校長先生ごとに許可を取らないといけない等も、「ネットワークに加入しているところだったら配りますよ」みたいになると良いなあと思いました。なので、チラシも、片面はネットワークのことだけれども、裏面は自分たちの団体の情報を載せられるようにする等、そういう汎用性もあるかなとか。そういう意味でも、このネットワーク自体の認知度と信頼度を上げていかなかなければと感じました。また、助成金の申請書や色々な書類についても、得意な人もいれば、苦手な人もいると思うので、そういうのを一緒に書いてみる会をやるとか、見本を載せるとか。子どもの居場所スタートアップサポート講座を受けてくれて、実際に居場所を始めた人たちとは、そういうことをやっていますが、そういうことを、既に居場所をされている方々にも広げていき、活用できたらと思います。是非、皆さんと一緒に、このネットワークを育てていけたら嬉しいなと思います。

以上

９　９月30日（火）六会、善行、御所見地区

日時	2025年９月30日（火）15時10分～16時40分
場所	六会市民センター第一談話室
地区	六会、善行、御所見地区
事務局	青少年課、株式会社創建、藤沢市社会福祉協議会（※オブザーバーとして同席）

１　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
AOiスクール善行	不登校児童生徒対策事業	小田急電鉄株式会社	別所尭俊様	AOiスクールプロジェクト統括リーダー
まなぶ場TREK	不登校児童生徒対策事業	まなぶ場TREK	野島志都様 井手志保様	創設者 代表
スペースえとす/うぃず天神	障がい児者一時預かり事業	株式会社ハビリスデザイン	深見勝弘様	代表取締役

2　団体概要・活動内容

1　AOi スクール善行（小田急電鉄株式会社）

〇場所は、善行駅改札を出て左側すぐ、30 秒ぐらいのところに教室があります。

〇教室に通うコースとオンラインを活用したコースが２つ、計３つのコースを開校しています。３つのコースを合わせて 50 人くらいです。

〇大体小学生から、小・中・高までで、１番下が小学校２年生、上は高校２年生まで幅広くいます。メインは、小学校高学年から中学生ぐらいです。

〇教室は藤沢市善行ですが、結構、広範囲から子どもたちが通ってくれています。

2　まなぶ場 TREK

〇子どもが小さい頃から、藤沢市内で二次保育を 10 数年やっていて、その後、少年の森でプレーパークを仲間と一緒に開いて、当初、小学生や中学生のお子さんが来てくれたら良いと思っていましたが、場所柄、親子が多かったです。自分が子育てしている時に助けられた居場所があり、そういう場所を開けたら良いなあと思い、３つ目の場所としてまなぶ場 TREK を仲間と一緒に立ち上げました。立ち上げたとは言っても、会社ではないので、皆で作った会です。

〇場所としては、少年の森や茅ヶ崎の里山公園等、色々な場所で、皆の力を借りながら運営しています。

〇私は、青空自主保育から小学校に入っても、なかなか馴染めない子たちがいた時に、「小学校でも、同じようにやってみようか」と始まってから半年後ぐらいに、まなぶ場 TREK に入りました。きっかけは長男が不登校になったためです。平日の昼間に学校以外でも安心していられる場所や学び場について、かなり広範囲に調べましたが、小学生の息子が通学時間に無理がなく行けるところはなかなかなく、良いなと思っても少人数制で定員がいっぱいで入れませんでした。また、切実だったのが金銭面です。公立に行かずに外に出てとなると、月に３万円以上かかってしまいます。同じような悩みを抱えている親子が集まり、平日昼間に子どもたちが寄れる場所をやっているママさんたちがいるというのをきいて参加してみました。参加してみて、同じ悩みを抱えているお母さんたちと色々話しをできる安心感があり、自分たちの地域での活動だったので、通いやすかったです。当初は会費というのものなく、皆が持ち出しで、ボランティアベースで、見れる人が見るという預け合い感覚で始まりました。同じような悩みを抱えてる人たちに口コミで少しずつ繋がりが広がり、親が全員いるのではなく、当番にしてみようという試みが始まりました。

〇４年目ですが、今はレギュラーメンバーが 11 名、週１～４日の中から選べて、好きな時に来ることができるスポットメンバーが 11 名、合計で 22 名が在籍しています。

〇また、卒業した子たちの中には、少し疲れた時に拠り所として遊べる場にもなっています。

〇特徴は、会費を抑えているところです。週４回、１月預けてマックス２万円にしています。また、お母さんが月１回当番に入ると、時給 500 円を６時間、１日 3,000 円になり、月２回当番をすれば 6,000 円になるので、差し引くと 14,000 円となります。目標値としては、子どもの習い事として、家計が無理なく入れられるぐらいの値段で、子どもの居場所を継続していけると良いと思っています。

３　スペースえとす/うぃず天神（株式会社ハビリスデザイン）

○拠点が、六会の天神町にあります。そこでは、放課後児童クラブ、放課後等デイサービスという身体障がいのあるお子さんたちを預かりする施設と、スペースえとすという、障がいのあるお子さんも来ますし、大人も預かれる一時預かりの事業所があります。

○会社全体としては障がい福祉をメインに、身体障がいのある方の通所施設であったたりとか、子ども系のそうした施設であったり、ヘルパー事業所等、福祉関係の仕事をメインにやっています。

○放課後児童クラブは、天神小学校に通っているお子さんたちで、定員が 60 名なので、日々、40～50 名の子供たちが、わーっと帰ってきて一緒に活動しています。

○放課後等デイサービスは、身体障がいのある方や車椅子の方なので、鎌倉支援学校や横浜市の東俣野特別支援学校に通っているお子さんたちが送迎車に乗って学校の放課後に来て、アート活動をすることをメインにやっています。

○スペースえとすは、多様な色々な障がいのある方が、家族が何か用事があって障がいのある本人を連れていけない、でも預け先がない、どうしようという時に、うちを利用していただく、一時的に預かるという支援をする施設です。そこの施設に関しては、主に週末空いているので、土日が１番忙しい施設としてやっています。

３　子どもの居場所としての役割

○元々教育事業をやっていた会社ではありませんので、基本的に接しているスタッフも、鉄道のプロはいるのですが、教育のプロはいません。なので、細かなスキルは、正直言うと、専門にやられてるところからすると、まだまだだろうなと思います。その上で重要なところというと、私たちの考え方としては、I’m OK! You’re OK!という哲学をすごく大事にしています。自分のことを尊重するところをまず第１に、相手のことを尊重していく、それぞれが大事にしている自分自身を皆で大事にしていこうよということでやっています。その考え方を、スタッフにしっかりと浸透させるところが、まず１つあります。また、専門的な教育を受けたスタッフは基本的にはいませんので、例えば、うちにも発達特性がある子さんはいらっしゃるのですが、発達特性があるからどうこうというよりも、その子の性格や特性として、しっかりと捉えていくことを重視しています。同じ ASD（自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder））であったとしても、１人ひとり個性が違うので、そこを意識するというのではなく、この子はこういう特性がある、こういう特徴があるっていう風に捉えようというところを意識してやっています。あとは、弊社は鉄道会社として認知していただいてるというところもありますし、普段は運転士をしていたり、駅係員をやっていたりとか、現場で働いているスタッフも結構多いので、そういうリアルな声、プロフェッショナルな人たち、もしくは社会に出て活躍している人たち、そういう大人となるべくフラットな関係性で話をする、そういう場づくりを気をつけてやっています。子どもたちが、学校に行かないということよりも、AOi スクールに行くということを、胸を張って選んでくれるように、そういう気持ちでやっています。

○私たちは元々親の会で、自主保育を始めた頃からの理念を引きずっているところがあります。大人は一方的にジャッジしがちなので、それをしない眼差しでみていくとか。私は、上から目線というのしないようにしています。自分の考え方が絶対正しい訳ではないので。いつも本当に悩みながら、考えながら、子どもと接しています。本当に正しいのか、喧嘩を見守るのかとか、色々なやり方や手法が自主保育にはあります。だから、私はこういうやり方をしているけど、他のスタッフが全員するかと

いうと、それは違うのかなと思います。そのやり方を私はやらないと思っても「それは違うよ」とは思いません。自分は、子どもに対して「その子の個性を生かそうね」と言っているので、大人に対しても、それはすごく大事にしたいと思います。その場、その場のライブ感で割とやっています。共有認識として「絶対にこうしなさい」というものは、うちの会にはありません。そのかわり、後でのミーティングはしっかりシェアしながらやっています。

○TREK が大事にしていることが３つあります。「子どもも大人もありのままの自分でいられる安心できる居場所」「自分で考え行動し、感じて表現すること」「みんなちがうから、みんないい！でこぼこの個性が集う」です。子どももそうですが、実は親がすごく不安だったり、焦ってしまったり、抱えてしまっていることが、子どもに悪影響であったりします。親も安心できたり、ホッとできるとか。「他にも道はあるんだ」と視野が広がるような場所でありたいと思います。そのためには、まずはよく話を聞くことを大事にしています。また、子どもたちは、学校に行けなくなった、行かなくなった理由や背景が色々あります。発達特性であったり、人間関係で傷ついたり、家庭な環境等、本当に様々です。皆の特性が様々なので、皆が集まるとカオスになりますが、そのカオスが良いと思います。カオスの中でも、それぞれが、それぞれらしくいると、意外と調和している感じです。その感じを大事にしています。ルールを作って皆でそれを一生懸命守ろうとするやり方ではなく、皆がそれぞれそこに今日集まった皆にとって一番心地良い感じはどうなのかを探求することを大事にしています。

○うちは福祉系が強いところですが、会社のコンセプトとしては、「バリアフリーをデザインして笑顔を作る」ということでやっています。バリアフリーと言っても、段差をなくすとかそういうことではなくて、日々の生活の中で障壁となるものを皆さんそれぞれお持ちだと思うので、そこから開放して笑顔を作っていくことを、我々はバリアフリーと呼んでやっています。子ども関連を含めて全ての事業に通じてですが、「体験をする」「経験をする」ということを一番大事にしています。障がいがあることによって経験値が乏しくなってしまったり、児童クラブで言いますと、ご両親がお仕事されていることが基本であったり、勿論中には片親の方であったりとかもいらっしゃるのですが、そうした中でも、色々な経験が積めるように、親が仕事して忙しいから、子どもらしい経験ができないというのは良くないということでやっています。児童クラブに通っているお子さんたちを考えますと、習い事に通いにくかったりとか、そういった面もあるので、児童クラブが終わった後、その教室の中でそのまま習い事教室として、英会話であったり、アート教室だったりとか、そういうのも一緒に一体的に提供できるようにしています。子どもたちや障がいのある子どもたちの笑顔も大事ですが、そこを支えるためには家族を支えていかないといけないと思います。家族が不安定だと、やはり子どもたち大きな影響があるので、その中で、勿論一部しか我々は見えないのですが、なるべく介入して家族ごとサポートしていこうということで、色々な物事を考えていくことを大事にしています。

4　運営上の工夫と活動上の問題点・課題

○自治体単位での補助や色々なサポートがたくさんあると感じている一方で、うちのスクールは、全体で 50 人ほどいますが、実は藤沢市内から通っている子は両手で収まってしまいます。それ以外というと、横浜市、相模原市、東京都であったり、遠いと埼玉県や千葉県から来ている子どももいます。オンラインでは、兵庫県と大阪府から参加しています。これだけ広範囲から子どもたちが通っているので、１つの自治体の方と懇意にしていただいたり、すごく助けていただいたりするだけでは不十分なのです。例えば、学校さんと何か連携をしたいと思った時に、藤沢市の学校さんとは教育委員会の

方が繋いでくださり連携できてますよというだけでは終わりません。そうすると、ではその１つ上の単位である神奈川県でやるのかと言っても終わりません。こういう場で申し上げるのは非常に心苦しいところはありますが、市区町村単位よりももっと大きな単位、都道府県単位であったりとか、場合によっては地方、国ぐらいの単位で、支援していただけるような考え方というものがあると良いなと思います。勿論、地域の特性もあるので、実際のところは難しいというのはよくわかりますが、全体感として統一したものが何かあると良いのかなというのはすごく感じています。

○どこも一緒だと思いますが、大人たちは活動に関わっているということは、それなりにお金が必要になり、それを回していくために会費をいただいていますが、会費には限度があります。今は、居場所的な形でやっているので、まだ何とかやっていますが、子どもたちが、段々と年齢があがると、居場所プラス、スクール的な学びの時間が大事になってきます。そういうことをやっていきたいとなると、今月々家庭によっては9,000円ぐらいの会費でやっていますが、それではなかなかできなくなります。今は助成金を取って何とか活動費を賄っていますが、このまま進めていくためには、スクールとしての力が必要になってくると思うと、常勤の専門スタッフが必要なのかなと思います。お母さん、お父さんがやる素晴らしさはありますが、そこではできない分野もあります。このスタッフを入れるためには、お金が必要になってきます。

○ニーズがすごく増えていて、問い合わせがめちゃくちゃ増えています。不登校になっている子が増えていることをヒシヒシと感じています。うちが、なるべくお金をかけないように運営するカラクリとしては、家賃がかかる拠点を持っていません。少年の森、里山公園、海浜公園等、フリーで使える外の場所であったり、あとは茅ヶ崎市で一戸建てのお家を持ちの方が、非常に良心的な値段で、１回2,000円で１日レンタルスペースとして貸してくれたり等、地域の皆さんの良心によるご協力により、何とかやれています。ただ、拠点がないことでできないこともたくさんあります。だから、もし藤沢市の方で、例えば、空家だったり、「こういうところがあるけど、活用してほしい」というような話しがあれば、私たちのような団体と繋いで欲しいと思います。そういう場所と繋いでもらうことで、私たちのような活動がたくさん増えることが必要だと思います。本当に自分たちがこれで食べていこうと思ったら、「とてもじゃないけどこんな値段じゃできないよ」というのがわかります。TREKは、安心して入れる居場所としては、だいぶ充実したと思います。最初小学校低学年だった子たちが、今高学年になってきて、そうすると知的好奇心の広がり方や深まり方がだいぶ変わってきているので、すごく切実に学びの場としての充実というのが、今リアルな課題となっています。学びを充実させていこうと思うと、外部講師を呼んだり、どこかの拠点にスタッフが常駐することも必要になると思います。そのためには、そういう方たちにペイできるものがないとできないとなると、やはりお金の話になります。茅ヶ崎市では、昨年から子どもの居場所の補助金で結構の額を出してくれるようになりました。藤沢市も、是非、早急に、子どもの居場所の運営上助けになる資金面でのサポートが必要かなと思います。あとは場所のこと。また、人材に関しても、例えば、学生ボランティアやシニアボランティアさんがいると思いますが、そういう方々と私たちを繋いでいただけるとありがたいです。藤沢市の方で、子どもの教育の勉強をしてきた方やそういう資格を待っている方と、私たちを繋いでくださるとめちゃくちゃ助かるなと思います。もう１つは送迎の問題です。不登校の家庭が苦しくなるのは、親が結局働けなくなってしまうからです。また、子どもが歩いていける距離感に居場所がないということが殆どだと思います。せめて自転車で行けると良いのですが。それ以外だと、交通機関を使うか、車を使うか、送迎が必要になります。なので、そういう送迎バスがあれば良いといつも思いま

す。本当は TREK に参加したいのだけれども、送迎が無理だからと言って諦めざるを得ないご家庭が今まで何件もありました。それは心が痛いです。そういうサポートがあるとありがたいです。

○今年度から、児童クラブに関して、学区外からの越境ができるようになりました。市内には、たくさんの児童クラブがありますが、もうパンパンなところと、子どもが少なくなっているところがあります。越境できるシステムは良いのですが、ただ現実的に通えないです。学校帰りに自分の足で行かなければいけないので。越境するための送迎バスみたいなものを流してくれれば、その問題は解決するではないかと思います。集中しているエリアでは、これからもまだ児童クラブを作らなきゃいけないという話もありますが、逆に言ったら、もう減っているところがあるので、新しいもの作るのではなく、既存のある場所に流していくというシステム作りした方が健全なのではないかと思います。障がいのあるお子さんたちについては、うちは元々障がい福祉をやっている事業所なので、児童クラブでは、グレーゾーンのお子さんが、うちを目指して来てくれる、これは良い面もありつつ、大変な面もあります。60 人の中に、なかなかの数の大変な子たちがいます。ただ、そこに関しては、ある程度、青少年課さんからもプラスで資金を頂いているので何とかなっている部分もありつつ、その枠組だけだとちょっと足りないなというところもあります。そこは３つの事業を同じ建物でやっており、人をやりくりしながらやっているので、何とか緩和をしているのですが、児童クラブにおいては、良い面とちょっと困った面があり、なかなか大変です。障がい福祉の方で言いますと、特に一時預かりのところで、週末に混みあってしまうというところがある中で、かなり重度化が進んでいる、すごく程度の大変なお子さんたち、所謂、強度行動障がいという、なかなかの重度の子たちのニーズが非常に高まっていて、補助は勿論頂いているのですが、その補助金よりも多く人を配置しないと、とてもじゃないけど対応できないという状態になってしまっています。重度の方は、週末にも専門的な施設を開けていただいて、そちらを利用していただくとか。そうでないと、我々は、どちらかというと、急用で「すぐに預けなきゃいけない、どうしよう」という時のセーフティネットとして開けておく施設という意味合いもあります。５人が定員なのですが、週末は予約で５人が埋まってしまいます。そうなると、本来のあるべき姿とちょっと違うよねという状況になっているのが現状です。予約で、毎週毎週通いたいという方には、もう少し違う施設に行っていただく方が良いのではないかと、仕組みの難しさを感じているところです。

5　連携状況・今後の意向

○仲間とのお話し会を年に２回ぐらいしていて、その時に教育委員会の人たちを呼んで、学校に配布して「もし必要な方がいるなら、渡してください」という形で渡したりはしています。そういう風にしないと、多分、先生方が「TREK というところがありますよ」と紹介することはちょっと難しいだろうと思います。そういうお話し会を色々な団体と開催していて、たくさんではないですが、お母さん方がたまたま来てくれて「うちの子も困っていて、どうして良いのかわからない」ということもあります。そういう会を横の繋がりで今後もやれたら、ちょっと面白いかなと思います。

○児童クラブですが、通ってらっしゃるお子さんたちは低学年の方が多いです。保育園に通っていて、小学校に入ったからということで児童クラブに入ってくるという流れが基本的です。その中で多くはないですが、声としてあるのが、保育園の時は、朝、結構早く預けられていましたが、小学校になった途端、朝８時ぐらいに自分で学校に行くということが基本になるので、親御さんが７時や７時 30 分に出てしまうご家庭では、「朝、預け先がない、困ってしまう」という声はよく聞きます。また、長期

休みの時には、同じように「早くから預かってください」ということを結構言われます。うちは「８時からなので」と言わざるを得ないです。その辺の仕組みを少し考えていかなきゃいけないと思います。児童クラブでは、なかなかその朝の部分では担えないので、色々なところと連携したり、勿論、学校に早く行けるシステムでも良いかもしれないですし。何がしかの形で、朝を補てんすることができると良いと思います。

○８月 29 日に開催された「こどまなメッセ 2025」というイベントに我々も参加させてもらいましたが、それの中心になられているネットワーク組織が「藤沢こどもの多様な学び応援団」であり、そこには大変お世話になっています。そこもガチガチとしたグループというよりは、ゆるっとした繋がりで、フリースクールであったり、色々な子ども支援をやっている団体が、子どもの多様な学びをみんなで支援していこうという集まりになっています。そこの人たちとは、結構、密に情報交換させてもらったり、うちで生徒に対してではなく、広くイベントをやる時とか情報をお送りしたりしています。また、藤沢市ではなく、県央地域にも同じようなネットワークがあり、弊社の本社が海老名にあるので、県央地域の方にもお声掛けいただいて、海老名市を中心とした団体のネットワークにも入れていただいています。そうした連携というか、まずは我々支援団体側でしっかりと繋がっていくことは、非常に重要なのかなと思います。一方で、そこの中でも、各団体によって困り事は全然違うので、共有できるものはありつつ、子どもたちのことは応援したいという想いはしっかり共有できるのですが、小さいところではどうなのか？というと、皆それぞれ困っていることも違うし、やりたいことも違うのでなかなか難しいです。逆にそれが揃ってしまうと、子どもたちも選べなくなってしまうので、その色はなきゃいけないとは言いつつも、連携することの難しさも感じています。ただ集まるだけでは駄目なんだなというところです。そこに、さらに学校の先生であったり、学校さんの名前があったりしても良いのかなと思ったりはしています。そういった形で、より色を増やしていく中で、どうやって連携していくかなのかなと思います。始まったばかりの活動だとは思うので、これから探していくところはあると思います。色を消さない中で、どうやって連携できるかをあの考えていけると良いのではないかと思います。

○個人的に仲良くしている団体とは、よく話しをしたり、相談したりしています。お互いに大きな団体ではなく数人で活動している市民団体同士なので、「ちょっとそれ興味ある」ということを一緒にやったりはしています。そうしたところが強みかなと思っています。そうすると、色々な大人や子どもたちの触れ合いができます。また、助成金に詳しい方に教えていただいたりしています。

○TREK では、まなびこの小川さんと連携することがすごく多く、日々の活動でも「サッカーコートをただで取れたので、サッカーの時は一緒にくる？」とか。私も、TREK のスタッフであるんですけど、まなびこさんのウクレレの先生として呼んでいただいたりもしています。また、藤沢市のスタートアップ事業で多分採用されたこともある Rankup の佐々木君という方が、畑を使ってのコミュニティづくりや子どもの居場所づくりをされているので、TREK の畑活の先生になってもらって、定期的に年間で見てもらっています。あとは、小川さんや佐々木君が主体となって、地域でのマルシェ、お話し会も、年間２回ぐらいやっています。不登校界隈の人たちだけではなく、地域の人にそういう場所があるよとか、こうことをやっているというのを知ってもらう会に参加しています。そこで学校の先生を呼んでもらったりしています。そのほか、藤沢市、茅ヶ崎市界隈の小・中学校、高校でリアルに先生をやっている方々の LINE グループがあり、そこを主催している先生とたまたま友達であり、その繋がりで TREK のことも知ってくれて、来てくれたりしています。学校の枠を超えた先生たちの横の繋がり

で、色々な情報交換をして、勉強会や情報交換会等に参加させてもらっています。そういう先生との交流とかがあると良いです。それぞれの団体で、得意の分野と苦手な分野があると思います。

○主に児童クラブのところになりますが、学校との連携については密にしなければいけないと思っています。うちだと天神小学校とやり取りをさせていただいています。今がどうとかそういう問題ではなく、やはり小学校の特性なのか、校長先生次第で、色々と対応が変わってくるというところが、どうしても顕著にあり、連携の取りやすさ、取りにくさも、校長先生によって影響されてしまうというのは、うちだけではなく、どこの児童クラブも皆さんおっしゃっているところです。何か良い手立てはないのかなと思います。また、我々は箱を持っていますが、日中や週末は空いています。使いたい放題かと思いきや、企画をしてずっとやり取りはしていましたが、我々の建物は、青少年課さんからお借りしている建物であり、児童クラブのための建物だから、他の事業で使っては駄目というという制約があります。そこを取っ払ってもらえれば、皆さんと協力しながらやれることはいっぱいあるだろうなと思います。地域の任意団体の皆さん等との連携の中で使うということであれば OK という風にしていただくだけで、幅は広がるのかなと思います。全ての小学校の近くには必ず児童クラブはあるので。そうした連携は、ルールができてしまえば取りやすいのかなと思います。また、うちは身体障がいのある方の福祉施設等をやっているので、車はいっぱいあります。時間帯によっては、使える車はいっぱいあります。時間帯が、朝夕にかたまりがちなので、日中帯だったら動かせるかなと思いました。そのあたりも色分けしながら扱えるリソースとして、出せる可能性はあるのだろうなあと思います。天神町ではオンデマンドバスという取組が始まり、タクシーとバスの間のようなものですが、そうしたものもうまく子どもたちの送迎のために使う等、発想が広がっても良いのかなと思います。

6　今後の展望等

○我々のこの活動を、今困っている人たちにもっと届けたい、発信していきたいとは思っていますが、例えば、テレビに CM を打つということではなく、本来であれば、スクールカウンセラーの先生であったり、まず一番最初に保護者の方が困った時に頼るであろう学校さんであったりとか、そういったところの方から、「こういうところがありますよ」という風にご案内をしていただく、もしくは他の団体さんでも全然構わないのですが、もっと僕らのことを知ってほしいです。また、僕たちも、他の団体さんのことを知って、「うちではないな」と思ったら、他の団体さんのことを薦めたいです。実際それで他に行った子もいます。フリースクールでは、藤沢市教育委員会が主催の情報交換会を毎年やってくださり、そこに行くと学校の先生とお話しさせていただく機会もありうかがってみると、「なかなか、民間の場所をお薦めすることは難しいです」と言われます。確かに先生方のおっしゃることはごもっともですが、もっともっと、僕たちの活動や色々な団体さんの活動を、広く周知していただければと思います。色々なところで、同じ思いでやられている方がたくさんいらっしゃると思うので、活動の認知を広げていく、「こういう場所があるんだよ」ということを広げていくところは、自治体の方にもお力をいただけると非常にありがたいと思います。

○例えば、藤沢市でも抱えている助成金の情報や、「ここを探したらこういう制度があるよ」あるよというものを、もう少し教えてくれたら良いと思います。割とそういうことに疎い人が多いので、申請時にも「こういう風に書いたら通るんですよ」といった裏技を教えてくれるような教室があったら良いなと思っています。

○うちは、居場所にしたら珍しく外活動がめちゃくちゃ多いのが特徴で、室内にいることが苦手なお子さんもいます。ジッとしていられないとか、人との距離が近いのがちょっと無理とか。いろいろなタイプの子がいるので、自分に合うところを探せることが、物凄く大事だなと思います。

○児童館は、放課後は子どもがワーッと集まってきますが、逆に昼間の時間には、そういうリソースを使うことができると良いと思います。１つの小学校に１つの児童館があるのと同じように、不登校サポート施設も１つあるぐらいの感じだったら通えるし、学校の先生との連携も取りやすいと思います。その地域に既にあるリソースを使って、皆で知恵を出し合えば、結構進むのは早いと思います。

○我々として非常に難しいと思っているのは、例えば、鉄道であれば、駅を置いて電車を走らせれば、そこに人が集まって乗ってくれる、というのは結構わかりやすくて、どこにお客様がいるのかというのはかなりわかりやすいです。一方で、フリースクールは、どこにニーズが埋まっているかというのは、我々事業者はあまりわからないです。一番最初に助けを求めるところは、やはり学校なのかなと思います。そうしたときに、我々としても努力しなければいけないことはたくさんあるのですが、やはり学校さん等、一番最初に繋がるところの方々と、しっかりと連携を取っていかなければいけないと感じています。計画を策定される中では、我々は学校さんと連携したいので、「します」と言っていただければ、いくらでもという気持ちでいます。そこをご検討いただけたら嬉しいかなと思います。大体の保護者の方が、自分の子どもが学校に行かなくなるとは思っていないです。なので、学校に行かなくなった時に初めて「どうしようかな」と考え出すと思います。その時に初めて色々と情報収集をするのですが、お子さんもいるから、なかなか情報収集する時間すら取れないという風になってしまいがちです。「どうしよう、どうしよう」と言ったまま、時間だけが過ぎていって、しんどくなっていくということがあると思います。もっともっと早い段階で、別に「学校に来るな」と言っている訳ではなく、「もし学校が合わなかったら、こういう学びの場所もあるよ」とか、「学校がちょっとしんどくても、例えば放課後だけは楽しく過ごせる場所があるよ」とか。そのように、学びというものを、勿論、学校が中心にあって然るべきだとは思いますが、「もっといっぱいあるぞ」ということを、市が公立学校をやっているから、それしか言ってはいけないということではないと思うので、意識啓発というか、是非、市民の方々に周知するような、何らかの方策をご検討いただけたらありがたいと思います。その中の１つの例として、我々が何かできることがもしあれば、やらせていただきたいと思います。他自治体に比べて、藤沢市さんからはかなりお声掛けいただけることが多くて非常にありがたく思っていますので、今後も何か連携できることがあれば、積極的にお願いしたいと思います。

○自分達で他の団体さんと繋がる会は持っていますが、もう少し藤沢市さんがそういう会を持ってくれたらありがたいです。

○私の子どもが学校に行けなくなった時も、学校の先生にまず相談しましたが、学校の先生もあまり知識がないというか、どこに相談しに行けば良いのかわからない、ということで、とりあえず、市の子ども関連の課に電話をしました。ただ、その時も、正直、具体的に「では、次にここに行けば良いのか」という感じで、「光が見えます」という感じにはなりませんでした。なので、自分で情報収集して出向きました。ものすごくニーズは増えていると思うので、知識があり、繋がりやネットワークがある人が、１人窓口にいるだけで、本当に差し迫っている人たちの道を、案内役ではないですが、そういうコーディネーターみたいな人がいてくれたら、本当に良いのではないかと思います。そういう場にフリースクールのメンバーが月に１回はいるとかがあっても良いと思います。それぞれの居場所をやっている方々は、自分たちがやることで結構いっぱいいっぱいだったりするので、横の繋がりとも作りたいですが、そうしたことを俯瞰して見れるポジションにいて、横の繋がりをうまく連携させて

くれたり、循環させてくれたりという役を、市の皆さんやそういう専門のスタッフの人を市が用意してくれたら、それぞれある場所がもっとより生かされるのかなと思います。また、資金のサポートをよろしくお願いします。

〇個人情報であったり、色々な面があるのは勿論わかるのですが、やはり困っているお子さんや家庭を一番最初に発見するのは、学校だと思います。学校が掴んでいる情報を、近くで活動している我々に伝えてくれるだけで、サポートの仕方をいかようにも工夫できると思っています。例えば、それがうちの児童クラブに通っている子なのであれば、うちに声を掛けてくれれば、こちらでも何らかのアクションを取ることができます。そういう連携がしっかり取れていかれれば、子どもたちのためにはなるのかなと凄く思います。また、グレーゾーンのお子さんの理解を学校の先生に求めるということも、求めてはいきたいと思いますが、やっぱり大変だと思います。なので、全員が全部を知らなくても、スクールソーシャルワーカーが各学校には配置されているので、スクールソーシャルワーカーさんと我々がうまく連携を取っていくことで、情報をしっかり伝えていくとか、そういう仕組みができると良いと思います。どこが主管して担うのかというのが非常に難しい問題かもしれませんが、そこの連携が取れるだけで、変わってくる子どもの未来はたくさんあるのではないかと思います。

以上

10　10月８日（水）遠藤地区

日時	2025年10月８日（水）15時00分～15時30分
場所	地域の縁側
地区	遠藤地区
事務局	株式会社創建、遠藤市民センター

※この会では、当日参加された16名の方々から、「子ども居場所」について、自由にご発言をいただきました。

1　実施概要、参加者

居場所の名称	種別	団体名	参加者氏名	役職
もんのきの家	地域の縁側	もんのきの家	－	－

2　団体概要・活動内容

○平成30年10月に開所しました。
○「みんなが主役、みんなで作る、みんなで楽しむ」を合言葉に活動しています。
○毎週水曜日（祝日・年末年始除く）午後１時～午後５時、申し込み等は必要なく、誰でも参加することができます。
○参加者は高齢者が中心ですが、慶応大学に通う学生も参加しています。
○流しそうめん等のイベント時には、親子でいらっしゃる方もいます。

3　子どもの居場所に対する意見

【遠藤地区の特徴】
○小学生だと秋葉台小学校になると思うけれども、小学生がここに歩いてくるには、少し遠いと思います。また、この地域の周辺では、遠藤地区北部に比べると子どもが少ないと思います。
○この地域の縁側の場所は、遠藤地区でも西部に位置しており、遠藤地区内で割と子育て世代が多い北部の方が、子どもの居場所としては適していると思います。
○この場所で地域の縁側を始めた当初は、近くに住んでいる子どもを誘ったこともありましたが、「今日は塾でダメだから」と断られたことがあります。
○このあたりの子どもだと、学校から帰ってきたら、すぐに塾や習い事に行くことが多いと思います。
○遠藤地区は、昔から住んでいる人と、割と最近引っ越してきた人をあまり交流はありません。なので、子育て世代の情報はあまり入ってきません。若い世代が自治会に入ってこないため、情報が届かないという問題があります。
○遠藤地区の中で子どもの居場所をつくるのであれば、子どもが集まりやすい、遠藤市区でも中心となる場所でないと、なかなか難しいと思います。

【居場所の定義・目的の必要性】

○居場所という言葉が何かを意味するのかが明確でないと、地域の方とかに「居場所を作ってください」と言ったとしても、言われた方が「何をすれば良いのだろうか？」となるのではないかと思います。

○居場所をつくるというのは１つの手段でしかないと思います。では、「何のための居場所なのだろう？」という目的のところがもう少し明確になってくると、具体的にどう居場所をつくっていけば良いのかが見えてくるのではないかと思います。

○子ども居場所の目的を明確にした方が良いと思います。

【子どもにきてもらうための工夫】

○居場所に行きたいと思うのは、「あの人に会いたい」というのがあるからだと思いますが、そうした関係性を構築するまでが結構大変だと思います。それは小学生に限らず、中学生、高校生、大学生でも同じだと思います。そうした「また行こうかな」と思ってもらえるまでの関係性をつくるまでの働きかけが大切で、まずは来てもらうためにきっかけになるイベントなのかもしれないし、そういう初動的な動きが必要だと思います。

○自然に集まるというのはないと思います。何らかのきっかけがあって来てみて、「楽しいな」と思うからこそまた来るのだと思います。

○子どもたちを集めるための手段、例えば、どのようなイベントすれば集まってもらえるのか、来てもらえるのかを考えた方が良いと思います。ただ、例えば 10 人中 10 人が満足するイベントなんてありえません。皆さん、自分が興味のあるイベントなら参加してくれます。そうした中で、どのようなイベントをして集まってもらうのかは、なかなか難しいです。

【子どもの居場所として必要なこと】

○子どもの居場所であれば、子どもが遊べる場所を作ってあげないと、なかなか難しいのではないかと思います。どこでも良いという訳ではないと思います。雨がしのげて、炎天下で暑い時でも室内にいることができて、遊んだり、勉強したりできる場所でないと難しいと思います。

○こういう居場所があったとしても、自分でそこに行くことができる子どもだけでなく、そうした居場所に自分からは行くことができない子どもたちのことも考えた方が良いと思います。

○藤沢市内の 13 地区で一斉に始めることは難しいと思うので、例えば、どこかモデル地区を設けて、先行的に居場所事業をしてみても良いのではないでしょうか。

○場所を提供してもらうことが必要だと思いますが、仮に場所を提供してもらったとしても、その居場所をどのように管理していくのかは大変だと思います。週何回やるのか、何時から何時までやるのか等。

○例えば、「毎日、無料で勉強できる」等、明確な目的があれば、塾代を払う必要がないという理由で子どもが集まる可能性はあります。

○居場所を開く頻度が高い方がよく、「いつでもやっている」という居場所は、保護者にとっても非常に助かるものとなるのではないでしょうか。例えば、開催頻度が、月に１回や２か月に１回程度だと、居場所ではなく、単なるイベントになってしまうのではないでしょうか。

以上